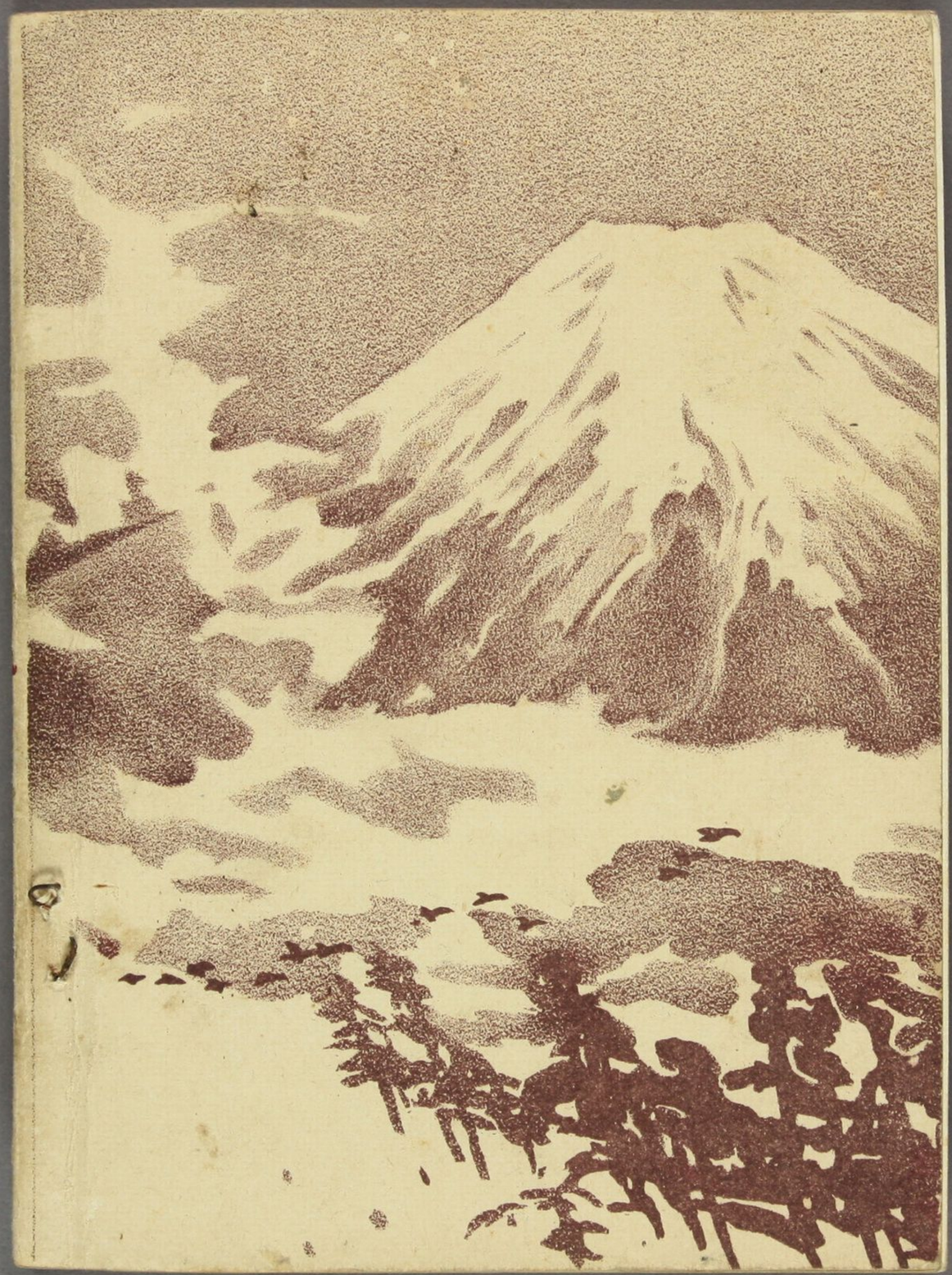
詩國小觀

詩國小觀

浩々歌客著



大賀文庫

大連圖書館

詩國小觀

大賀文庫

詩國小觀

馬子才

浩々歌

浩々歌天地萬物如吾何。用之解帶食大倉。不用拂枕歸山阿。
浩々歌天地萬物如吾何。凩原枉死汨羅水。夷齊空餓西山坡。
丈夫榮榮不可羈。有身何用自滅磨。吾觀聖賢心。自樂豈有
他。蒼生如命窮。吾道成蹉跎。直須爲弔天下人。何必嫌恨
傷丘軻。浩々歌天地萬物如吾何。玉堂金馬在何處。雲山石
室高嵯峨。低頭欲耕地雖少。仰面長嘯天何多。

啓上

東京も若葉の都と相成候、緑陰幽草勝花時の句眞に不欺我
候、逗子邊は目下薔薇滿開にて不日山百合の季節と可相成、
芳事は却て夏期に多きか如く候。
來論に從ひ何か老兄御參考の爲め申上度候得共、別に是ぞ
と申すとも無之唯だ文學も決して常識を離るゝものに無之
と存候間此邊御賢考相願度存候。
詩とか美とか抽象的の話は小生には一向感心出來不申候、
文學も到底人事の一片として可觀之候、世には文學者とて

胸中一點の主張無き人も有之、彼等も聽聲畫若しくは社會
の貯音機として些少の價値は可有之候得共小生が老兄に希
望する所は此外に在り。
何時もながら妄論、偏へに老兄の之を妄聽せんことを願ふ也、
早々不一。

五月二十一日

角田老兄

猪一郎

活々歌客に寄す

あめの下にはいづくにか、
　吾皇のめぐみうるはねぬ。
難波のあしのいりねだに、
　ない〳〵よしや去年ことし。
むかしおぼゆるとよとみの
大城のあとのゆるぎなき
その雄心をこゝろにて
日々にたにぎるふでのつか。
咲くやこの花ふでのはな
　なにはわたりに春ありと
津の國ひとも世の人も
　君によりてぞ知りそめし。
されどこゝろは冬ごもり
たゞ宵々にわくがれて

たゞるはいづくしら雪の
ふじの裾野のふるさとの
家居たづねてさまよひて
葉ひろくま櫃たつかをを
今かたゝくとたゝずめば
われとおどろく夢あはれ
さすがにをしきその夢を
けふよりわだになしはて、、
旅にもおやにかしづくと
君は今こそつげたまへ。
あはれうれしといはひてん
とはにさきくとことほかん
うさもつらさもけふよりは
君かゝにしいりえねば
ますらをこゝろいやたけく
みやびこゝろもいやまして
いよ/\ゆうにさわやかに
歌ひいづらめ君こそは。

東京にて　　稲村眞里

題して詩國小觀といふ、所謂小說に似たるものあり、所謂韻文に似たるものあり、所謂戲語に似たるものあり、所謂紀行に似たるものあり、唯だ吾が一片の情想錄のみ。」

集中多くは曾て國民新聞紙上に錄せるもの、一家言の如きは大阪朝日新聞より抄せるものなり。

風塵役々、白家の憶念を記せんが爲に、特に蘇峯先生の來書と親友眞里子の歌とを卷首に掲げたり。

詩の國、廣し、詩の國の首都、遠し、吾は讀者に
依て更に前途の美しき風光を觀んことを欲す。

庚子地久節日於浪華

浩々歌客

目次

老天　一
霞浦一瞥　一四一
夜半逍遙　一五〇
ふくろふ　一五九
無聲聲　一七一
一、山茶花下　一七一
二、麓の虎士　一七五

明暗　二〇五
田園雜興
一、彼の盧　二三三
二、家庭眷屬　二三五
三、鷄　二三七
四、蟻　二四六
五、童僕　二五四
六、繭眠兄　二六七

七、墓　二七〇
八、故鄉　二七九
春魂秋夢
一、題壁　二九八
二、曉　三〇〇
三、春愁　三〇二
四、夜　三〇五
五、秋と詩人　三〇九
花下醉翁　三一三
山のたより　三一三
富士山を憶ふ　三一八

滑稽時代　三四七
雙燕偶語　三五三
一家言
一、大文學と人　三六〇
二、派華青年文士　三六五
三、詩人ホウソーンに就て　三六九
四、青年文士の思想　三七三
五、青年文士と社會　三七七
六、文學の平凡化と氣慨の缺乏　三八一
興亡と詩人　三八八
雲濤　三九四

漢詩目次

文園
春感
湖上落雁
丙戌新年
海樓望鄉
梅花
梅花
寄懷米山梅擧在米國
倚劍長歌
滄浪臺

詩國小觀

老天發端

大賀文庫

浩々歌客著

西の方より南に低れゆく富士の山勢、蜿蜒り々々て丘陵を成せる處
奔湍岸を嚙み岩に激して急流長へに絶ねざる富士川に傍ひ、壑深く

目次

姑蘇城外
送天囚西村子俊之金陵
浩々歌

目次終

崖高く山重り水曲りてさながらコロボックル人種の住みたらんかと覺ゆる自然の別寰區、湫窪と名けたる山谷の部落あり。

孤村を行き盡して平野開け、蘺蕪青々として疊を敷きたらん如き路傍に、尖塔一基聳ゑ立てり、高さは三十尺に近く、周圍は二百尺に餘り、繪に描きし埃及の金字塔に異ならず、全塔層々重なりたる頑石もて成り、大なるは臼の如きものより、小さきは拳ほどのものに至り、稜あるもの、圓きもの、石理疎鬆なるもの、牛の臥せる如きもの、色綠潤あるもの、人の如く立てるもの、索々として疊なれたるなり。

時は五月の某日、此塔の中腹に祭壇据られたる摩利支天の石像を

祭るとて、村の老若はいふもさらなり、近き水の村山の郭より、杖に縋れる翁嫗、脊に負はれたる兒孫、娘の紅粉に裝ひて人目幸くべく盛衣着けたる、壯年の巾冠して隊をなし手を組みたる、その心あるもなからんも、賽錢投げて拜するもの雲の如し、この群集に歡樂沽らむとて、所在の香具師、機鏡師、歌祭文、聲色種々の小賈人爭て肆を張り、招牌を揭げ、競うて客を呼ぶなる。

印度の山中にて捕へたる樽より太き大蛇、飛驒の溪間に生れたる人面獸身の怪物、山雀の技、猿の藝、代は見られてからの事と高らかに吹べば、此方には戰爭の傀儡、兵士の影畫、獅子舞の滑稽、祭文の物語、推しつ推されつ肩摩の雜踏をさしまねきつ。油紙の日幕

の幾多立ちならびたる下には、菓子を賣り、玩具を賣り扮裝具を賣り、繪畵を賣るもの、蒲席を舖き牀閣を安き、團粉を列べ酒を酌み魚鮨をつくり、油餠を煎るもの、壇上高く演說して藥衒るもの、調おかしく歌ひつゝ「讀賣」を沽るものなど、その盡し得る限りの方便もて、言ひ得る限りの口辯もて、各その勞力の償を得むとぞ努むなる。

賽詣の群集は、夢にだに人間の消息知らざるべき默々の摩利支天の石像に拜跪して、そが應驗の顯彰なるを語り、塔前の賽箱に投ぐる錢貨の價もて、現在未來の運命を福せんことを願ひ、さて後積日の生計に勞れし情懷をば、首を延べて相待てる歡樂の供給者に賴りて

慰めんとすらむ。

かくして天幕の裡には濁聲の歌高く、躍るが如き舞踏開かれ、簀屏の陰には山菜野肴の酒宴催されて、おぼつかなき絃の音も湧き、あやしげなる裙釵の影も搖ぎ、醉ひて狂ひて後には尉に前後を知らず夢に入るもの、笑みて樂みてさて徐ろに步み去るもの、各そが歡樂に嬉しみ興じて、路遙かなる浮世の旅の一休憩、沽りたるものは財囊の底重うして、終日の勞作その報酬あるに滿足し、買ひたるものは胸の中に快樂を宿らせて閑時の榮華に滿足し、さらに生活の路に啓行つものもあらん、家庭の平和なる團欒に返るものもあらん。報酬の一半を爺孃妻子に與ふるものもあらん。親に話し兄弟に語りは

た情人に語りて、和樂の一部を分つもあらむ。

限りあるの日に限なき興も盡くべし。買ひしものは去りぬ、沽りし
ものもまた去りぬ。詳集の去りし跡は、さながら疾風暴雨の歇みた
る後の如く、日を蔽ひたる油團は裂かれ、客を招きたる簀はちぎら
れ、竹皮、經木、繩片、碗皿瓶鉢の碎片、餕餘の食品など、許多の
犧牲は、紛々として戰場の屍の如く散亂し、狼藉して遺てられあり
あり し繁華は刹那の夢の如く消え失せ寂寞たる氣象は、冥茫の裡よ
り平郊の上に現はれ、黃昏の景靜に穩かに忍ぶが如く、黯然たる夜
の色に暮れゆけば、獨り黑く茂りたる青葉の間、曲りたる小山の峽
を透りて、たど〳〵しくもほのかなる家々夜話の動響のみ、微に風

に遞られて、巨人の如く立ちたる尖石塔の邊に通ふ。

美しき女神の夢より醒めし眸子の如く、深くも遠き碧霄の一方に、
一點の明星ぱつと現はれ、やがて二點三點空色黑くなるまゝに千點
萬點きらめき出たる衆星は、歷劫限りなき永遠の愛と崇嚴との冐し
難き光芒をば、運命毀譽禍福ある生活の働の須臾止みたる夜の人寰
に投げて、言はず語らざる暗中の尖石塔を、淡く朦朧に照し出す。
夜の聲その邊に訪れ、夜の光その面に照りて、靜に立てる尖石塔は
終古に日に炙られ雨にしめりて、苔蒸し葬に封じられつゝ、そが過
去の緣を彰はさざる乎。
秘密はその石の底深くも藏められて、竟に人に語られざる乎。

第一

清く淺き小流にわざと架けたる涼榻に、澁團扇うごかしたる手を休ませ、丈高からぬ軀に着けたる新しき輕衫の襟開きて、肉つき豊かなる白き胸を吹かせつゝ、清く潤ありて夢る如き眸采に、照り渡る月をながむる少女あり。身を斜にして榻下の水聲の嗞嚅く如き音を聞かんとすらん、美しき襟首を月影にさらして打傾きたる、さながら魂を天に奪られたる風情せる背より、柔かなる雙の肩をむづとばかり捉へられ、驚ろたる様にて顧へれば、一箇の少年笑みつゝ立てり少女も月に背きて微笑みながら、

「誰かと思つて！、愕りするわ。」

小年は肩を捉らへしまゝ倒るゝやうに榻に踞け、月に晒せる少女の半面を覗きこみて、

「誰だつて？、今夜來いと云つたじやないか、定めて居るくせに。」

「おほゝ……わたしは今まで來ないから、もう來ないと思つてたよ、よく來てくれたね、」

「わたりまへよ、」

「嬉しい！、」

と言ひつゝ少女は少年の身に倚りかゝりて、重さに傾きし少年の顔をながめ、

「おほゝ、眞面目な顔をしてさ、」

「眞面目もあたりまへじやないか。」と少年も少しく笑みつゝ、

「おまへが此村に來たばかりにおれは今まで爲たことの無い喧嘩もする、夜遊もする、兄貴から叱言をきくこともある、堅物な辛抱な孝げだ、皆おまへが迷はせたなんて、揶揄はれるのも誰のおかもの、今夜來ないと思つたも無いもんだ。」

魂をその躰より抽きて少女の懷に捧げたりと見ゆ、少年の眸は月に光を放ちてぢつと少女に對へり。少女は澁團扇の柄を雙の掌に弄ひながら、得意顏に負める所ある容なり。

「さう、わたしは濟なかつたね、おまへさんを其樣にして、けれど

わたしが惡いばかりじやないわ、おまへさんが關はなきやわ宜いのだもの……だけど……わたしももう長く此方に居るわけにも行かないで、明日は歸らなくちやならないのだから……だけれど……今夜さりでもうおまへさんとの定情は止さうか。」

といひて偸むが如く男の顏を見たり。男は少し激したるやうなりしが靜に顏を傾け、

「馬鹿な、今止さうなんて、止せるものなら初手から爲ない、笑はれたつて怒られたつて痴呆にされたつて關はないのだ、皆が種々んな事をいふのは嫉妬でいふのだ、それをおまへが止さうなんて事があるもんか、明日歸るつてのは前からの話しで分つてる、それを角

にして止さうてのは嫌だからといふのか、家へ歸つたら約束のやうにするまでしやないか。」

男は木履を脱ぎて雙脚を清水に浸し、踞けしまゝ足の指先にて石礫を弄びつゝ空になりて少女の應を侍つ如し。

「なんで嫌なもんかね、わたしや嫌じやないけども、おまへさんが皆に何の彼のと言はれてなんて、わたしのおかげだなんて、嫌のやうに言ふからさ。」

と言ひ終りたる少女は、冷然としてさながら思ひ絶えたる如く、清みて天心に中せる月を睨むやうに仰ぎたるを、男は熟ら横さまに見入りてありしが、ふつくりと豊かなる頬の月に映じて白く涼しげに

形よき鼻の稍張りたる、薄くして紅なる唇のわざゝ堅く結びたる、女の顏に何の表彰か見えけむ、やにわに抱きよせて小聲に、

「惡物！人をだまかして、……」

少女は抱かれたるまゝ唯微笑むのみ。流は細々として靜寂の消息を私語き、月は皎々として天の戸高く夜を守る。四隣遠からぬ家の戸に蚊遣火の名殘も消えて々々として、畑に淡くかすみたる森よ林よ丘よ遠山よ、靜に夢に臥たるが如し。

少女は心つきし容にて起ちあがりつゝ、

「あゝ遲くなつた、夜が更けたよ、もうお歸りな。」

言ひつゝやがてたち分れ、徐々彼方の流に近き夜視には黑く山の如

く見ゆる茅葺の家さして行きしが、急に引き返して、默坐せる少年の腕を捉らへ、

「孝左さん、宜いかへ、必定だよ、盟約を反古にすると聽かないよ」

言ひながら、痺るゝほどに強く手を握りしめぬ。

少年は點頭きて、

「うむ、宜いとも大丈夫だ、おまへこそ忘れるな。」

月は何時しか妬雲に陰り、少年と少女との影も暗きに隱れゆきぬ。

深けゆく夜半の天と地、人の世の外なる水の音、蛙の聲のみさわたる。

第二

湫窪の村中、小山に傍ひて小松原と字せる南面の一區地あり、翠綠の色滴れんばかりの青松の柯、交へたる陰に茅屋一軒、孝左はその家の次男なり。

おのれ耕耘して食ひ織りて衣るてふ小農にて、その地の慣として少ばかりの紙漉きを業としけり。父母は夙く世を去りて、唯一の朴訥なる兄の手に成人り、朝の星を戴き夕の月を踏みて働くとは、まことに孝左が兄の業を助くる樣を言ひ得たるものなり。世の人々がおのづから逸樂の趣味を持てるに侔しく、孝左は自然に勤勞の賦性を持てり。その勤勞は、奴僕の暮を冀ひ傭人の價を望みてなすとは異に、まことに勤勞をは樂みとも人の自然ともなせるやうにその身に

具へて生れたらむ如くなりき。人々その勞を臥床に慰めその憂を枕に解かむずる間に、かれは勤勞を夢み作業を想ふ。夜は勤勞に明けて、その日は勤勞に暮れゆく。しかもその心頭これが爲に苦しと思ふと露なきのみならず、もし苦しと思ふとすれば、その勤勞のなし難からむ折の無聊なる時にこそありしならめ。

世の人は利をもとめ名をわさりて榮華をたづぬる時、眞宰が設けかれし自然の規矩を超えて、罪をとると水を飲むが如くなる時、孝左は勞働に務めて作業に安じ、自然にはげみ自然につとめ、給せらるゝまゝに食ひ與へらるゝまゝに衣る。物に求むるとなければ、醴の如き罪の杯を飲むと無く、事に荒むと無ければ、蝮の如き毒の針

に刺さるゝと無く、他に俟つところ無く賴むところなければ、落膽するとも懼るゝとも無し。悠々たる優かの晝なきが故に、耿々として眠られざらん憂はしき夜はかれの身に臨まざりき。

されば、よせてはかへし、回へしては寄するなる浮世の波に一葦棹さし泛べたるその舟は、暗礁淺瀨に乘りわぐる慮無く、さながら春の波漾々たる靜けき海を渡りながら、寄邊の彼岸は何處なるべきかふのれ自から知らざりき。永劫盡くとは見ねぬ宇宙といへる大なる範圍の裡の、人寰といへる世に、誰ぞ父と母との身よりかれを生みたるに任せて、勞して後に糧をば得るの方便に順ひ、鳥の林にその餌をあさり獸の野にその食をたづぬるが如く、水自から流れ山自か

ら青きが如く唯自然にして勞働に自得せるなり。

孝左の運命の樹は、落りて消ゆといふ花無き爲に、その根は水の邊に蔓り、その枝は長へに露かかれ、食ひ飲み衣ると臥して後醒めてまた働き、病來れば病み、死誘はゞ死したらむまで、小松原の松の小陰の茅屋に、山の禽、野の花ともろともに自然の生活をば續けたらむ。

鋤鍬とりて圃に出でさては紙漉きの業に勵むなど作業の擧動のかいくしき外は、さながら木偶の如く石の如く無感覺のやうなるに、鄕黨は何時しか變物の孝左と渾名したり。まことに鄕黨は作業の外に感覺ある孝左を認めたるは鮮かりしなり。

兄は朴訥にて多く弟に似たれど、孝左の如くは作業に強からず、唯だ世に多かるべき好人なり。弟を愛するとは深くて劬はりつゝも、心を寬げ身を休めよなど勸め、鎭守の祭禮、農休みなどには幾許の費を與へて遊びにと促すとあるも、變物と稱へられたる身には、家にありて易げなる手業するが孝左の休養なりき。

かくばかり感覺鈍げなる男の痴漢なるべきかと疑へば眉濃く秀でゝ眼皆昂がり、鼻柱透りて唇は緊りがちなる、顏の色さへ〳〵しくて眸采の黑く光あるは、際だちて風采を潔く視す。笑ふと少けれども、笑へば小兒も馴染まむ面影の、何れに人に嫌はるべき容貌にあらず。

春は朧ろに月霞み花夢の如き夕なりき。村にては際だてる家に祝事
ありて招かれし兄の病めるに、代として強いられ、屈托氣に饗宴の
坐に列りぬ。好める蕎麥切をさへ遠慮せるにも似ず、喈まざる山醪
をわくまで強いられ、やがて坐には得堪ねで死せるが如く席の片偶
に臥しぬ。幾時經たりけむ目醒めたる時は、客皆歸り盡し家内は鼾
の音のみ高く、戸鎖もせざる窓の格子よりぬるみ顔なる月の光朧ろ
に清く室に入りて、おのれの身は蒲團して被はれぬ。作業に鍛へた
るたくましき骨格は、野に臥し山に寢ぬとも慮ふべきと無き人を、
誰かは意注きて衣蔽ひたらむとだにも覺ねず。起きて歸らむとせし
がさすがに戸鎖をおのがまゝに開かむとの後めたさに躊躇ふ時、人

の氣して、暗にも美しげなる少女の顔は傍に近よりて、優さしく私
語ける聲もてかれを留めぬ。世にも異しき心地に應ふる言葉も出で
ず、黒き眸を動かして夢の如く凝視めしが、やう〳〵にして今宵の
欵遇を謝し、さてはいたく醉ひ臥したる粗忽など憶したる容にて言
ふを、少女ははゝと笑みて、彼處に蓐あり臥したまへといひ、良久躊
躇ひつゝ退き去りぬ。かれが、少女は此家の親姻にて此夕客を欵待
せる人なりと心つきしは良久の後なりき。
孝左の寢ねて歸らざりしは、此夕をもて始なりともいふべし。翌日
は未明に起きてなほ消ねざる星光の下、例の如く鍬肩にして圃に行
きぬ。昨夜淡黯き室に少女を觀て、その顔容のいと麗しきを知れり

その聲のいと優しきをも聞きたり。たゞ聞きたり觀たりといふまでにて、それを再び觀たし聞きたしとも思はざりしが、孜々として畦より畦を耕し靑浪を疊みたる麥生の裡、筍笠を傾けて烟霞に浴せる此日、當面少女はかれの傍に來りぬ。

村に程遠からぬ靑樹村の源吾の娘阿袖といへば、村人知らぬもの無き深山の櫻花、美しき評は湫窪の少壯にも知るものあり。されば阿袖が近き日農事の助手にとて端なくその姻戚の家に來り居るを認めては、東家の子、西院の男、浮きたる心々に、此花の露に濡れむとを願ひ、彼宵の宴はその人々に好き機を與へ、滑稽をいひ諧歌を唄ひて、外ながら此少女の愛を買はんとしわざと醉ひどれたる容にもてなして臥たるもありき。されど淡く刷きたらむ如き眉の形美しく秋の水に似たる眸采清く唇の厚からず結びたる稍圓形なる阿袖の顏容は、何人にも心を留める樣なく、訝しくも人々の變物と呼べる孝左をは圍に訪へるなりき。

阿袖は、長閑に春の日をうけたる筍笠を目ざし隴の細逕辿りゆき、水より淸き眸采あげて呼ばんとせしが踟躕ひ、筍笠の仰ぐを待てり淺黃色の筒袖布子に豐肥しき身軀被うて、阿彌陀に戴きし筍笠は、やがて裏をかへして淺黑く汗にじみし顏に黑眸の光あるが、端なく此方に向けるを、濡む眸采に泥と視て阿袖は笑みつゝ、輕き挨拶に昨夜の薄遇を謝び、その作業のいそしめるに慰藉の詞など言へ

ば、さすがに忝き面地に應二ツ三ツするに、阿袖は傍近くより、蒔子の話より世間の噂、はては人を讃め稱へ鄉黨の賞づるとさへ告げたり。されどかれは唯々と點頭き、少しは笑ひ少しは和ぎ、親しげに慕はしげに言ふ阿袖の言葉に比しては石佛の如く、意あり味ある情を解かず、久しくして今さらに阿袖の爰に來しを關心さしやうに、何の用にて圃には來しかと問ひぬ。

阿袖はその眞面目なるに出さん言葉に困せしが、はゝと笑みて、おまりに出精なればせめては話說してなりと慰むふしもあらんとて來れりと、嬌羞を帶びてうち傾けり。かれの眼は黑き光に奇しき色もて瞬ぎぬ。

阿袖は青みし麥穗やさしき指頭に捧ひながら、何をか言はむとまつさまなるを、かれはそは嬉しありがたしとばかり、頓とはへ無く、やがてはのそ〳〵畦をたどり、握りしまゝの鍬の柄を動かし初めて再び言はず、人惡るく冷然たるにはあらで、邪氣なき小兒の擧止に髣髴たり。

兩個はかくて相分れぬ。美しき女子の優しき言葉の露に濡れながら孝左は阿袖の情を解かず。阿袖はまた戀ひ慕はるゝ萬衆の掌を拒み、この石の如き無感觸のかれに賓緣り、幾度か訪ひては語り逢ひては挑む。

鄉の少壯等は初め阿袖と孝左と語らうを認めても變物と知られし人

の身に心かけざりしが、數かさなりて兩個の親しげなるを見、漸次に嫉妬の情惱ましく、させるとにもあらぬを私語き傳へ、竟ては阿袖は變物男と嬲みたり、變物男が美人に惚れたりとの風聞、明らさまに孝左の耳にも入るやうなりぬ。

さすがに女の情ある言の數重ね、情ある容顏の數はのめくに依りては、容易くは鳴るまじき心線の端に何時しか夢の如くかすかに情韻を聽き得たるべけれ、おのれはそを覺るほどにてなかりしが、衆口は忽焉として醉ひ臥せるものを醒せる如くなせり。情の谷の唯乾涸たる荒野にひとしきが、水の音遠く聞えたり。やがてその谷に流れこむやうに聞えたり、やがてその水はおのが情の谷に流れ來つゝ

あるを識りたり、今はた愛の泉淙々と眼前湧くが如く滿ち充ちぬ。情の上には石よりも冷かなりし身、今は化して羊の如く親しげに順になりぬ。設置かれたりとしも無き心底の累惡は除かれて心猿躍り意馬狂ひそめぬ、唯管自然のまゝなりし勤勞は、何の爲に働くやなどわれから問を起して、俟つことあるの勞作となりぬ。爲にすること無く望とては世に置かざりしかれは、今一箇の美しき愛の神に對ひて事毎に擧動ふやうになりぬ。實なかりし衆人の言葉を實にして阿袖と離れ難き戀を契りぬ。

勞作に熱心かりしかれは、愛情にもまた深く切なり、雲烟にひとしく眼を過ごしたる阿袖に對ひて今は荊棘の中に百合花を得しやうに

滿腔の情を擧げて女に捧げたり。眠れる時だにも、愛のために心は
醒め居たり。心の聲は靜におのれながら愛の名を呼びぬ。
阿袖はわが掌の花よ、わが天の月よ、また無く完全きものは他にわ
らじ、われを抱けわが身を庇へ、汝の眸は櫻の花の苔の色よりもな
ほ艶なる瞼に傍うて、春の水より温げなる、汝の齒は瓠の犀よりも
美しく、香ゆかしき息通ふその紅の唇の隙より見ゆる。汝の髪
は烏羽の濡れたるよりも黒く豐かなる頰は嫩き花瓣の如く馨はしく
艶わり。汝の手は柔かにて蕑の芽の如く圓らかに温かき玉の如し。
肌、脂凝つて雪より清らに、頸も胸も腹も脛も腿も、さながら名工
の魂注ぎて作りたらむ白玉の彫物の如く、汝の躰軀はわが胸に印

の如く刻まれたる、銀も金も珠も如何なる寶も、汝に換ふべきもの
は世を重ねてもあらず。と、此聲胸に音づる時、かれの身は沖に浮
きて、温かき腕の肉その肉を抱き、香ばしき呼息その唇に通ひ、嬰
兒の搖籃に天地を夢にせるよりもなは安く樂しくわれも無く人も無
く、佛の國はこれかとばかり神の世とはこれかとばかり思へるなり
落花あはれに泥にまみれ、雨細く風纖く行く春を送り、若葉の綠樹
々の梢に茂く、日の陰清うして麥漸く熟らむずる頃には、孝左は情
あり顏の人と化りぬ。阿袖の愛は一層深く、親姻の家に在るの期も
既や盡きたるを、種々の口實もてなは幾許の時を延べたり。
されど終に歸るべき期は來りぬ。父母の招き頻なるに阿袖も口實の

方便盡きれば、こゝに孝左と伉儷ふ相互の盟約を固くし、證の表とりかはし、凉棚の邂逅をしばし別の逢瀬とはせるなり。

第　三

孝左は阿袖の言を天使の示現の聲とも聞き做して、將來の望は平明の光のやうにその前に輝きぬ。夢に現に愛戀はかれをその掌に玩びなぶるをわれから玩ばれなぶられ居たり。

若き鄕黨は嫉妬の言を出す。かれは阿袖に弄ばれたり、阿袖はその家に迎へむ。あはれ、正直ものは阿袖あまに欺かれたりと。この誘惑の魔に賺かされず、ひたすら阿袖よりの消息を待ちぬ。程經たれど音信無し、漠窪と青樹とは一里に足らぬ道程なれど逢はねば千里の程に等し、稍忍び難くなりて、一日も徒に過さゞる勞作を抛ち或日のと青樹村にゆきぬ。方便して阿袖に逢ひ躍る心に情懷を問へば、女は盟ひたる事の父母の氣むづかしきに後れたるを辯じ、此度は互に家の許得べしと誓ひて分れ、孝左は歸るとそのまゝ明らさまに兄に語りぬ。弟の擧動一變したるを訝りて阿袖との情交を豫て知りたる兄は、おのれを助くる勞をそれが爲に怠れると無きまゝさして咎めもせざりしが、今孝左が堅き決意に思ひ込みて阿袖と添はんと請ふを聞き、何事にも優柔なる性とて夙には應へかね、その妻を顧みて如何に〻問ふ、妻は性情輕々しく言數多く、何事も領會早

さものなれば、孝左は正直に篤實に勤勉なる人ゆゑ、何處の家の婿となるも、好主人なるべし、況して阿袖の家は舅姑の外に累らふべき家族とてなく殊には、相思ふたる情交にてもあればこは良き緣にてあらむとの判斷に、兄は容易く思案定めて、入婿の費途及ぶだけは負はむと諾したる、孝左の喜悅譬ふるにもの無し。

阿袖もまた父母にその情をうち出で請へば、雙親は愛娘の語を聽きて驚けるまゝ良久默せり。

阿袖の家は富めるにあらねど、孝左に比しては優れて豐かなる生活せり。近村の富豪にて名主をも務むる某の、その村にある所有地の監理をなせる父は、稍才覺ありて世處には巧なるものから、妻その

間に男子數人ありしが皆夭し、四十路に近くて子無き不幸を嘆ちたる時、最後に生れしは阿袖なれば、篠坂の觀音よ、白尾山の地藏尊よ、ゆづり水の不動尊と、知る限の神佛に祈願して成長の安からむことを心に籠めて育てあげし愛娘、古の玉抱きし人の心よりも切なるに加へて、村に稀なる美貌なるに鍾愛一層深く、一家幾許の瑕疵欠乏は、娘の美貌にて蔽ひ隱されぬ。成長なるに隨れ、阿袖に賴りて將來の榮華となるべき、家門の後委ねむ佳き婿獲むと思ふにつけてわが娘の美貌は、そが家より數等優れ富みて且は系統ある人の子を聘するに充分の價値ありと信じ居たり、されば阿袖の芳期になれるをもて、その胸には四隣の富める家の子弟を數へ、娘に當ておのれ

等の中に置き見て、これかかれかと撰擇品評の寢物語、欲望は娘の容姿のために稍分を越ねたるなり。今阿袖が口づからその願望を語るを聞きては、うち驚きつ、はては農の補助にとて淑窪に須臾なりと遣はしし無念を悔いぬ。孝左はもとより夫婦の意に協ひし聟にてはなかりき。

阿袖を兎や角賺しこしらへて、事を遷延し、日數經なば思ひ絕ねむと思ひしが、日夜に止まぬ阿袖の請求、困じはてゝ愛女の情を滿さむには、かれ等の所念願望を犧牲とせねばならず、そを犧牲とせば家門の榮華は今より一層の望はあらず、老後の幸福も阿袖自からの行末も覺束なしと思へば、利害を說きて阿袖の意を飜さむとつとめ

父母のやがて選ばむ佳き人を迎へむに增すとあらじと勸めなだむるも、燃ゆる情火熾なる阿袖には、父母の言葉耳には入らず、過去の事はもとより、將來の譽も榮も戀の前には影見ねず、たゞおのれと孝左と睦ましく樂しく濃やかに情語らふ幻影の往來ふのみ、父母の何かは許すべき樣の見ねざるに堪へで、或夜孝左の許に走りぬ。源吾夫婦人して携れかへりしが、阿袖の心飜へし難く、母親の意まづ折れて娘の望協ふべく源吾に勸むるとなりぬ。かれ等の家門榮華に對する欲望と娘に對する愛情との間に幾らの葛藤を累ね、夫婦の中の涙となり爭となり、やがて不動の御關となり法印の卜占となり、漸くに阿袖の願は許さるゝ際となりぬ。

旱天の一角に雲をのぞめる如く、望月をまてるが如き孝左の相思は茲にとげられて、結繩の神は兩個の上に情の掌を下したまひ、程なく青樹村に人に羨まるべき新郎新婦と稱へられぬ。

喜悦といふとは此兩個の爲に作られし文字、滿足といふとはこの兩個の爲に言はれし言辭とも思はるゝ樂さには、一週二週さて一月は半歲となれるまで、唯夢の如く過ぎ去りぬ。

さるほどに胸に溢るゝ前途の希望に充たされし孝左は農桑の業惰るとなく、勤勞は變物と言はれし時よりも、一層增したらむ樣に見えて、人々の驚くまでに勵みたるが、世渡る術とやらに技倆と才藝とは欲けたり、巧に波瀾あらき世の海を漕ぎぬく手腕は乏しかりき。

舅たる源吾は、監理の田畑につきて、交渉ふべく進退きすべき事が ら數多なれば、屢々孝左に命じて處置さする事も少からず、さるに孝左は常に正しく進み正しく言ひ、表裡無く內外なく、唯爲ずべき事をありのまゝに行ひ正しかるべきを正しく爲すがゆゑに、葛藤少き事の外は成効の滿足を得たるは少し。おのれをもて他人と同じく視、他人の意思をおのれの陰なきにひとしく視て、兎の毫のさきの露ほども、人をもおのれをも欺き詐るとをなし得ず、おのれに思はざるとは、口より出でず。實のみにて虛とては無きその性は、舅源吾が過去に爲し來れる方便とは所詮容るべき際にてはなかりき。

虛實なくては劍道は學ぶも益無し、渡世もまた同じことぞと、名主

がさる武士より聞たるをまた聞ける源吾、それをば孝左に傳へて口癖のやうになりしが、孝左にはその虚實の判別を視ながらに施す術を知らざりき、虚實はまことにおのれを欺き人を詐る罪とやうに思ひき。さればやがて源吾は孝左を婿とはしながらも、おのが繼續者とはなし難く、阿袖の夫としても勿論劣れるものゝやうに感じゆくと深くなりぬ。術策をもて世を渡り臨機應變の知惠あらむものこそ人間の優者なりと信じたりけれども。

人間曾て苦たるものは無かりし孝左の胸にも、やうやく憂苦の影象は見え初めたり。天地唯自由のみ世間唯放膽のみなりしその眼は、やうやく自由を妨ぐる羈絆、放膽を煩はすべき係累の生るゝを視き、

たゞ多少の羈絆多少の煩累は、阿袖との愛情にてさせる憂をも償ひゆくが上に、婿はそのゆきたる家の舅姑に順良に事ふべきもの、人はその行藏を輕らかにすまじきものと確固く信せるまゝ、その誠心は、舅姑の意に適はざるやうなりても、なほ家庭の平和は保たれしなり。されど、その意思を異にすれば比隣も參商となるは世の例なり。早晩舅姑と孝左とは將來に徑庭を生ぜむと自然の理なれば、源吾は孝左の才覺無きたゞ實男なるを補助とするに足らずとせるよりおのづと孝左の家に在て働くべき作業は少くなりぬ。初は舅に隨き て出入したる名主の家にも、使はるゝと少き爲に行かずなりぬ。閑暇といふとの苦しき身には、何事か耕耘の業の外に、

爲す事なくては堪へぬ孝左、折にふれてその意を阿袖に語りぬ。
阿袖は孝左と相添うてより日を經るまゝに交情ます〳〵濃かなるも
のから、父母の意向は飜て夫に疎くなりゆくを見て、敏き心に好き
法もがななど思ふ。もとより掌上の珠玉とも育てられしその身は、
世に矜重なるまゝ、父母に對しても我意を張ること多く、夫とし
左を待すにも愛情の切なるには似ず、外見は冷かなるやうに思はる
ゝ擧止もあり、そは父の性質の一分を受け居て、表裏虚實ありとや
いふべき。孝左の作業の便をと語らふを聞きて、女の知惠ながらの
思案、まづ父母と分れ住むべきを言ひ、やがてその所由を說き聞か
て父母に竈を分たむことを請ひぬ。

取次に孝左にものたらぬ感情出でし源吾夫婦、疎くは思へども愛し
き娘の情には勝ち難く、さりとて孝左と同居せむは好ましからずな
りし折柄、娘の請ふまゝに別居を許しぬ。
孝左の考案にては、事情の許すべくば兄の家近く住いて、馴れし手
業の紙漉させむと思ひしが、舅姑はまた阿袖をしかく離すことを望ま
ず、阿袖も居村の家近きを望めば、その意に從せ、やがて遠からぬ
地に小やかなる茅屋の家、建てあへず新夫婦は移り住み、建具鍋釜
廚道具のそれ〴〵も日ならず調ひ揃うて、茲に兩個は新しき生活の
船路に上る。農桑の業の外にはなはさして定まれる作業もあらねど
さすがに樂しき時を送りぬ。

但だ別居獨立して伉儷相對の境界となりしよりは、孝左の處世の道に拙きは著くなりぬ。正直廉潔なる夫と放心にて愼密ならぬ妻との行爲は、産業の增殖覺束なくて、源吾夫婦に經濟の上を煩はすことも繁くなりゆく。

鄕黨の父老は新夫婦の新生活を祝ひ勵まし、孝左の愛すべき人格を讃め稱ふ、少壯は美しきかれ等の女神なりし阿袖と小松原の變物たる孝左との配遇を、世に訝かしく怪しき契なりと言ひ、新しき家に住みてよりは、なほ伉儷は長くは續かじとの後言、相互に嫉妬の言を詛へり。

孝左が阿袖を遇ふとさながら女神の如く明星の如く、阿袖が孝左を

待すとは、おのれの子の如く手中の珠玉の如く、孝左は何事にも妻に憑むと深ければ、阿袖はまた夫をなにくれとなく愛しがるに、折々は拗ねても見する。世にこれほどの美しき妻はあらじと、世にこれほど信あり可愛き夫はあらじと、愛する趣は異なれど、情に深き淺きはあらず。

かくして婚姻の夕より二年の夏は來れり。孝左の兄は或日來りて種々の話說より弟のあらずなりて、事毎に不自由なる家業など語り、孝左は良き作業はあらずやなど問ひ出づるに、思ひあたりしやうに兄は手を拍ちて、良き儲利の口ありといふ。そは如何なる口ぞ、聞きたしといふ傍より阿袖もまた喜ばしげに質すめり。兄は、例年富

士登山の旅客を宿して少からぬ利殖ある表口五合目の石室、此夏は業を休みてさるべき望者あらば低き賃にて貸すべしと聞きたりといふ。それは好き利途なるべし、人に先越されぬうち是非に望みたしと唯一に頼めば、さらば貸さむといふ人は、近き澁洲の某なれば、今よりつい一走行きて語り聞ねむとて、信實なる旡は出でゆきしが石室はなは誰にも貸さでありし折柄、此相談容易く調ひ、阿袖も利殖あることにてあらばと容易げに頷きたるが、當時富士は女人堂を麓に置きて、婦女は其處より上方に登るとの禁制に意つき、少時にても離れ難き交情の戀心、遠き羈旅にてもあらむやうに憂はしくも思はしが、得難き利殖途なりとおのれも知れば、よは〳〵しき意を

奮ひぬ。かくて兄の周旋は貸借の事を理め、阿袖の願は源吾より幾許の資本を得、總て調度行李を具したる孝左は、吉日を撰みて白雲の山邊さしつゝ出で立ちぬ。

片時も傍を去はいとつらき思なる阿袖と孝左も、浮世の波瀾に漂ふ身には、束の間の離別の憂きはなくてやあらむ。況して遠からぬ一日の旅程、思ひあまる折には歸り來むもいと易しと知るものから、この別離いともつらく、さながら乳母に分るゝ小兒の如き心地するを、阿袖はさすがに裝ふたる風情、離の辭も輕らかに留守は案じたまふなとて勵まし送りぬ。

第四

茫々たる滄溟と、浩々たる碧霄との間、ふりさけ見れば渡る日の影も隠れむ、照る月の光も蔽はれむばかりに、靜に乾坤に懸れる白扇の如く五合目の石窟は立てり。

五合目は所謂中道巡りの衝に當り、大滑澤、赤滑澤、鬼ケ橋、天の浮橋、天狗岳、不動岩、執杖流の危路險道の古跡、はた岳頂劍ケ峰に傍ひたる大澤を下れる處、巖石常に頽れ砂礫恒に飛ぶ鳴澤の難所を過ぎ、木の花澤、櫻澤、佛石澤など平らかなる砂地より砂振、穴室、不淨流しの澤、燕澤の棧道を經て、寶永山の洞穴、屏風岩、牡丹岩、臥龍石、蓮花石などを訪ふものは必ず宿を此に求む。

石窟の高さは五尺に足らず、四方石を疊み積みあげ、中をば埒また

は枠の如く木を構へ、下は焦石の上に莚蓆を敷きたるのみ、床とは名ばかりなる十疊ばかりの室に、三尺の爐を設けて、懸けたる鐵瓶よりなほ黑く光れる自在竹はくすぼり色に梁に吊られ、薄く汚れたる煎餅蒲團三四枚、桶、鍋、杓子、茶椀、鉢、飯櫃などさすがに一通り具はりて、一隅に横はれり。

薪は三合目より下り落葉松の枯枝を拾ひ梢を伐りて擔ひ上げ、水は寶永山の深谷の殘雪または九合目の萬年雪を掬ひ來りて屋上に置き日陽に溶けて滴る雫を桶に漉め貯ふ、そを沸したる湯に煤氣たる番茶煮て、客に供する一杯の價八〇文、半ば熟せる米粥の飯、刀豆に似たる蔓草の實の富士豆と、名は佳けれど味ふべきものならず、味噌

の塊、梅干の數箇、鷄卵の少許、名高き價をもて道者の需に供ふ、孝左は此窟の主として刹那の生活さながら仙人道士にひとしく、變物と云はれし曩昔の容は此時の擧止に見ねぬ。

初めての業ながら、調度の他に比べて具はりたると場所の好きとその實直なる待遇とに依り、登降の人、中道巡りの客足絶ねざれば、その利もまた少からざりけり。

阿袖といへる北辰をその胸中の天に置き、總ての觀念の衆星は悉く北辰の彼女にむかひて集注く、さればこの山住の作業に得たる利殖をば如何に使はむかと思ふは日毎夜毎の心なり、青樹の村は紙を漉くに便よからず、圃地多く預り耕して茶種蒔きて産業を起さむか、

はた田地多く作りて小作米の收穫に富を得むか、われ富まば阿袖の幸はいふまでもわらず、われに疎く見ゆる舅姑も親しくなるべく、貧しく生計す兄をも補助け得むなど思ひつ、希望は幸福と榮光とをもてその面前に往き來ふなり。

實永山の大洞穴より捲き起す黒雲の大風に躍りたちて磊塊たる石礫木葉より輕く飛びて此小さき石窟を撲つ夕、鐵よりも冷たき蒲團に包まれて熱き情を愛の神の阿袖に寄する。浩く涯無き蒼空に、皎月千里の光かゞやき天地寂寞たる處、八荒を瞰せる鐵芙蓉が、靜に坐せる巨人の如く、さながら廣寒宮の天使と相語らふ時も、夢視る如き眸してその魂は里遠く阿袖の懷に通ふなる。

六月朔よりはじめて八月晦に終るべき富士登山の日數をかればかくして暮らしゆきつ、はや八月も半を過ぎぬ、俗言に盂蘭盆會の日を過ぎては、山荒れ易く暴風起りがちなりといひて、登るもの頓に少くなる例なるが、この年は天いとよく晴和のみ續き、山景色掬ひとらむほどの靜かさ、多き道者の中にも、山氣に醉ひぬとて途より返りしは少かりき、されば盆後の山も賑はしさは異ならず。

その月もやがて盡きんとする廿六日、村に近き知人なる剛力は、伊勢の客五人を導きて登り來り、日既に傾ける頃かれの石窟に宿りぬ裾野は取次に暮れゆきて淡墨色に暗く、村里の燈火、炊ぎの烟、濛々として見わつかくれづ、程なく雲湧き霧たちて、眼前に堪へられた

る滄海も、包まるゝやうに暗に籠められ、夕陽は億萬丈の光燄を長空に曳くかと見るまに、忽ち消ねたる影は大嶽の全面を黑く染め了りぬ、夜は來れり、石窟に燈火は無し、落葉松のくねりたる樽柵を爐に焚きつ、燃ねたつ光に圍繞りて煖をとる主客の顏、時に明く時に淡く時に暗く相對うて語らふ、剛力權は毛だらけの脚を爐端に横へ「さうだつた、今夜ぁ廿六夜さまだ、お客さまぁ拜みなさると宜い」言ひつゝ唯一なる戸口の方に步み寄り、細目に開げて天うち仰ぎ「里は雲ばつかりだが、天ぁよく晴れて居る、星が降るやうだ、……おゝ寒」。

客も起ち出で見る、權がいひける如く、碧空は水よりも澄みわたり

億千萬の衆星は濱の眞砂ときらめきたる、天の大きさ、浩けさ、美しさ、言ふべき辭を知らず、麓の方には綿の如き雲の濛々として卷きつ舒びつ搖ける樣あり、夜は次第に深けゆくまゝ、寒氣はいや增すに、爐火をかこみて客は廿六夜月を見むとはする、孝左は蒲團かつぎて爐邊に臥しぬ、剛力もまた彼方の隅に橫はりながら猶種々の物語す、客も寒さと睡たさと疲れとに月まちながらうつら〳〵、半は夢なり、石室は寂寥として須臾は音無し、紗の如き淡靄の影より淡きが戶外に搖曳し、そよ〳〵として忍ぶばかり往來ふ山氣は、幽鬼の嘯くが如き微風となりて石室の屋を度る、天地いと靜に、滿山いと淸みたり、さながら人寰の外の世に群仙の人知れず會するを忍びて見むとするかの如く、何物をか俟たるゝ心地する夜なり。剛力權は時來らむとてか、起きて再び戶を開くに東は月未だ上らず、麓の方を瞰せば綿の如くなりし雲は、墨と變じて水を含み、蓬々として躍りたちつ、上方指して起るに似たり、濃き羅漢眉を顰ませ、圓栗眼を張りて凝視め居たる權が面に、忽ち一陣の疾風下方より颯とばかり雨氣吹うちつけたり、黃色に黑き氣は暗を染め成し、さらめける衆星の光は、萬燈を吹消せる如く一齊に失せぬ。

「暴風雨だ、暴風雨だ」。

胸を打て叫びたる權が聲は客を驚かし孝左を醒まし、皆坐を正して圍繞ひたる時は、高嶺は晦冥なる雲霧に鎖され、疾風の聲遠雷かと

疑はるゝが寶永の洞穴に起りぬ。望を失ひたる客は、

「それでは廿六夜さまは拜まれぬかいな……」

剛力權は眼を圓くして、

「廿六夜さまどこぢやわありませぬ、吾等の命が如何だか分らないだ、」

「ねつ」、とばかり五人の客は顏青ざめ身の毛立ちて戰き恐れぬ、孝左もまたこの言葉心地よからず。

「權公、惡いといふまい、お客さまあ驚愕するわ、」

權は從容きて、

「惡いこつじやあない、孝さんまだ知るめいけんど、眞事だ暴風だよ、それ聞きなさいあの音を、石が飛ぶわ、寶永山の岩が頽れるのだろう、おれや何でも宵から怪しな天候だたあ思つたが、竟々眞事になつちまつた、おれの考ぢやあ、この暴風はなか〳〵止まねえと思ふ。……如何だ孝さん糧食はあるかい。」

さてはと驚く孝左、

「糧食？、無い、明日朝三合目から持つて來る筈だ。」

「そりやあ珍事だ、餓死だ。」

「ねつ、眞實に止むまいか。」

「止まない方は保證だ。」

客は顏見合せて無言なり。戶外の風はいや增しに强く凄く屋を揖つ

雨の音は矢を當つるに異ならず、權は恐れたる容はありながら爐灰を掻き火を吹き烟草吸ひつ、屏風岩の陰に白骨を晒せる相撲の話、八合目の路より疾風に吹き飛ばされて軀殼もとゞめずなれる道者の話、さては寶永山の谷間には今も猶焦石と共に白骨の片碎折々路行く人の足もとに見ゆるなど、故とらしく話說れば、五人の客恐ろしきもの見たさの好奇心に耳傾けながら寂默としてやがて幽鬼の身に添ふを侍てる心地、恐懼のいや深くなりぬ。

皆寢もやらで曉をまてり、剛力の言葉をもさすが疑ひつ、曉となれば萬一や止まむかと思へるなり、されば荒れに荒れし風雨、勢すさまじく加はり、石窟は倒れ頽れむと肝を冷すとのみ增し、何時しか

戸口の隙より微光映して、室は夢の如くほの〳〵明けになりしが、戸は開け難し。

忽然として天地を捲きあげ天魔の箕もて簸りたらむ大狂風、滿山震動してさながら百千の獅子一時に吼ゆる聲はげしく、龍か虎か惡鬼か羅刹か、萬雷を驅て天を拆き地を裂く音すさまじく、叫び飛ぶ石塊の輕きと粃糠の如く紛々として窟を撲ち、刀より銳く氷の稜よりも尖れる雨に和して亂々として躍り狂ふ、斬々たる雲、冪々たる霧渦まき漲つて黑烟の如く室に透り、呼吸も止まむばかり、晝にはあれど夜よりも昏く、日はあれど影見えず、此狂奔の石の眞たゞ中に、疾風に弄ばれ亂雨にさいなまるゝ小さき石窟は、あはや刹那に

顛覆し萬々丈の天にうち上げられ木葉微塵に砕かれ、人もろ共に形もとゞめずならむかとばかり、慄く胸も有や無や。

風雨は猛烈の勢にて此日をかくて暮らし、夜はまた來りぬ、今朝來るべき約束の米なければ、糧は盡きたり、雪消の水は小桶の底に干瀉の如く吸ひ殘されぬ、開くとかなはざる戸際、三尺にたらぬ庭隅に尿をも捨てつ、汚れたるもの淨かるべきものと相交りたる室は、やがて惡臭もて充たされぬ、終日語らふもの無く、戸外を覗ふべくもなく、折々吐く息吸ふ息の深々と嘆ち聲の漏るゝのみ、さながら山靈の震怒に觸れて陰府の獄に幽められし七人は、生ける心地も無く、各自信ぜる神佛に祈りつゝ默念の外無かりき。

孝左の一念は此折もなほ阿袖を忘れざりき、若しこゝに暴風の爲に燒けたる砂上の骨とならば、今まで盡せる勞作は水の泡よりもはかなく、昨日今日夢路に通ふ阿袖の嘆は如何ばかりぞ、あはれ愛せる女よ、通力あらば今宵のわれを神に賴み聞ゐて救助を祈れ、汝に逢はでわれは死に得じ、靈驗ある氏神の摩利支天、この大御山の淺間大菩薩、恩惠あらば一度嵐を歇めたまへ、命惜しからず唯阿袖に逢はでは死し難さよ。その胸底に心の聲はかく顧はりぬ、かゝる造次顚沛の折にだに、迅雷疾風の刹那にも、その情は愛せる阿袖と共に存せるなり。

風雨の勢は衰へたる樣もなし、人々は次第に飢ゑ來り渴き來りぬ、

五人の客中、一人の老いたるはや昨夜より頭痛激しく熱發で、病める人々なれり、四人のものも携へたる麥粉、鷄卵を食ひ盡し、氣力衰へて聲も得たてず、孝左もまた飢渇ともに迫りぬ、七人は小桶の底なる干瀉の如き水を吸ひわひ、枇杷の底の浸潤を嘗めぬ。

剛力權は骨格逞しく脂つきたる大男、飢も渇も苦しとは言ひながら頻に思案の躰なりしが、

「孝さん、これで夜通し暴れて明日も歇まなけりやあ、皆な凍死か餓死だ、おれは同じ死ぬものなら三合目まで轉げて運だめしをやろうと思ふ、」

と言へば、孝左はそが冒險の甚しきを說き、風雨の何時までか歇まで

であるべきかを告げて、共に在る五人の客を保護せよと言へりしが權はきかず、唯坐して死を待つとの苦しさと憂とに堪え得ずとて、決然として結束しぬ、五人の客もまたそのまことに危きを言ひてひたすら抑留め諫めたるが、權は却て反抗の心をもて、その胸に、大風雨の眞當中に一箇の生命を拾はむとの萬一の愉快を想ひつ、おのれに若し生命あらば、やがて來りて助くべしと言ひ捨て、風雨の隙を覗ひながら戸側に添うて立ちぬ。

刹那に戸は細く開くと思ふ間もなく閉ぢ、剛力權は天地を捲ける風雨の裡に影を埋めたり、まことに電光石火抑留むる遑無かりけり、石室は一層寂然蕭然として音なし、あはれ權は胸懷に如何なる依賴

ありけむ、六尺男の骨は今まさに獅子奮迅の勢にて飛び下る石塊に砕かれ、紛々として砂礫と共に行迹も知らず失せにけむ、病める老人は苦しげに呻きて片隅に横はれるを四人の若きものは看護ながら力なく寄り添うて臥たり、孝左も他に爲方なく心は絲のもつれと亂れて、唯一に神を祈念するのみ。

戸外の雷霆よりも烈しく凄じき響は、絶えず石室の人語を亂だし、相語らふ氣力もなく聞として人無きに同じ、いや増す寒氣は戞もて胸を抉ぐるよりも凛しく、肌は鱗甲の理を描き、薄き衣被は氷よりも堅く氷り、毛髪皆震ひ竪ちて筋骨勞かれむかとばかり、言葉にあらはし難き飢渇の氣は全身を蹙ませ來る、黯慘たる山氣忙はしく

暗き室を往來し、耳口鼻眼悉く異しき臭に罩められ、呼吸せまりて魍魎の胸を壓しつけたらんかとも覺えたる。

老人の呻吟、四人の祈禱は夢路を辿りて聞くが如くなりしが、それもやう〳〵弱りゆきぬ、さすがに一晝夜の暴風雨に疲れ、さては危険に馴れてわやうき夢を結びたるにや。

第二の夜は明けたり、風雨なは止まず、午頃になりて猶歇まず黄昏となりてなは歇まず、終に第三の夜となりぬ、骨格も弱からず精神もまた確なる忍耐強き孝左も今は身心海鼠の如く筋肉力なく累然として喪家の犬よりも哀れに、燃ゆべき勢も無き爐火の殘りたるに添うて起臥し居たるが、客の餘りに寂かさに不圖近きつ、捜りよりて

搖り起さんとするに、あなや、その觸れたるものゝ脚は、氷よりも冷たく感覺はあらず、白刃を頭顱の眞中に衝きこまれし如く慄へわがりぬ。

其後は全く夢よりもなほおぼろげに、わが身の現存をすら知らざるが如くなり、殆ど半ばは死して横はりぬ、剛力權の生死、その歸り來て救はむかとの萬一の僥倖、はた旅客五人の死生につきてもさらにかすかなる影だに心に上らず、心の消失と共に、必ず存せる阿袖なる觀念もまた須臾消えたり。

夜漸く明けむとする頃、全山を震動せる大風雨は忽然として默しぬ靜かなると世を隔てしが如し、麓の里の雞の聲は晴れて快き天の景

色を豫じめ告ぐ、孝左はそを半ば死せる胸に感じたれど、飮まず食はず凍えたると二晝夜に亘れる身は、即ちにこの喜を捉へ難きのみならず、喜ばしと思ふ念だになほ生ぜざりき、唯眼を張りて明くなれる窟の中を顧はしぬ、五人の客二人は蒲團に捲かれ臥したるまゝ、三人はまたなほひとしく眼を張り口動かすのみ、夙には言いでず。

やがて天地は東海の旭日を迎へ、朗然として陰府より生けるが如し巨外の方人聲高く砂蹈む步武の音近く、戶は忽ち開けはなされ、濶然として青天白日の光と共に、入り來しは權と三合目四合目の窟主なり、孝左は死より蘇へりたる如く起ちあがらむとせしが腰支えず人々は米を炊ぎ水を焚き粥を煮、湯を沸し孝左もろとも客にも供ふ。

この救助に良久して孝左は手足動き歩むとも協ひ來しが、坐りたる三人の客は、涙はろ〳〵雫と滴らし、咽びたる聲音は明かには聞きとり難く、臥したる二人を指してまたも泣きぬ、人々打寄りて蒲團かゞぐれば、憐むべし老いたると若きとは寒さと飢渇と山氣とに嘖まれ、弱き軀に保ち難くて、その魂は昨夜にや脱け出でけむ、萎める花も苔みの花もその顔より去りて、粥も水も火の煖も終に魂をば呼び返へすとかなはず、客の一人はいふ、老いたるは彼等の長者なり、若きものは互に近隣の友なり、彼に一人の許嫁あり、富士詣して歸らむ日を期して婚姻の式目出度擧げむと待てり、哀むべし、彼は愛する少女閨に待てる父母の情を徒としてこの御山の上に死にたり、

宿世の因緣と言はゞいふべし、かれと老人との死の報を齎らして是より歸らむとの心苦しさよ、三人の纔に拾ひたる生命の幸なるを思ふ心も空なりとて、喜と悲とをうち混へつゝ話說りぬ、孝左は默して聽きをり、玉の如くはふり落つる淚を禁めわへずやがては聲を擧げむばかりに泣きぬ。

その家に宿せる客の死は、おのれ自身の死よりも悲しと思へり、おのれ生活の爲に旅宿の業をなし、よりて人の死を求めてわが宿に置ける如く思ひたり。老いたるものゝ家の愁嘆、若きものゝ情人の痛悼を想ひ憐み、そはおのが宿に起りたる事抔思ひて泣けるなり。

さて權は如何にして助かりしか、客も孝左も疑ひぬ、權は坐してこ

の家に在らば、今現に無限の死に奪り去られし二人の如くなるべきと思ひ、幾度逢ひたる嵐の折の經歴により、雨と共に亂れ下る石塊の中を或は伏し或は這ひ、瞬間の間隙を偸みては終に三合目の落葉松の根に轉び落ち、やう〳〵かの小舍に入りたる由を語りぬ。

まことに權の生命は怪しくも神の靈護ありしならむ。二客の死は運命の盡きなむとを神の御手にも留め難かりしならむと、互に言ひあへり。

此日は死せるもの〻處理に費されたり。晴れたる天と共に、登るもの降るもの〻口より三晝夜の風雨が被らせたる悲しく奇しき事どもを傳へられぬ中道の鬼が澤の絕壁にて倒れたるは八合目の石窟より宿

を辭して出でたる客なり、萬年雪に埋められたるは九合目の窟主なり、吉田口の七合目に宿らんとせる某は行跡知れずとなり。寶永山の斷崖は數十丈頽れ落ちて屏風岩臥龍石も埋もれたり。かの場所は風避け好げなれば折から休らひ居たる人はあらざりしやなど、山より里に種々の噂聞かける。

那の山住の生活に悲しき憂はしき浮世の容態を觀て、孝左の望も産業の念もしばし消え失せしが、平靜なる天地に返へると共に、忽ち愛しき阿袖の面影を描き出し、やがて悲しき紀念なる石窟を見捨て、急ぎ山をば降りに就きぬ。山住の調度その他の處理かれこれと整ひ了りて。

浮世に閃めける悲しき幻影を、阿袖の優しき言葉にて消し、その記憶の憂を阿袖と相見て慰め、二ケ月の間に贏けたる若干の資金もて復び樂しき新生活を爲さむとて、滿ち溢れたる望もて山を降りぬ。

第五

孝左は山を下りぬ。行方急がれて女人堂も何時か過ぎ、回馬場も逢ふ人稀となれる靜の山路を麓に近づき、負ひたる行李を青葉の蔭に下ろし、汗ふきつゝも顧みれば、高嶺の翠拭へる如く淸く澄み昨日今日にわの大暴風雨ありし山とは露おもはれず、葉蔭の隙より笑めるが如き山容の美しさにも、あの寶永の左の方有や無や白う見ゆるはおのが石窟にてやあらむと思へば、悲しき記憶は孝左の心を累はし、老若二客の面影、三人の今頃は故郷に歸りて力なくも遺族に物語りの言葉わはれなる情態など、浮び來るに懷ひ苦しく、あはれおのが財囊を充せるわの御山は悲しくつらき浮世の容態を視せる御山なりけりなど思ひつゝ、やがてまた下りて里に出でたり。家路近くなるまゝに、高嶺の姿は雲にまがひ、悲しき記念は消え失せて、阿袖の影はかれを迎へり。

樂と喜悅との望をもて家に歸りつきぬ。

如何にしてありしならむ。二ケ月の留守は如何暮らしけむと思ひしも阿袖は、依然なる愛らしきわが妻なり。依然なる美しき笑顏、淸みたる眸采、優しき姿容なり。そが擧止の前に增して放心に從容かざ

るは、元來の性として留守中に自から然かなれりしならむ、はた孝
左の歸れるを喜びての樣ならむ。
殘んの暑さに晝はなほ汗ばむ身の水ほしげなるも、夕は凉風秋を帶
びて、梧桐の葉に音信るゝ颯たる聲、蟲の音に伴ふやうなりて、快
き時節の昨日今日、茅屋の狹き棲居も思ひ相うたる伉儷の城郭、孝
左は阿袖と對ひあうて夕餐の膳を了りたる浮世の話、まづ口に出る
は富士の高嶺の遭難なり。
「おらあ、如何しやうにも斯しやうにも仕方がない默つて神さま佛さ
まあ祈るばかりだつた、客の足へ觸つた時なざあ、何とも言はれな
い心地であつた、到底あの暴風雨の摸樣は話したつて言つたつて了

解らない位なものだ、何しろ四斗樽のやうな大石がぐん〳〵震空を
打て舞うのだもの……」
殊勝らしげに頸傾け聞き居たる阿袖は、
「其樣に恐ろしいもんかねえ、その日だつたか、山荒れだつて背戸
の爺さんの話だつたから、五合目あたりは大變だろうつて聞いたら
ば、そりやあるくすると命も知れないつていふから、わしは如何な
に喫驚したか知れなかつた、」
「さうだつたろう、でもおらあ助かつて斯うおまへに逢ふとが出來
るやうに歸つただから可いけんど、伊勢の道者の老人さんと若い人
はほんとに氣の毒な可哀相なとをした、家にやあ子供があるつてい

ふし、歸つたら祝言をするつていふぢやあないか。他事たあ思へない位だつた。」

孝左は覺えず愁然として瞼を濡ませり。阿袖は、「可哀相だつたねえ、そのお女房さんが可哀相にねえ、けんどそりや因果つていふのだらう。わしが心配してた處へ妙觀寺の方丈さんが來なすつて、其樣に心配したつて如何にもならない、生きるも死ぬも皆んな因果因緣ていふもんだから、良人のおまへさんの事を幾ら心配したつて仕樣がないつて色々言つて下すつたのだよ。」

「妙觀寺の方丈樣て、方丈さんが出來たのか。」

「あい、三月前つから江戸から來なされただつて曩日生家へ來まし

た。」

「さうか。」

孝左はなほ權の生命の不思議に助かりし事より、難義の始終を繰返し語りぬ。阿袖は聞く毎に、さぞかしと淺からず慰めくれたれど、千辛萬苦の死地に陷り纔に玉の緒の命繋きとめたるその苦を償ふべき言葉は心に浸まざりき。そはまことに阿袖が少しも見ぬ事なりしなればならむ。

寢物語に將來はかくせむとせんと企圖を告げて、農桑の業をおのれ勵み、阿袖には少とばかりの店商ひせよなど議れば、輕く領きて好き計なりとも同意せり。僅少なりとも資本は大切なれば、畑の事、苗

木の事などさるべき誰彼に議りて無益ならぬやうせんなど言へば、阿袖は然なり〳〵と答へて別におのが意見などは言はざりき、何事も良人のよきに計らへ、諸共に稼殖がむと励ましぬ。

喜悦と平和と物語をもて幾らの日を過したり、源吾夫婦を訪れて、贏得若干ありたるを語れば、夫婦は労作の効果ありしを喜びくれぬ。依然にていや親しくもあらねど、いや疎くはならぬ舅姑なりけり。

わが家の状態も依然にてさして変りたるところは無し。但だ一つ変りたるやうに感じたる事あり。孝左がこの村に家居せる初は、訪ひ来て語りわひ交ると殆ど稀なりし里の若者輩の此頃は休みといへば訪ひ来て物語りすると多く、しかも菩提寺の住僧のうら若く顔白き

殊勝らしきが、その中の話巧者とて来る事繁く見えたり。阿袖は擧動の快活して男らしき點あり、人に接するを好み話しするにも笑ひぞめきて賑しきを喜ぶより、斯くは人々のやう〳〵自然に集ふにやあらむ。さりとて女輩は阿袖のあまりに爽かなるを好まざるにや来るものは少かりき。孝左は眞率にて沈みがちに、語らふべき話頭に乏しく、大抵は聽者となるのみ、人々もまた孝左を訪るにはあらでさながら阿袖をのみ音なふものに似たりき。されども程過ぐる頃より、渠等は孝左の口訥に言拙く應接の榮なきを面白からず思ひたるにや、言ひ合せたらんやうに来らずなりぬ。但だ彼の僧のみは、門を通りたる折とて過り、源吾許行きたりとて訪ひ、阿袖が亡兄の忌

日なりとて來り、逍遙せりとて聲かくると數重なりて、圃より歸れる折、市より返れる折などこの生白き若き方丈を室に見ると多し。方丈は巧ならぬ言葉づかひの孝左をとらへて語らせ、自己また流るゝ如き辯舌もて佛の功德靈驗の事などいふ。殊にかの高嶺の遭難につきて語れる時は、得意の容一層にて、因果應報の理爭はれぬところなど佛につきて教を孝左に傳へたりき。その度毎に阿袖は笑ましげに物語聞きて感ずる樣などを見ゆ。後にはさしたる用もなくて屢訪ひ來るとの、好ましからずと思ふに、孝左は事の序に感情を言へば、阿袖は、彼の方丈さまは留守中の力になつてくれた人、それに知識道德の高しと聞けば、彼のやうなる人と親しむは家の德なりと

てかれの情を解きぬ。かれは僧を疑ひたるにはあらじ、その功德靈驗を聞くの德あらむよりは、言多く饒舌なるによりて作業の妨げとなるを厭ひてなるべし。

程たちて妙觀寺和尚は來ると少くなりぬ。此頃より夜に入て阿袖の出でゆくとあり。父母の許に行くと言へり。孝左は阿袖の擧動、おのれに疎ぐなれる樣ありとは視ざりき。さるとを認め易かりし程淺はかなる愛にては無し。妻の肉はおのれの肉の一片なり、おのれの骨は阿袖の骨の一片なり。おのれの心はお袖の胸に通ひ、妻の心はおのれの胸に托せられたりと思ふと、岩よりも堅きがゆへに。

かくて昨日と今日と明けゆく世に、孝左は阿袖の愛の懷に平和に起

臥し靜に働きて、樂しき日をば過せるなり。

家に歸りてより久しく兄許訪はざりしが、亡父母の忌日法會と式は
かり營むよし兄よりの招に、或朝苞苴など阿袖に調へさせて出で
ゆきぬ。暑さは去りて露おける野路の萱原、遠からぬ兄の家に久し
ぶりの訪問、佛壇とは名ばかりなる、押入へ裝置らへられし龕子の
前、烟草の烟ゆたかに吹ける兄との對坐、親戚とて娌の生家かたよ
り他なければ老いたる姑の加はりしばかり、水いらずの兄弟が、身
に應はしき世計の事などなにくれと無き話說。沈み勝ちなる言辭訥
けれど、兄に比べては一層優れる談者なれば、富士の山業、危難の
事どもまづ兄夫婦を驚かし、それにつけて興も添ひ談柄も多くて、

短き日脚は傾きぬ。娌はまた人よりは優れる口巧者、夕餐の膳に胡
蘿午蒡芋どもの煮浸の料理厨房の手業を終へ、襷脫して團欒に入れ
ば、話は一層おかしく、隣の婆がつい近頃亡りし事、背家の娘が嫁
入せる事より、太郎作の牛が子を生むで、次郎兵衛が買うて來た馬
は、三俵の米負うて走るとまで、話し面白く聞かれ、やがては阿袖
と逢ひそめし曩昔の情話に嬲られつ、不在中は村の若もの多く出入
りて浮世話しに夕凉、遊場は阿袖の家といはれ、殊には妙觀寺の
方丈が阿袖を江戶にも無い美人と賞めたと聞いた里の子の間聽話、
そのやうな美しい女房持たおまへさん、果報者ぞと揶揄ひたるゝ女
心の深くはあらず、戲れ口が孝左の胸に何をか留める。刻みたるよ

りも堅く心に彫られたる妻に對する信念は、嫂の言葉明らさまに阿袖を咀ふやう聞ゐながら、和尚のあまりに多く訪ひ來しは、里の若ものとひとしき意味とわれから信じて、曇れる心の阿袖にわりとは露疑はざれど、和尚といひ妙觀寺といふ言葉は唯何とは無く厭はしく覺ゆるが、その夜の法會に經讀める菩提寺の和尚は、總角よりの朋輩なれど、親しくは言も交さず。坊主は嫌かと嫂のまた嘲笑の種とせられき。

一夜を過して翌日は、湫窪の親しき家々を訪れ、何處にも秋ながら春の日に廂出したらむ悠長なる田舍談に、家路に向ひしは黄昏近き頃なりけり。

遠近の村に立ちのぼる夕烟、草に集く蟲の聲々、秋の音信いよゝしげく、清みたる空の片破月、淡き光に野面の露白く、薄紗かけて夢のやうに晴れたる富士の姿も見ゆ。家々に強いられし山醪の醉顏、芭茅萱原吹き渡る颯たる風に醒め來れば、何とは知れず身に浸む秋の夕景色、景色の美しさ知る身ならねど、おのづから感せられけむ。心かすかに深くも沈むやうに覺えて、はやく歸らむ阿袖まつらむと思ひし時、嫂の戯言は、心の片隅に殘り居けむ、清みたる水の如き胸の中に一點の汚濁を留めたり。さりとてこれを阿袖に疑の塊とは自から思はず、但だあらぬ戯言の思ひ出すにも足らぬをあやしくもわれながら際だちて思ひ出すなりき。さては唯一に急がれてやがて

家に歸れば雨戸はや閉ぢたり。

これも鎖ざしたる戸口開かんとするに、鑰を内より懸けたり。阿袖よと呼ぶに應なし。今宵歸るべき留言なれば待つべき筈なるを、また源吾許行きけるにやはた、と思ふに、嫂の言は濁を胸に增し、さながら桑食む蠶の如く心の片隅を噛みぬ。默して佇みしが、背戸に廻りゆきぬ。裏戸半ば開きて、夢より淡き月影に反映ろう厨の裡、皿小鉢ほの白う見ゆるのみにて暗し。忽と入りて行燈擧しつゝ四壁屹と顧はしたる渠の眼は黑き玉の如く閃きぬ。

鈴蟲やチンチロチンロチロ、松蟲やリンリンーン、ガチヤガチヤいふのはくつわ蟲よと、蟲狩る村兒等の唄ふ諸聲歇みて、少しはなれし隣家の絲紡車の響けうとく、人氣に默せし蟋蟀のまたも寵に鳴き出しぬ。心の葉は毒蛇の牙に噛まれたらむ、痛苦を覺えて仰き臥せば、生白き僧の顏あり〳〵と見え初めたるに、疑は茲に成りぬ。阿袖が此頃の他出、今宵も源吾許行きしとばかり思ふ心の裡、過ぎたる擧動の種々を一齊に思ひ出して、あれもこれもみな疑の雲の中にこめ了りぬ。嫂の言は眞なりけむと、胸はやうやく燃えむとしては、信念の風やがて是を消し。消えたりと見る間に忽ち燃えたち來る胸の炎は、さながらかれの前に悄然と立ちたる行燈の火の明滅する如く、轉輾反側の軀もろともに限なく彷徨ひ惱めり。心の眼、一は光明に輝き他は暗黑に昏み、一は天國の樂園の如く他は陰府の牢獄に

似たり。今その雙の心の眼は、孰れか一をその胸より除かではかなはぬ際となりぬ。かれが心眼の雙つながら光明に充ちて樂園の春の日の如く輝ける疇昔は去りて。

待つとしもなく待たぬとにもあらず、夜深くるまで假寐の枕に夢は結ばざりしが、さすがに疲れも來りて、戸棚より薄團夜着取り出し敷きつ、寢たりけり。疑の夢は、夢より夢に結ばれ、幻の裡に富士の高嶺に復び登り、二個の死せる老若と語り若きもの丶許嫁せる乙女に逢ひて、限なき死の谷に陷りし情人の仇なりとわれを怨み嘆ちたるその顔のやがては僧の姿となりて、われを嘲る口吻惡く丶、撲たむとすれば阿袖と化りて逃げ行くに、追はむとすれば雲たちのぼる富士の絶巓、石驚き天怒りて迅雷疾風、わが家は木葉微塵と亂れ飛ぶ狀態に、阿袖阿袖と呼ばはる聲のわれながら高きにふつと眼を開けば、燈火微明にて夜はなほ明けず。眠られざる夜半の幻、わが疑の鬼の業かと思ひ寢の夢にもあらず、秋の夜長し。

假し宿るとはありとも曉には歸るべき阿袖、終に歸らで夜は明けたり。

夜視には定かならざりし家の樣は、昨日までありしと變りて見ゆれば、心の波瀾取次に高く、さわるべしと思ふにもあらで、調度を點檢べたるに、さしたる變異も無し、將來の希望はこれに繫がれむと十重にも襲ねし金の包、もしやと簞笥の奥深き抽子ぬけば、まづ阿

袖の衣類痕なく失せて、紙包は空蟬の殻も留めず。

脫兎の如く家飛び出で、驀地に遠からぬ源吾の家に躍るが如く入りつ、舅姑を見て阿袖はと忙はしく質す擧動の尋常ならざるに驚きながら、袖は再昨日の朝見えたるのみ來らざるが、如何にせしと、これはまた最愛の娘を慮うての言。孝左は語短く、

「阿袖は金持て衣服持て逃げました。」

夫婦は顔色變るばかりなりしが、心當りやありけむ、思の外從容きて孝左を兎も角もと爐邊に留め、兩三の里人賴み來て何をか私語けば、里人の眼はさながら嘲ける如く笑ふ如く偸み視るが如く孝左に見えぬ。やがて人々は部置して出でゆきしが、亭午過る頃歸り來

りて報には、彼の妙觀寺和尚もまた數日寺を出でゝ歸らず、阿袖は和尚に伴はれて何れにか行けるなりといふ。

光明のなは微に留められたる孝左の胸の燈は、一陣の怪風に吹き滅せられ全く暗黑くなれり。妻に於ける信念の岩根は、鐵槌もて粉韲に碎かれし瓦片の如くなりぬ。

人々が驚きて目注けしまで、吃と身を起し、家に走せ歸りて投ぐるが如く身を床に倒し、良久は死せるやうに横はりぬ。

戸外には鍬負うて歸れる人の、今日は隴幾つ殘れるを耕し了りぬと誇り聲に語りゆくあり。馬に肥料荷けたらむ、鈴の音悠に響きて俚歌の聲ほがらに聞ゆるあり。それもこれも生活の競爭、運命の追隨

に忙はしく、滔々として打寄する浮世の波浪に浮き沈みつ、われから知らず、漂ふ人々の聲喧し。

第六

一片の黒雲さと降ると見る間に、天地忽ち晦冥うなりて、その雲の中よりから〳〵と大に笑ふ聲す。痴呆者よ愚者よ、美しき女を得て樂しめる痴漢よ、美しき妻の他人と通せるを知らでありし膽氣ものよ、姦婦と姦夫との爲に骨を粉にし心を鑵にして高き山に上り死の蔭の危きを歩みたる大愚ものよ。天の日は朝の東雲より夕に至るまで光明を汝の頭上に投げ照し、地の夜は汝に月と星との光を彰はし休息の夢を與へ、汝をして働かしめ食はしめ衣せしめ、材木と

石と金屬とをもて建て作りたる家に住ましめたるにあらずや。汝は働きて食ひて衣きて家に住みて人の事佳しと思はざりしや。美しき女を見て心を動かし情を動かし、それを妻とし得て、人々の嫉妬を買うて樂まむとせる程までに汝は與へられたる衣と糧と住居とに滿足すると能はざりしや。あはれ〳〵汝は鷦鷯の巢に居て梟の棲まんずる林をおのれ獨箇の有となし得むと思へるや、偃鼠の腹をもて龍宮にも上り得る鯉の遊ばむずる河水をおのれ獨箇吸い盡し得むと思へるや、美しき女を得て喜びたる痴漢よ、美しき妻を他人に奪はれたる愚ものよ。汝何とて母の胎より世には出でたる、世に出でたらむ上は何とて汝が與へられしものに

満足せざりしや、汝が照らさるゝ光に拝し汝が蔽はるゝ影に伏して
汝は汝の天賦たるところの本分を盡して幸福なると、なほ彼の天飛
ふ鳥の嘻々として喜の音ある如くならむ。汝は溪水の邊に棲むべき鹿の身を忘れて、肉を斫る
る如くならむ。汝は露おのづから濕されむ野面の草の身を忘
双ある巷に出でたり、汝は露おのづから濕されむ野面の草の身を忘
れて、灌れでは枯るべき鉢の土に宿を求めり。あはれ汝は憂無き勞
働の樂を樂とせず、禍害なき勞働の福を福とせず、乳房ありて
養はれたるを喜の限とせずしてその他を求め、手と脚とありて働き
得る滿足を足れりとせずしてその他を欲したる痴漢ものよ。食ふに
糧あるを飽かずして苦き草を食ひ、飲むに水あるを足れりとせずし

て醋を飲み、衣るに服あるを忘れて網を被り、住むに家に安んせず
して係蹄に繫りたるは汝なるよ。汝はまことにかゝらむよりは、黑
暗より黑暗に消ゆき天の光地の影を見ざる流産の子のさらに幸福
なるを求めざりしや。さらに思へ、汝は皮と肉とをもてその身を蔽
ひ、骨と筋とをもてその身を編み、生命と働作との恩惠を受けたる
喜は、その流産の子たらむよりも幸福なるとを忘れたるか。幸福を
獲て幸福の外に求むるとあり、平和を得て平和の外に望むところあ
りたれはこそ、汝は今に於てその幸福も平和も生命も恩惠も無く、
塵よ塵に埋もれ消ゆく日の光を見ざる期ならずして女の胎より
出づる流産の子の幸なるを思ひ羨むなれ。されど汝すでに汝の賦へ

られたる本分の範圍を超えて、その欲を滿たさんとせり、その情を遣らむとせり。汝は復び流産の子の黑暗より黑暗に行くが如き幸福を得るとかなはず。一度天の光と地の影との間に立ちて汝はその光と影とを汚せり、汝が賦へられたる榮光を毀てり、汝今さらに美しき女に棄てられたるを幸なりと思はむとするも、汝が夢は美しき女もてる曩昔の浮世に通はむがゆゑに、汝が夜の牀は休息を與へず。汝は今さらに生れざらむ前の死と同じからむものを求むるとも得じ汝が埋もれむとする土壤は汝の前に來らじ沈まむとする水もわらじ汝は美しき女を獲て喜びたり、美しき妻を抱きて樂める汝の幸福なりとおのれ思ひし夢の前ありしに因りて、汝が此後の夢は、光を暗

黑よりも苦しと思ひ晝を夜より憂はしと思はむ、汝が牀は汝を慰むると難く、汝が勞働は汝を喜ばすと無からむ。あはれ大痴呆なるものよ、大愚ものよ、罪の種をおのれ蒔きて、おのれ收獲れむとの苦しさを苦しと呻吟く可笑き痴漢よ。笑はれよ、嘲けられよ、罵しられよ。とばかり、聲はまたも呵囉々々と虛空に響き、消ゆく雲の端より忽然として金色の大光明、赫と輝く目眩き間より現はれたる大魔王、鏡の如き雙眼、濶と睨みたるかと思ふ間にまたもやからく〳〵つと笑ふと共に、影消せて天地は復び晦冥くなりぬ。

夢なるか現なるか、孝左の總身は冷汗に浸りて、切齒りたる唇血に

にぎみ、握りたる掌は脂に浸めりぬ。昨日今日空屋に起臥して過ぎゆくも何の効果あるにあらず。何處を的ともなく恍然とせる眸采の、やがてはぎら〳〵と黒く底深く光りて、高きを睥睨む様もあり今日も無く昨日もなく明日はもとよりあらぬ心地に、阿袖の踪跡を探らんとにもあらず。

妙觀寺和尚の阿袖と共に、富士川渡に舟浮びたるを觀たりといふもの、あり、阿袖が在らずなれる前日より家は鎖ざしありてその黄昏の淡暗に行李擁ねて出でゆくを視たりといふものあり。僧は江戸より來しものなれば阿袖を携れて彼地に行きしなるべしといふものあり阿袖が僧と拉れだち逃走しはいよ〳〵確なる事實となりて種々の評は

四隣に傳へられつ、孝左の耳には何とか響くらむ。源吾夫婦が阿袖の逃走を確にし最愛の娘の身を案じて孝左に謝ぶにはあらで愚痴を列べに來しを見て、かれはや憂はしげなる容もなく、夫婦の言唯々と受くるのみ。一家の變事を慰めがてら訪れ來てかれの憤怒を挑むものもあれど、唯輕く應ふるのみで、かれの外容は平然に迫れる様無し。人々が其の冷然なるを怪しむま程輕て孝左は終に源吾夫婦と親子の縁を解き、生家なる兄許歸るとなりぬ。住みしわが家ながら源吾の者なれば、身に附くものとては何物もあらず。源吾夫婦はなか〳〵に孝左の去れるを喜べるやうにて、やがては夙く娘を尋ねあて呼びかへしてさるべき婿もとめむ

とすらむやうなり。かゝれば阿袖とかれとの關係を豫言せるものはその見の當れるを誇りげに語り、嫉るものは詛の成れるを喜び、憐みしものは阿袖を惡むにつけても誰しも阿袖を佳き女子なりとは思はず。『美しき女は愚者でなければ浮氣ものゝ罪作り』、とは里人の同心に格言として合點する語となれり。

三年がほど星霜を、開ける春の花、圓かの秋の月よりもなほ幸ありげに暮らしたる孝左は復び兄の食客となつて、變物なり實男なりの當時の境界に返れるものから、復び世は只管勤勞勵精の人をば視難し。何事につけても兄の吩咐を俟ちて働くのみ、紙灑ぎの業につきても、隴圃に鍬とりても前の孝左の容は少しも見ゑずなりぬ。さ

ど怠るにはあらず遊び好きとなれるにもあらず、元よりまた自棄自暴の心を起したるにもあらじ。屢茫然として何ものをか奪はれたらむ容にて、天を仰ぎて言はむとする態度あり。一旦將來の幸福と榮華とに俟つとありて勞せる渠は、復びは俟つとなく望むとなくては世に勞ると厭はしくなれるにあらむ。

嫂は、孝左の妻に捨てられたるにも似ず、憤り激せる容も見ゑず、おめ〳〵と住める家をさへ奪られて寄食の身となれる意地なさを、あまりにはがゆく視るにつけても、初のほどは篤くも實にも欵遇したれ、取次に輕じ卑むやうなれるを、孝左とても快くはあらず、終に兄の許を去りて、今日を明日と他に傭はれつ其日の口を糊

する憐れむべき奴隷の境に落ちぬ。

日の暮れむとを希ひ償の高からむとを望む傭人の身となりても、なは昔日の勞働をその擧止に現すと無く、却々に常人よりも使ひて效果無きものと思はれ、唯だ廉潔にて貧らず正直にて隱さゞる品性に變りなきまゝ鄕黨皆これを賞めて、彼よりも此よりも傭ひくれ、兎も角も飢ゑず渴かず日を過せり。

雪は富士の高嶺に白く、甲信の山々にわたりて、軒毎に霜淸く置かれ、狐兎の棲杯も落葉に埋もれ、溪澗の水痩せて岩に激する聲も細うなれる頃、里人四五と共に村近き林に通ひて、採薪の業に從ひぬ。丁々の響は山彦の聲を催し、焚火の烟長閑に、鉈と鋸とを終日

の伴となし、伐りたる薪は積みあげ置きて、黃昏には各自頭より高く束ねたるを負子に負うて歸りゆく。或日の事なりき、亭午の休息に焚火圍みて、此林薪にして幾駄あるべき、椙拙の所得幾駄あるべきなど、利の的中を爭そひ數の多寡を語らふとを初として、何事も競爭の世なりけり、鉈併ぎながら枯草に休らひたる一個が、

「六さん、汝の踞けてる石が幾貫あるか、的てゝ見なねい」。

「この石か」と六は煙管持つ手に、おのが踞け居たる石に觸れやをら起ちて左視右視れば蛙の坐せるに髣髴たる山石なり。

「さうさなあ、十二三貫はあるべい」。

「否、十五貫あるべい」。

「おれあ、十四貫だ。孝さん汝あ幾貫あると思ふ？」

孝左は默して石を視たり。蛙の生きながら跳ばむとするに似たり。

なほ默して視居たり。

「孝さん、汝は？」と再び問はれて、

「持て見りやあ解る」。

人々哄と打笑ひたり。それより各自石を擡げ見つ、「うん十三貫は確かにある、誰も當らねえなあ」。

思、邪無きかゝる事に幾許の時を費しけむ。やがてまた根を伐る枝を採る、繩束を結ぶ斧を振ふ、鋸を曳く、谷自その務をなして黄昏近き頃結束を了へ、歸るに臨み、孝左は薪を負はず、かの蛙石を搖がして負子に擔はむとするに、

「おい、孝さん、何をするだあ、其様な石よ如何するだあ」と問はれたれど、默して頷けるのみ。人々目を瞠りて怪しがるを、なほ一語も言はず、やがて負ひ了りて前に立ちつ、村端の郊路の十字なせる場に至り、輕らかに石を卸し置きて去りぬ。

次の日は例の如く業に就けるが、歸るときは薪の外になほ昨日より小さき石を擔ひて同じ場に置きぬ。數日はかくて同じやうに運べり。石は自から堆かく大籠築きたらむやう成れり。人々いよゝ怪しみ、何事をなすにやと問へば、またなほ默し頷くのみ後には薪を負はで石のみ擔ひゆき、一日一石を運ぶとさながら昔の甕を運べる

人にも似たり。漸く繁くなりて半日を石の運搬に費すに至り、擔ひ難き程の大石を動かして一日を全く費すやうになりぬ。さる翁、あらぬ事はせぬものぞ、石を集め積みて何にか成らむと諭せば、疇昔までありし靜に順なる孝左に似ず、冷かなる笑を淺黑き顏に現はし黑水晶の如き眸子閃めきて睨まむばかり、またなほ默して應へず。翁驚き呆れ、あはれ孝左は狂となれり。阿呆となれりと傳へ語げぬ。かくしてかれは全く生產の業を捨て、石を負うて一處に運ぶをもてその一日の業の如くなしぬ。雨降るも、風吹くも、寒きも冷たきも、一日も休むと無く石を負ひては彼處の辻に置く、往日の勸勞精勵たるその擧動は今はた石を擔ひゆき運び來る折に現はれ來りぬ。

初は兄の許に宿りしも、後には村端なる廢利支天の古祠に臥し、朝の祈の言を捧げては終日石を動かし運ぶ。渴けば乞ふて湯茶を飲み飢うれば兄を訪うて腹をみたす。それも後には小川の水を掬び飲み、家を撰ばず食を乞ふやうにはなりぬ。衣破れたるを換へず、肩骨肉肥えて露はれ、肌汚れたるを拭はず、垢と皮膚とを分たず手脚さながら樹か石かと怪まる、頭髮結はず鬚髯剃らず、生延ぶるに任せたり。宿なき丐徒の容して憂はしき氣色露だに無し。兄憐れがりて衣を與ふるも、忽ちに石に裂き荊棘に破りて襤褸となす。

朝より夕まで、石を負ひ、石を積み、かくて凡そ一年の星霜をば經たりける。

第七

江戸は賑やかな都、おもしろく樂しき地、土一升に金一升、極樂といふはあの繁昌をいふたものと、誰やらの口より聞いたとはあれど、さて淺草の觀音さま、日本橋の大通、北山本門寺の五重塔のやうな閣も名主さま土藏のやうな白壁家も、甍をならべ軒を列ねて往さ來るさの人、馬、車、駕籠、槍に長持、武士に町人、肩摩するまで に足しげき繁昌の有樣を、何時ぞや錦繪といふものに見たとはあれど、その江戸の人に逢ふたとはなく、その江戸を觀たしとて及ばぬと、到底成らぬ望と、行きたしとだに思ふとは無かりしに、妙觀寺の和尚は江戸生れ、江戸に住みて、産湯は水道の水とやら、色白の

肌理緻かに、鼻梁の透ほるやうなる、眸采の潤めるやうなる、唇の紅させるやうなる、いかさまその水の清らかさに洗ひこみし人の容姿擧動、その口より江戸はどおもしろき地は無く、江戸はど住みよき處は無く、江戸は極樂淨土と道理にも情念にも感に堪へたる話說に、ふら〳〵と行きたき情思孝左さんが山から歸つたなら、和尚さまにお賴み申して連れてつて貰ひたき願をほのめかせば、然諾顏の和尚さま、日重なり夜續きて阿袖の眼に和尚は神々しきまで添けなくもありがたくもなつかしくもなりゆく刹那、おまへほどの美しい顏もつてこのやうな山家に土臭く埋もるゝが能でもない、江戸ならば絹の衣に玉のやうなる米の飯、却臥しも氣樂なる壯麗な家にも住

へる、つい水汲まふ勞力も飯炊く術も要らぬほどの身分にもなれる人格、わしのやうな出家には樂な都をも去てゝこの山寺の苦しき住居も、修行の一つに爲方は無けれど、それほどの佳人に生れしおまへの、このまゝに大根甘藷食うて朝から晩まで勞力の生活、わしが出家で無かつたら煩惱の犬に追はれて意馬の手綱は斷れて居る時分おまへに樂は玉の輿にのせても見せやうものと、戯言が身にしみじみと心にさへ浸みわたり、私に映す鏡臺のおのれが顔貌、父も母もわが娘ほど世に美しきものは無しと何時ぞや壁越に語るを聞きしが和尚さまの言ふ通り、わたし程のものは村には無し、思へば孝左さんのやうな可愛がつてくれる人はまたと世には無いやうなれど、あ

の正直にも程がある、人の好さにも程がある、沈默にも程がある、女に優しく勞働くのみが男の爲るとばかりでもあるまいに、變人といはれたも無理はない、父樣や母樣は孝さんを貰らふは不承知、意氣地なしで馬鹿正直で才覺のないものは、家の聟にされぬと言はれたも酷い言辭と思ふては居れど、あゝ孝さんの曲の無いに比べては和尚さまはおらい人、美しい人、賢い人、親切もある人よと、さしたるは魔か鬼か、納涼の端居に深けし或夜の戯言、思はず把られし手を拂ふ念はありながら、孝左の眼前に居らぬについはかなくも失せて、一夜の不義に三年の樂しくありがたき家庭夫婦の義を忘れ、復たも挑まるゝ和尚の言葉、やがてはわが口より出でゝ回し難く、は

ては優れたる和尚の人格わが身にとりて行末も樂しからむやう思はれ、斷ちかねたる結緣絕たんとも思はぬのみならず、その江戸を觀たくその極樂に游びたく、あくまで和尚に契りて、さては孝左の山より歸り來れるに、道ならぬ罪とは知れど、辛苦に贏けし財囊をすら和尚の言ふまゝに掠りて走りぬ。

江戸はおもしろき都なり、樂しき地なりと思ひしは、一睡の夢より果敢なし。財囊無くなりてよりは和尚のやさしき言も荒くなりぬ、行末も樂しき玉の輿とやらん望も朧氣になりぬ。美しとわれから思ひしわが顏容は、往來の綺羅競ふ都の女に比しては、櫻の前に槿花の如し、山路行きてこそ何やらゆかしげなりし花、今は馬蹄に蹂躙

られ塵埃もろとも土に消ねむより外の術無き樣となりぬ。菩薩とも阿彌陀とも仰ぎ侍き憑みし人は、やがて夜叉の如く鬼の如き言辭に角も出でゝ、否と言はれぬ羈束の繩に縛られ、さる怪しき魔にても住まむ家に籠められつゝ、頭半ば禿げたるを鬘に裝はいたる、骨だち削けたる頰に穴の如き疵痕を白粉に埋めたる、鼻の頽れしやうなるに唇の歪みたる、咽喉よりとは思はれざる聲の陰にこもりて空に消ゆる力無き言ひせる、眇なる、跛なる臙脂白粉を命として百態に化粧し、暗き夜に柳の陰、橋の袖わたりに佇みてこそ女とも見ゆべけれ、さらずばいかで人としは思はるまじき女輩の、團欒し出入し饒舌く裡に、日毎夜毎、男の玩物にと說かるゝ責苦。あゝかくまでに

欺かれしと悟りし時は、和尚の姿復び見ず。切歯る唇に血浸むまで悔み恨み憤り悲しみ嘆き泣くにつけて、父母や嘆かむ命までもと愛でくれし夫や怒り居らむと思へば、罪過の恐ろしさ夜々の夢に魘はれ、ある限りの智恵を絞つて、或夜ひそかにこの恐ろしき都を逃れ出で、巡禮とも乞食とも見ゆる旅裝、路はかどらず。行くこと一二日にて病に侵され、知らぬ家の軒端に臥して、もろくも罪惡の天罰に露と消ゆむ生命を不思議に人に救はれ、そこに幾日の時を過ごし、或はまた誘勾されて、驛路のはかなき遊女に賣られむとし、あらぬ人を同伴として穢されむとし、辛くも漕ぎぬけし艱難酸苦は、皆清きに心を導く光明となり、親に逢ひたき慕の情と夫に對する悔

の念とに喘ぎあへぎつゝ、一年の程見ざりし村の森陰を見、蹈まざりし村の路蹈むは嬉れしくも憚あり、あやなき闇の夜縞かにわが家の門を訪ひたり。

世に對する義理は措きても、人の憂めを外にしても、娘の愛惜に眼の無き源吾夫婦、雨に戀ひ風に思ひ瘦て見ゆるまでに神佛に祈りて行迹安否をもとめし娘、恙も無くて歸りしに、喜悦は夢かとばかり。一年の程阿袖の經歴の悲しくも嘆はしくも憐なりし話說に、その不義罪過の報ひをも咎めず、孝左は如何にと先づ問ふ娘の言葉を外にして、孝左は離緣して今では狂氣、あのやうな意氣地無しおまへの不義が畢竟今では家の僥倖、人の噂も七十五日といふともあり、

折を見てよき聟を此度こそは親の命令背いてはならぬとの言の葉。
まことにおのれ等の利の爲には、世のものみなを犧牲とするも憚からぬ兩親の心根を、今は心から淺ましく、世にまたあるべくもなき熱き愛情をわれにかけし孝左の誠實今さらに愈よありがたくも勿躰なきやうに反省る阿袖は、われゆゑにその狂氣にはなりしと聞くに狹き胸の痛くて、腸を千々に剌まるゝ切なさ、濁れる水の浮草よりも定まらず輕くうたてきおのが心の恨めしく、さぞかし怨みあらむと思へば、歷々と見はるゝ孝左の面影恐ろしく、われとわが呵責の苦、叫はらんとはせぬ父母の輕薄無情、よき聟とれとは今のお袖に何事とも聞かず。娘可愛いとの念よりと忝けなくはわが身に思はぬには

あらねど、さりとてはそのやうに言はするもわれから作りし罪過の結果わゝ情無いとになりゆきし身よ。
父さま母さまの命ながら、妾は孝さんに謝ります狂になつたのも妾ゆゑなれば、謝まつて勘忍すりや、以前の人にならうものを、狂になつたとて謝らねば罪が恐ろしい、悔いてわびねは濟みませぬ。わゝ惡い事をした、孝さんほどの男はない孝さんほどの夫は無いものを、意氣地無しとは、父さん母さんの僻言、妾や孝さんに逢ひまする孝さんに謝しやう、もう〳〵他に男は恐はいもの、欺すもの、孝さんが勘忍せずば死んでわたしは謝びまする。
父と母とは阿袖の改悛の念に驚きもし呆れもせり。甘き言に賺し嚴

しき言に叱して、おのれ等の意に協はせんとせるが、一年の浮世の苦しみ地獄の責に嘖まれ、極樂は孝左の妻となれる外なき念慮に凝つて、この一念の改悛は、孝左を復び元の夫に回さんと思ひ決しぬ。はては源吾は恐ろしくも怒りぬ、不義逃走を今さら痛く責めて、親に謝びざる不孝を數へ、狂人の妻とならむなど、忠ふはわが娘にあらずとまで憤ほるを妻はなだめてまた幾度か阿袖を說きしが、わがまゝなる氣象はかゝる時思ふに増して強く、孝左に逢はねば死せむなどいふに、一室に幽めて術をかへ言をかへて說きたりける。

一室に幽められし阿袖の夢は、夜々孝左の面影に魘はれおびえて、安き眠とては無きに、黄昏時の忙はしさに紛れたる人目をしのびて

家を脫け、聞けるまに〳〵かの摩利支天の祠を指して出で行きぬ。

第八

堂とは名のみなる二坪ばかりの小さき祠、摩利支天を安置せりと人はいふなる、朽ちたるまゝの屋雨露に晒され、傾きたるまゝの柱、風霜に磨かれ、蟻の住は床に堆く砂を積み、蜘蛛の巢は絲より細く綾に懸けわたされて檐を封せり。老雨に弔はるゝ斷礎は、苔蒸して點紋青く、幽嵐に罩められるゝ破戸は、雲を宿して斑痕黑し。

露おきなせる逢生の上さわたる夜風に、影さだまらず微に照る月の光に誘はれたらむ如く、堂中に人ありて坐せり。おどろ〳〵に亂れたる黑髮長く、痩せたる山字肩を蔽ひ、漆より濃き鬢髮の塵垢に煤、

黑く顔埋もれたる裡より、きら〳〵と閃めくばかりの黑眼瞳さ、冷然として月を仰き、忍ぶが如く鬢髪吹く風に臨みたる態凄し。衣は千褸萬褸に磨り切れて、海松のやうに地を曳きたるを被り。繩か布かは見分難き紐を腰に結び、のそ〳〵と堂を下り、傍の竹叢際に犢の臥したる如き青石に近きぬ。良久そこに直立ちて何事かおぼろげに獨語す。やがて筋骨節くれたる雙手を石の下側にかけて引き搖がさんとするに、頑石動せず、頭は月に向ひて底は蟻這はむ隙だに浮かず。かれは石を離れ地に俯してさらに何事か細々と祈ること如く訴ふる如く言ひ了り、また仰ぎて天を睨み、直立ちながら虛空より風に從つて靜に降る浩々の清氣を呼吸すること少時、俄に腕を打ち胸を

撫で、雙手を石にかくると共に、靜夜の萬象悉く眠より覺めんばかり絕叫一聲、全身の筋張り隆々たる肉起りて、頑石徐に一端を土より離れ、人の如くかれの前に直立ちたり。少時の後石は復び前の方に倒さるれば、動響は四邊を震動して森深く叫びたる梟の凄き聲音も忽ち止みぬ。

倒しては復た起し、起しては復た倒し、休らひてはまた動き、かくてかれが積み重ねたる石塚に達れる頃は、雞聲曉を告げ、月は山の端に傾き、ほの〴〵明けの東の天、白光淡く銅顏を照し出せり。

孝左はかくして石を積めん、一旦運ばむと欲せし石は、そを運びをはらねば、他の石に手をかけず。若し大石容易く搖がざらむとき、

は天に仰き地に俯して、かの摩利支天を祈りて、怪しく奇しき力を出し、轉はしつゝ塚に持ちゆく、一石旬日を費し三旬を費すもまた必ず運び了る。

村中に食を乞ふのみなれるが、漸く近村に彷徨ふに至り、錢與ふものあれば沽店に持ち行きて、さながら稚兒の物買ふ如く、換へらるゝに任せて多少を言はず、酒與ふものあれば盞の半を地に灑ぎて天に捧げ飲む。彷徨ふところ近鄉の門戸に遍くなれるに伴れ、おのれ生命さへ捧げたりし阿袖の生家はたもろともに生計せる住居に行くとも數あり。阿袖とさしむかうて擁せる爐は、今は他人の咽喉濡ほすべき茶湯の鐵瓶を懸けられ、對膳に箸とりあげし米麥の糧炊が

れし竈の烟、往日と同じき曳窓よりなびき上る。朝はやく明星の影とともに汲みたる井戸釣瓶も、照る日まばゆく俚歌に和して乾しける衣の懸竿もそのまゝに、他人の水を汲まれ他人の衣を懸けられたり兄の家より持ちゆきて接木たる溝柿も今は身丈より高く生ひて、圓やかなる實は葉がくれに陰見しつゝ、採られむを待つに似たり。背戸の畑の畝も曩昔おのれの鍬に鋤きたるまゝの畝なり。甘藷苗床もおのれ設けし跡に作られたり。都べてかれか住みたる家の周圍は依然に變らざれど、住む人の面影は、往日のわれと阿袖にあらず、かゝる狀態をその黒く閃く眸にあからさまに視ながら、さらに懷ひめぐらす容無く、平然としてそが家の戸にすら立ち、蓬々たる亂髪

の裡より獨語して食を乞ふ。
里人言ひわへり。あはれなり、かれは女に捨てられて狂せり。否々、狂せるにあらじ、時々獨語するとき、妙觀寺の和尚の名を言ふとあり、狂せる容にもてなして和尚と阿袖との歸るをまちて報いむとするならむ。否さにあらず、かれは狂せるにもあらず、狂せるやう見すにもあらじ、全く魔利支天の憑りたるなり、見よ、人の力にては及ばぬ大石を輕々と搖がす怪力の不思議さを。と種々の評あれど、げにかれは唯一箇の痩せたる喪家の犬よりも哀なるべき乞食の狂者に外ならず見ゆるなりけり。
かれは今曉かけて一個の大石を運び、徐ろにその日の糧を獲むと

て、さながら洞を出で、餌捜る熊の如く蹌々としてさまよひ出でぬ。
往にし日戀はれたる女と邂逅の度かさなりしともある小川流るゝ小山の陰、淙々たる水の聲、靜かに聽かば、逝きて回らぬ人の世の戀と樂との紀念を語る音もあらむ。蕭々として風、誘はれ落る木葉、飛びて流に浮びゆく影、細かに視ば、遷りゆく人の情のはかなさを制めかねたる趣あらむ。秋とし言へば强からぬ陽の光、さすがにのつと森陰をゑがきて、黄ばみかゝりし遠山の淡く染めし色も、眺矚は心ゆく景あれど、狂へりと言はれし人は、これに對して何とか見るらむ。默して、笑うて、沈みて、西に歩み東に行き、狂者よ、摩利支天よと罵り噪ぐ兒童輩の戯弄となりつゝ、歸途に復び彼の小川

の邊を過ぎ、流に沿うて一個の枰の如き石を認めたり。停りて須臾凝視しが、これをも塚に運はむとてか、雙手をかけて搖かすに、石根深く土に入り搖ぐのみにて浮かず。

須臾休らひてはまた搖がすこと幾度を重ねて、石は次第に人の意に從はむさまなれど、なほその場を離れざるに、夕陽眩ゆく銅顏を射ぬ。

村々の夕煙遠近にたなびき、端山の腰ほのかに白う浮きて、黃昏の秋の姿夢に似たる風情あり。天色は醒めたるやうに淸く水の如さが、やう〳〵暗くなりゆく間なく、彼方に遠く一點、此方に近く二點三點、人の世を眺めがはなる星の光何時しか萬點の影きら〳〵と、深くも遠く濶くも大なる碧穹に滿ちわたる。

かれは枰石に踞けて、この天象を究めむずる星學者の如く、高く天を仰ぎ星光を睨み、息を吹き氣を吸ひつ、默然として愁ひ居たり。

魂を天に奪れけむ、心を星に走らせけむ、小川に沿うて透迤たる彼方の小途より肅やかに近く跫音を知らざりき。やがて復び身を起し、石に手懸けむと顧く途端、悄然として傍に佇める幽鬼の如き姿を視たれど、瞥見しのみ誰ぞとも問はず、滿身籠めたる怪力、見る〳〵石の一端地盤をはなれ、胸の底より叫ぶ一聲やつとばかりに押したほせば、地響打つて一間近く前の方へと轉びたるを、勢銳くまた氣を鼓して雙手を懸くる一刹那、その石に抱きつきたる幽鬼の姿、沈々たる千仞の深谷に埋もるゝかれの胸底にも微に遠くは聞かるべ

き悲しき泣聲、靜に澄みたる夜氣を渡りて虛空に散れり。かれは茫然として張りたる氣力を奪られ、屹と幽鬼を凝視たり。星光に白き面半は細き腕に蔽はれ、脂粉の氣は頽れたる黑髮より通うて、朧ろげにも女なりとは認めらる。今ぞ轉ばし初めたる枰石をば人の身に遮ぎられ、困じたる態にて、つと寄りつ押しのけんとするに、身を搖がして見あげたる白き顏は、蓬蓬たる亂髮に蔽はれし銅面にはたと對ひぬ。

「孝さん……、勘忍して……」。

女の聲に、かれの眸は暗にも異しき彩光するどく、電光に觸れたらむ如く直立ちしまゝ、壓つけられしやうに低き號叫その胸より響き

たるが、唇は結びたるまゝ默然として言を發せず。

「孝さん、孝さん、妾だ！、濟まなかつた、勘忍してくれ、勘忍してくれ。」

女はさらに脚下に俯してかく言へど、なほ默。

「孝さん、妾だ、阿袖だ、悔謝に來ました、何卒〳〵勘忍してくれないか、拜むから堪忍しておくれ、拜みます拜みます、……ね、孝さん」。

應は一語だに無く、哀しき聲のみ續く、

「今さら言つたつて、謝つたとて、妾が惡かつたとは何と言はれても言譯無い、つい彼の坊主奴に欺騙されて、おまへの親切苦勞を無

にし、逃げたとは後悔しても及ばない、不義い事とは知つてたが、
魔がさしたのか、悔やしいことをしてしまつた、孝さん悔謝るから
……撲つなり蹴るなり、存分にして勘忍しておくれ、拝むから、拝
みます、……孝さん。」

悔恨の情は千丈の堤を切つたる浪より強く胸に漲り、遣る方なき身
を縋りよせて、偃き來る動氣に斷れては續く言、繰り返へし、石に
取りつき謝びたりける。

聞くとは無く聞かぬともなく默したちたる孝左、折しも東の山に高
く上れる月影の、哀れに淸く照らす阿袖の亂れたる姿を見て、凄き
ほどに黑き眸を開き、冷然として笑みたるが、やがて慘ましき氣色

痩せたる頰に渡り、ほろ〳〵と滴り落つる露なす涙掃ひもやらず、
直なる腰をば長髪の地を曳くまでに屈げたるが、忽ち復た冷然とし
て直立ちたるまゝ、默々。

阿袖は斷れたる襤褸衣の孝左の袖を且つ拉へ、復び、過にし事の罪
は如何にしても言ひ解く方便はあるべからず、また言解くべき理の
あるにはあらず、深くもおのが罪の恐ろしさ、謝ぶるもなか〳〵に
罪を重ぬらむ。唯悔いたりし今よりは幾千代かけて契りは變へず、身
をつくしても今まで犯せし罪償はん。今夜來て謝ぶる情念の底せめ
ては汲み取り、宥すとだにも言ひくれよ、と嘆きつ泣きつ縋りつゝ
謝びけれど、かれは依然に默して立てり。

清める月は光取次に明く、啼蟲の聲哀なる秋草をかたしき俯せる阿袖、隻手を石に凭せて見わぐるに、蓬々の亂髪、鬢々たる黒髯、痩肩稜々として月影に聳ち、破れし裳衣のひら〳〵と微風に靡さたる、其人としも思はれず。住にし日の俤は、唯さら〳〵せる眸の光に殘るのみなれど、わりし事は心の記憶を呼び返へし、懐ひ來れば現々と過ぎし睦言の優しかりたる情態さへ浮び來る。沈々たるその姿、見ふるしし人とも覺えず、あゝ何のものゝ狂はしにてか、異心わりてこの人を、かくは成り果てさせけるよ、とまたさら浅ましさのわが罪過をくりかへすと共に、總身恐ろしく物に襲はる心地して、徐よ吹く秋の夜風、双に身を切る寒さに慄へて、石抱へたるそのまゝ

に聲無く、われから呵責の鞭に泣く涙露を結びて露に落つ、天言はず地言はず、石言はず、人言はず、石か人か涙か露か、默せる世には孰れを分かず、萬點の星その影淡く、映らふ月の光獨り清みゆき、遥に高く中天の天路を進みゆくのみ。

深く深くまた深き沈默の谷の底より、せめて微だに響くべき心の聲を聽かむとて、千たび喚び百たび叫ぶ悔の音にも　奈落の底のその奥にや沈みはてけむ孝左の情念は、復びは憂しと見し世に醒覺むべくも見えず。無念無想非情なる頑石にてさへ、仙術によりては羊にも生化りし例あるものを、あはれこの血あり息ある屍は、熱鐵を呑む思ある罪過の悔の號泣に應ふべくも無かりけり。」

慘然として女は石より起ち離れ、亂鬢風に搖ら〳〵と身を慄はして、
縋つて男の腕ととれば、黒き眸はきらりと動き、瞬く瞼に涙の光は
ろりと落るかと見る間に消えて、素直と起ちてまた冷然。
「惡婆！」
と一聲。樹身をあさむく鐵腕に、雪より白き手を拂つて、夜の草木
の眠さへ醒むべき一種の奇しき叫聲、風に震ふて虚空に散りぬ。鳥
の聲ならず獸の聲ならず、人のにてもわらぬ聲、孝左の胸より出で
し聲なり。」轉びし身やうやくに起し、今はと思ひ限りたるか悄々た
る阿袖の孤影、流に沿うて露草の徑ふみわけ、遙になりて幽鬼の如
く烟にかくれぬ。

月こそ照せ、清き野面に臥したる石と、立ちたる人とを。

第九

昨夜孝左の腕に動かされ阿袖の手に擁へられし彼の梓の如き石、今
朝は朝陽の輝々たる光を受けて、塚石に遠からぬ路の側に横たはり、
孝左は其處に徘徊せり。」書近き頃、四五の父老に隨がはれ兩個の漢
に舁かれたる檐架筵は、一個の死屍を載せて此路に來りぬ。孝左を
認めて舁きたるものは歩を止め、父老に何事をか語りつやがて近づ
きぬ。孝左は父老に逢ひて微笑みしが、濕れたる黒髪亂れて蓆の上
に敷き、青ざめたる石蠟の如き顔の半面、僅かに覆はれし蓆より現
はれたるを認めつ、黒眸瞠きて誰ぞと問はむ樣なり、父老の一個は

進みて言ひぬ。孝左よ、こは青樹の源吾の娘なり、汝の妻となりし阿袖なり。昨夜にや上流に投身けむ、今朝しも富士川渡せむとせる舟子が、舟側に浮び居たるを見出でたり、時經たれば火も藥も効なく、今青樹へと送りゆくなり。あはれ、如何にしてか身を投げけむ、汝はこの女に捨てられてかゝる態とはなれるを、こを見ば恨めしき心も失せて、可哀と思はんや、いかに、哀れむべし、汝もこの女も。妻なり夫なりし因緣に、せめてはこの女の死顏に逢ふは、後生の功徳にもならむ。と、蓆を少し開きて、心ありや無しや視つめ居たる孝左に示しぬ。

瞼空しく閉ぢたり。唇空しく開きたり。清く湛へし春の眸の水、今

は何處の流にか歸せし。ゆかしき呼吸の香、今は何處の花にか移る。垂れたる手足横はりたる軀、鉛色に固く冷え凝りたる、あはれ幾世を重ねても、この人復び言ひ動くべしと覺えず。曾ては戀語りたる唇よ、夢の如く相見たる眸よ、温かき玉の如くかき抱きたる手よ足よ軀よ、魂は骨と筋と肉と皮と血との人より離れて、今は何處に離り去りけむ。

こを何と見たるらむ。父老の言を何と聽きたらむ。孝左は冷やかに笑みて頷きもせざるに、父老等は呆れ顏、口々に夫妻の悲しき運命を說きつゝあはれなる屍を護送し行きぬ。

蕭然として一群の人影彼方の森陰に隱るゝまで、かれは茫々たる態

にて直立ちつゝ見送りたる、其黒き眼には、一滴二滴の露を帶び、
慘たる色その面を籠めたるが、忽ち身をかへしてまた杵石に雙手を
かけ、ゑいやつと聲をかけたる金剛力に一轉せらるゝ石を倒して、
嘯く如く天をば仰ぎ大に笑ふその面は、さながら小兒のそれよりも
邪氣無し。かくてその日も暮れて夜は來れり。暗黑の裡には晝と同
じき石の地響聞ゑたり。月は出でゝ昨夜と同じき人と石とを照しか
り。雞聲曉を告ぐる頃は、粹石は彼の塚の前に据ゑられぬ。亂髮を
朝風の寒きに吹きなびかせたる人は、摩利支天の祠の裡に臥して眠
りぬ。
阿袖なる愛しき妻去りて、石を積みはじめたる時、孝左の齡は三十

路に足らざりき。時しも世に騷がしき維新の殺氣漲ぎり、犢を賣て
刀に換ゆる人心、この幽靜なる孤村の民も、名主代官の口より傳へ
られたる戰爭の話頭に夢驚かされ、如何になりゆく世にやあらむな
ど、互に警めつ懼れつするにひきかへ、孝左は人寰の風塵すべて知
らず、唯孜々として石を運び石を積みぬ。
海の如く血を流し、山の如くに屍を積みたる戰爭に、幾らの人間は
鬼となり骨となり、これよりかれに遷りゆく時勢の犧牲となりて、
世間の狀態變りたるが、かれは五家山中の童の如く桃源洞裏の翁の
如く、春を記せず秋を識さず、世は秦となり漢となるに關はらず、
磊々たる石を父子ともしけむ君臣ともしけむ、煢獨の孤影をば昔な

がらの月に照し、霜と雪とに染め深うせる鬢髪を、彼の摩利支天祠
邊を流る〻逝水に映し、勞れず、倦まず、その塔を積みぬ。
世に崇められ時に敬まはれたる達人も賢者も識者も英雄も俊傑も白
双の下に消え牢囚の裡に亡び、城山松の夕嵐、吹くや腥き戰場の露
朝にあへなく陽炎と化り、清水谷の五月雨、打つやはかなく路上の
烟暮にかなしき鵑聲の血に塗れけむ時よ、蒼苔は忽ち碑上の名を封
じ埋め、蠹魚は空しく史中の字を蝕み盡すの間よ、老いたるは永く
忘却の墓に入り、幼きは遼けき希望の園に出で、逸樂も辛苦も榮華
も禍災もひとしく歷劫茫々の裡に逆旅の如く世を行く際に在て、か
れは終古に默し千秋に冷かなる言はず語らず去來今をば識らざらむ

石塊を抱き轉ばし擡げ積みつゝ、世に名も無き寒谷の孤村に、その
呼吸を續け、水と糧とにその命を繫け、崇められ敬まはれけむ人間
とひとしなみに生き、ひとしなみに天を戴き地を履み居たり。石を
轉ばし積むをもて、天より受けし命を行はむ如くに、日々の職とな
してぞ。
この渺たる一匹夫は、かくて昔人のユープレート河畔に築けるバベ
ル塔を積む如く、單身營々、風霜に年々の骨を磨し、雨露に夜々の
肉を消し去ると四十年。
雪の如き白髪を冠し寒岩の如き瘦軀を支へて七十年の齡を迎へし時
金字塔に似たる渠の尖石塔は築ぎ成されぬ。渠の創めたる事はかれ

の手にて爲しとげられぬ。

疾風砂を飛し迅雷耳を劈き、滄海を捲きかへせる如き大雨に、天地晦冥なりける明治廿年五月某日の後朝、かの尖石塔は崩れず壞ず、平郊に卓然として蒼空を仰ぎたる處、彼方に距ること數十歩、柱も扉も擔も床も紛々狼藉、摧け頽れたる古祠の跡に、石より冷かに凝りてミイラの如くなる、坐したるまゝの人屍ありき。（二十四年稿）

（二十五年）

文園

文園何處索麒麟。
樂地買譽皆俗物。
灑來慘憺心中淚。
知己千秋天獨在。

唯管操觚供療貧。
窮途持命是詩人。
染出烟霞紙上春。
聖巖幽藪好藏身。

霞浦一瞥

（一）烟中の筑波

常州の山に紫の筑波の君あり、湖に烟の霞浦の君あり。湖神山靈、夢裡にわれを招くこと切なり。游情禁じ難く、少閑を偸むで、程を上野發の鐵車に藉り武總の大野を馳す。

野梅香裡、田端の停車場を過ぎて、平田萬頃四顧廣濶、田徑遙かなる處に若草の萠え出でたるを摘む兒女、遲々たる駄馬を驅る農夫、眸中香々、人は豆の如く馬は蟻よりも小なり。南北千住を過ぎて松戸驛畔江戸川を渡る、柴舟の晴を負ふて流下するあり。柏驛に至る、

黄茅の家両三軒、小丘點綴の間に隠見す。これより丘陵起伏我孫子の邊右方に手賀沼を觀、やがて利根川を渡る、清沙碧江杳然として來る、天濶く、遠樹浮び、風嫋々たるを含み、烟靄暖々たるに浴して流を遡る白帆點々。水自ら悠々舟を遣り、舟自から遠く人を送る。閑澹の風光頻に詩興を動かす。取手驛を過ぎ、窓より筑波の山容をもとむれども見えず。一客あり丁寧に杳靄の裡を指點するに、雙眸を凝らせば、淡貌杳かに蒼嵐の衣をまとひ、烟翠の紗を隔てゝ、雙尖の屏顔夢の如く、動もすれば隱々として失はんとす。窓に凭りていよ〳〵眸を凝らす、車馳するに隨つて一重の烟紗一重披き、一襲の嵐衣一襲脱ぎ淡如無らんとせる遥影は、取次に朧明なる雙尖の形

容と成り、朧明なる形容はやがて明媚なる山態を雙眸に映し來り、牛久驛に至る頃、牛久沼の碧波溶々空を浸せる處、霞の袖のかざしを拂て、風袂飄々雲裾楚々たる筑波山は、嫣然として初めて一笑。

雪は申さず先づ紫の筑波山　嵐雪

（二）土浦街頭

牛久沼の水光はやがて丘陵の後に隱れ、筑波の嫣然たる屏顔は、積翠の眉黛匂やかに相對して、車の馳するに追隨ふ。田園村郭丘陵の觀望稍々狹小の間に荒川沖を過ぎて、茂林鬱樹の裡を行くこと須臾、忽地に眼界一濶、平湖一碧右の方に開き、左に雲山重々高く筑波を擁げ、當中の一驛瓦甍整齊たる街巷に近く、鐵車徐に轍を停め、

扉の啓く音と共に、土浦々々と喚ぶ聲高し。

車を下り徑路を迂回し、瀬々の白波霞をうながす櫻川の野橋を渡り、一茅店に路を問ひて、阿見村指して行く行く顧みすれば、裾かけて高く雲山に擁せらるゝ筑波は、此時笑顏に威容を添へ、連歌嶽豐田山は宛然拜するが如く蜿蜒して東方に亘れり。一望平田湖畔に迫り、風蕭颯々遠く長汀曲浦を描きたる處、霞浦の湖光灩々、杳々烟波靜に天を湛へたり。

眼に去來白帆の招くあり、耳に階々雲雀の喚ぶあり。わが魂は驀地に一往し、湖面に馳せんとして脚隨はず、迂回し屈曲せる路を行くこと漸く半里強、平田に孤立せる老松樹下に來りぬ。

（三）樹下石上

此處平田一樹無く、唯此孤松あり、老幹の皺紋は明に霜雪の年を疊み、古根の苔色深く雨露の史を刻む。樹下に頑石あり、渾圓にして面平なり、踞して四望の便を得べし。

威を帶びたる筑波の山靈、仰げば崇く、笑を湛へたる霞の湖神、望めば杳なり。老松と頑石とは筑波と霞浦とに相待て、髣髴として神秘なる或意義を藏せり。苔蘚が畫し出せる樹身の怪文、風露が印し刻めば石面の奇字は、何等の該博なる言語學者にも、何等の深奧なる人類學者にも、竟に讀み得べからず解し難き自然の碑帖なり、然も、この碑帖は暗に湖神と山靈との消息をわれに視せり。

月朧に天夢に浮きたる春の夜半に、霞の浴後烟の衣半ば脱ぎたる潮神と、紫の雲の衾重ねし殿居より、虚を踏み降る山霊とが逍遥遊の憩に、此樹下石上に自然の愛を語りし記録を、われは心に讀みぬ。

この碑帖によりて自然の歴史を解し得たり。

松は長く天籟の通路を歌ひ、石は終古の默を守れり。人は樹下石上湖山の愛を味ひぬ。

(四) 漁磯の孤舟

自然の消息讀み盡し難き老松頑石に別れ、小川を越え田徑を走り、初めて湖畔に達して一漁家を訪ふ。黄茅の矮屋、環堵蕭然、屋傍に紫薪高く積むて山の如し。爐を擁して悠寛に坐せる翁あり、半白の髪斑々に霜を置けり。まづ天氣を話し寒暑を語り、魚蟹網罟を說く水國の風物諄々聽くべし。孤舟あり、人無くて自ら汀に横はり、輕浪細波の緩く弄ふに任せり。わが懐舟と共に搖る、翁を勞し水の中央に泛ばんと思ふ。先ゆきて空船の艫に倚り、ふりさけ見れば、烟水微茫、臥たる姿の志戸の岬、牛渡、平川かけて一帯の翠壁。遠き霞に浮島も髣髴として見えつ隱れつ烟の裡に迷藏を捉ふが如し。水青く山青く樹青く浩々漾々、帆影の點々白きを描きたり。

ヤント詩裡の水鳥あり影は迢々杳冥に入る、シエレー歌中の雲雀あり、晴を祝して空に冲る。身は是自然の搖籃の愛兒となつて、世情を忘れ人寰を忘れ、水天に融化せられむとす。斯の如く在ること多

時。
折しも天外風あり、蓬々然として湖波を吹起す。清かりし天空徐に淡々の雲紗に蔽はれぬ。顧みれば筑波の峯尖に怪雲一朶、徒ならず搖動す。翁來りて曰ふ、雨風大に至らむと。

十數分の後、山や水や樹や齊しく淡墨に抹せられたり。帆影消ゆる鳥聲絶ゆ菰蒲獵々長汀曲浦一時に搖きて湖の風寒し。

（五）春風猶未到常州

雲の袖垣、筑波の紫翠を蔽ひ、霧の羅幕、霞の烟波を沒して、自然の怡容、湖山の清貌は既に見難し。蒼慘たる濕雲、湖面の空濛を重ぬると齊しく、亂雨紛々として舟を打つ、水紋碎け躍り浪花亂れ飛ぶ、雨脚塵の如く風頭黑し。天地は冥々蕭々、風雨に冷殺せられたり。

孤舟を風浪の手に委して、復び翁が漁家の人寰に入り、爐火を焚き村茗を煮て語らへば、自然風光に換ゆべき江湖人寰の消息は、淺からざる趣味を帶び將て、わが胸底に通ひたり。

數時間の後、われは鐵車の窓に傍ひ、雲の筑波と雨の霞浦とに點頭して少別を告げたりき。

鷗○心○來○訪○水○雲○區○　遠○浦○遙○々○看○欲○無○
春○信○未○通○筑○波○嶺○　寒○風○冷○雨○滿○霞○湖○

夜半逍遥

（一）朧月

天はさながら花の香に醺へる朧月夜に、あくがれたるわれは、飄然寓を出でゝ比丘尼橋を渡れば、唯ある軒端の花夢の如く月を宿し、橋頭の垂楊烟に眠れる處、時計臺の漏聲一時を報じ、そよ吹く風に遞らるゝ音響徐に虚空に渡れり。

往來の人影はや絶えて、折々遠く轔々たる車聲を聞きつゝ、御溝に沿うて漫に歩む。

交番所の彩燈の覺束なくも光れる小闇き陰に、黙然として黒き人影

の佇立たる、夜もすがらの警戒は是か。家々の軒燈は深き休息の人夢を護り容に、沈々として月より外の光を帯たり。

輕羅の如き烟を月に浴びたる隄の松、かざせる影を石壁に描けば、石壁は松影ながらその影を水面に倒映せり。人に知られぬ微風あり、水の上を偸み度る時、水はゆらゝく半輪の月を揉うて、波紋細々夢路にかくれゆく。月や言はず、水と風とを藉りてその名くべからざる愛の天心を彰はすにやあらむ。

黙然として佇みたる黒影は、人間社會の定めたる罪の消息を瞥め、朧明に照れる月影は、天の賦へたる愛の表彰を描く。あはれわれは此定めざるべからざる罪の巷に夜深く逍遥ひ出でゝ、限なき天の愛

罩めたる月をゆかしく天と水とに觀たり。

この心もて月を仰げば、月は微笑むが如くその影をわれに投げてさながら惜まず、俯せば水の面の影さらに名くべからざる微妙なる容形を描きて、なほ深くわが心を惹く。まことに碧落の愛はわが心を水と月に融かして、空冥に化したる身、良久無我の境界に悠然として、岸邊の柳陰に佇みたり。

折から戞たる一聲に、幻覺破れて顧眄けば、劒欄を握りたる人は嚴乎として傍に立ちぬ、黝然としてられたるに、月おもしろく水に映りしが故と應ふれば、眞黒に羅紗覆ふたるかれの色容も、はからず笑みつゝ、その警戒の眼をあげて、愛に滿ちたる天の月を閑に仰ぎたり。

（二）明神祠畔

劍鞘曳去る黑影を後に、八重洲河岸を右に折れて大路に出づれば、此には柳陰の烟態無く花上の月容無く、石壁の松影も水中の波紋もまた見るべからず。唯直道坦々鐵路遠く、一眸に入り、萬家の瓦甍家牌齊く電燈氣燈の燦たるに浴して夜の色を帶びたりさすがに都大路の車の轍なほ絕えず、茶飯、饂飩、天麩羅、おでん、一寸一杯などゝ記したる障子構の屋臺店、此處彼處に羹の湯氣烟とたちて月の雫に散りゆく風情あるものから、夜の「自然」の聲色たるべき「寂寥」はなほ見るべからず。

日本橋より同じやうに氣燈まばゆく、月の光は有無なる路をひた歩みに行きて萬世橋に到り、橋欄の石冷に暖める月華を帶びたるに靠れて、聲無き流水を噉すに、流に舟あり、月に明暗の影を描きたる苫の裡、靜に吹通ふ夜の春風寒からざる、舟人の眠や穩ならん。其舟人は昨日は東、今日は西なる稻妻の如く、身を流水の月日に任せて、舟を浮世に五十年の人生、樂しきも苦しきも束の間の夢とや觀じたるが多からむことを想ふ。わが心はまた其舟の中に深く入りこみて、苫の裡なる人は恁麼なる性ならむかなどいよ〳〵空想に情思を馳せたりき。かくて步武は志す方もなくて、何時しか神田明神の石燈を、心とも無く登りゆき開化樓の軒燈空く、松さながら虬龍の如くかざせる陰に、頑たる默石に踞して、見ゆる限の街衢を望みたり。

（三）幻想

一樣に黑く沈みたる萬家の參差たるは、的爍として點々星の如く凄く燿く電燈の光と溶々たる月の溫き影と相和して、浩々たる大街衢を涯無き微茫の烟の裡に、朧明に遠く罩めたり。

「自然」の寂寥なる面影は茲に現はれぬ。言ふべからざる或る秘密の消息を齎し來て、潛やかにわが胸に忍べり。宛然見るべからざるもの、天と地との鎖鑰を持ち來て、深く遠く浩き宇宙の門關を啓けと囁嚅くに髣髴たり。この心頭に振觸たる感は、わが渾身を石と共に默境に埋めたり。

あはれ今、人は皆夢に在り。金屋玉堂の障壁もて護らるゝものも、破牖蔽席の環堵に危く安んずるものも、さては蓆一枚はかなき石の枕に花の下臥せるものも、盡く皆休息の眠に在り。かれ等の眠はその灑ぎたる涙を忘れ、かれ等の唇はその呼びたる語を忘れ、かれ等の胸はその抱きたる戀と悲とを忘れ、その憂愁、嬉笑、怒罵、怨恨、すべての罪惡と榮譽との種子を盡く忘れ果て、かれ等の靈は皆其骨肉より游離れて、行迹を無何有の境に遷し、無爲にして永遠なる天上の故郷に、樂園の花月をもとめ行けり。閒寂默せる裡に、なほ幽遠なる聲音の宛然花の陰に蝶の邂逅ふ時の如く通ふは、かれ等夢魂の互に相囁嚅くにはあらずや。實にかれ等人皆は、自己が夢魂の何

處に彷徨へるかを自ら知ると無き、刹那の「死境」に僵臥せる屍なり。その夢魂が骨肉の窩に返り來べき曉までは、白き壁黑き塀もて圍はれたる萬戸の家は皆かれ等を埋むる忘却の墓なりけり。

『あはれ人は皆この刹那の忘却の墓に入るを休息と喜びて、かの永遠の忘却の墓に埋めらるゝを苦痛悲哀と懼る、懼ると雖も、夢魂一度その天上の故郷に永住を戀ひ行き去らむ時、はた留め難からむ。さらば斯る靜けき春の夜に月に浮かれし夢魂が、汝の骨肉を刹那の墓に殘し去る時と同じく、哀なる六尺の棺中、永遠の墓に、骨肉を置き去られむ時もまた、汝は平靜なる心と安定なる情とをもて、無何有の境に遊ばむは至理なる道にあらずや』。

なほ刹那だにわが骨肉を離らざる夢魂の聲はかくわが胸に聞ゑたり
今更に「生」と「死」との門を鎖鑰もて啓かむとせるわれも、「自然」の
寂寥なる夜氣久しく松下石上に留まらしめざるに、やがて復び石磴
を下り大路に出でゝ顧みれば、明神の森黒き雲の如く、月に深けたる
夜は三時、遠く二三の鷄聲を聞きぬ、曾て故園青山白雲の間、桃花
流水の杳然たる寰區に、世を塵の外に忘れたる夢を喚ばれしと同じ
き其聲を。

春感

春風京洛幾曾經。
有髮身須塵裡住。
重簷人靜花如夢。
好把幽寥多少感。

（三十年）

湖海鷗心竟未停。
莫愁歌在酒邊聽。
古廟宵深月獨醒。
題詩故里舊旗亭。

（廿七年）

ふくろふ

常盤木の葉に置きわたす
白露を、
玉と散して吹風の、
聲のみ高く、照る月の、
光さやけし、山里は、
さゝら小川の水の音も、
ひそみゆくなる夜を深み、
ふりさけ見れば天の原、

浮雲消えて、いや高く、
隈なくさえぬ、いや遠く、
際なく澄めり、さながらに、
天と地とは、みどり子の、
揺籃に結ぶ夢の如、
いと安らけく愁ひつゝ、
夜のふすまに眠るなり。」
賤が伏屋のその涙、
玉の臺のその宴、
願も悔も罪禍も、

幸も憂も、人の世を、
纏ふ煩惱はおしなべて、
天の戸渡る月影に、
夜の護衞をまかせおきて、
休息の床に臥しにけり。
繁き林の奥深く、
杉の葉がくれ、ふくろふの、
獨り起き居て、たくましき、
翼を疊み、圓らなる、
眼を開き、樹間漏る、

月をにらみて、何事の、
ありとも見ねど唯管に、
啼く聲凄し夜もすがら。
月をや呼ばふ、天高み、
月やは言はむ、はたやまた、
森をや呼ばふ、影くらみ、
森は語らじ、山彦も、
潜み默せる小夜中に、
應へむものは何かある。
あはれふくろふ、汝はしも、

あやめもわかぬ烏玉の、
暗きに紛れおのれのみ、
光れる眼おしひらき、
時占めけむ百鳥の、
小枝の宿り危くも、
結べる夢をぬすみつゝ、
木の葉の床を、襲ひては、
捜り歩きて、ちゝのみの、
父の鳥、はゝそはの、
母の鳥の羽がひにし、

休らひ臥せる雛鳥を、
親もろともに屠りつゝ、
いとも痛ましく、其肉を、
割てとり食み、其血をば、
啜り飲みつゝ、哀れなる、
幼き鳥を、おのが慾の、
犠牲とはなして腹をみて、
咽喉を濡し、限なき、
慾にぞ飽ける汝が身は。
あはれふくろふいざ問はん、

慾にし飽くを榮華とも、
福祉ともいはゞ、汝はしも、
榮華なりけり福なりけり、
樂しかるべき汝が心、
何に叫ぶらむ悲しげに。
蘆襖纏ひて泣く兒の、
乳房もとむる聲の如、
寄邊を知らぬ老の身の、
神を顧はる聲の如、
いと悲しくも慳じく。

此夜もすがら叫ぶらむ、
月や語らず、森こたへず、
天地眠れる此夜ふけ、
何に向ひて呼ばふらむ。」
汝が聲をしも聞くからに、
心動かぬ人やある、
心の底に潜みたる、
わが聲はしもつげていふ、
あはれふくろふ汝が聲は、
いとすさまじくいと悲し、

榮華に飽ける聲ならず、
福に滿ちたる聲ならず、
罪に傷みて呼ばふなる、
獄舍の暗黑を穿ちつゝ、
漏れくる聲と異ならず。」
あゝ、ふくろふよ、汝が身の、
心の飢と渇とは、
肉に飽きても、いね難く、
血をすゝりてもいね難し、
心の飢餓を、渇をを、

いやさむものは、血肉の、
外にこそあれ、汝もなた、
求むるものゝありてこそ、
肉と血潮にあきながら、
眠るべき夜に眠らずて、
月と天とに呼ばふらむ。」
汝が聲悲しいと悽し、
罪におきふす空蟬の、
世をもしばしは忘れたる、
夢もはかなく、汝が聲に、

醒めてし見れば高嶺なる、
月吹き落し、山風の、
ゆく末白し、霜のあり明。」

（二十四年）

無聲聲

漆園が胡蝶の夢に春は醒めて空しく、康節が杜鵑の聲に、夏は去りて痕なく、野分の風、梢をたゝき肌寒く、前栽の海棠落花狼籍、見るは哀の時節來れり。雲心鶴態閑情骨に入る處去今を冥想すれば、曩昔の非、今は是、今の非、曩昔の是なるもの多く、微に我知の知る所を知らず、我知の知らざる所を養ふの徑路を視る、我知はしかく變れども、眞宰は依然として造化を彰はし。蒼蒼は依然として綵綸を顯し。天地の眞美は油然、我魂交る處に下り。我形開く處に來る。永朝永夕。窓を開けば青山入り。簾を捲けば白月窺ふ。嗚呼其知るところの天地の美を把するを得て、未だ知らざるところの宇宙の眞を尋ね、庶幾くは無聲聲を聽かん。

（廿六年）

（一）山茶花下

萩の葉陰に私語ける鷄群、浴餘の沙に臥して聲なく低く舞ひたる蝶を追ひて、行迹失ひたる小犬も、勞れたりけん、日わたうし石甃の上に眠れり。短しといへる秋の日脚も自ら長き心地し、寂默たる村舍の閑晝、獨坐の觀念に便を思ふ、柑果は碧玉の如く垂れて重く、槇實は瓢もて作れる瓔珞の如く層りて美なり、桐の葉の風なきに一片二片落ちて、おのづからに晝を爲すも致なきにわらず、數多の果花數多の梢、眼に映じつるうちに、はからず我眸を凝らさしめたるのは、庭石の傍にたちたる山茶花一株、花の其色は白く、其姿は清く、楚々として一種の風情あり。我は唯何とはなくて此花に對し、

花の神は我魂を奪ひ、花の美は我形を化し、我は無意識に花と相向へゝ。此時花、山茶か。我は吾身か。將た吾身は花か。我は山茶か。得て識るべからず。唯瞬間我は我をだに現在を覺ざりき。

忽然、再び我が在るを識り、花は山茶の名をもて我前に立てり、宛然人の如く我に對せり。我胸底の一味は花に問ひて曰ふ、我は何が爲に此處に生れたる？。花や答へず。定めて是天は偶然に我を生せしめたるにあらじ、眞宰之を司り、造化之を育し、行くべき處に行かしめ、止るべき時に止まらしめ、必ず本心本性なるものありて、適するところあり到るところあり從ふ所あるものならむ、汝それを知れりや。花、答へず、青葉に翳されたる其風情は、霜ふり來むを待つらんが如し。さらば花に問はん、汝が其樹に宿りて、秋の七草に後れ、菊と先後を爭ひつゝ此庭に咲き、山茶の名を負ひて椿にもあらず柑花にもあらぬ一種の花の色香を成すはそも何が故ぞと思ふか花、答へず、重ねて問はん汝の形態に似たる汝の色香に似たるものにて他の樹に宿りたるを、梅といひ、櫻といひ、桃といひ、梨といひ、牡丹と號し、芍藥と號し、海棠と號し、蘭と稱し、百合と稱し薔薇と稱し、卯の花朝顏女郎花といひ、芙蓉合歡凌霄蓮といふ、姿致同からず、風情亦異なれども、いづれか花にあらざらん、さっを高士の如き梅は美人の如き櫻と異に、玉垂の小簾の裡に住はるゝ姫に似たる牡丹は、三家村の鄙びたる婦の如き桃と同しからず。蘭菊

の隱逸をもて芙蓉合歡の嬌を待つは猶薔薇の長へに咲くをもて朝顏のあぢなきに望むが如く、かなふべからず。是や一幹の花にして千種の名に變り、變れば變る樹につきて、其品其質亦異なるは、そも又恁麼の所由かある。嗚呼潔き雪の如く白き汝の花瓣は、梅とは化り得ざるか。ゆかしき汝が香は薔薇とはなり能はざるか。同一なる花なれば、折にふれてだに、同一なる風情と品質を作るとかなふまじきか。世は折にふれて汝が花を梅にまち、櫻の花を汝に望むことあり。汝が變じ能はざるを我は識れど、汝が變じ得ざる所由を我は解し得ず。答へよ、花、言へよ花、此の不思議なる袋の紐、解かでは我心休せじ。胸底の一味はしかく問ひたれども、一枝翳したる

山茶花は啞嬌の如く、風にも搖れず頷かざりき。我唇は疲れ、我顏も亦勞し、杳々昏々たる雲の如きもの襲ひ來り、竟に山茶花下に臥せり、臥して夢に入りぬ。虛より虛に飛び。空より空に浮びたる夢神は、遽然返り來て我は醒めぬ。上に蒼々の天あり、下に混沌の地あり、傍に一樹の花、彼は何の他の花にも變せず。夢前に在りし山茶花は、亦夢後の山茶花なりけり。

（二）「麓」の處士　（一）

「行く川の流は絕えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたのかつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなく」世は常なきものぞと觀したる長明の輩。「冠蓋の好を知らず、但烟霞の活を信

じ、古道を悲み、江湖散人と號して、悠々身を羲皇の傲に寄せ」たる陸魯望の徒、在昔はこれあり、今はたあるべしとは思はれじを。富士の大岳を東に仰ぎ、雲峯屈曲したる山隈に、村落とは名ばかりなる四五の茅屋、散在して一境を開きたる所あり、地勢よりして「麓」とは號しける。そこに家居して塵の騷しきを外にし、花果雞犬そが友となし、世を安げなる生計をなせる一個の人ありと聞けりしほどに、心憎く覺え、一度は訪れて其人の心意たゝき見んと思ひしものから、我里を隔つること凡そ五里、山路磽确便あしくて、え果さゞりけるを、小春日ののどけきにそゝのかされ、趙遙ひ出でたり。紙、絲産ずる一二の製造所烟突より、折々鳴らす滊苗に和して立ち

のぼる烟は、瑠璃色に清く染められたる虚空に、際だちてみなぎれり。殖産興業とて、物質世界の富饒は、此大岳の麓、草の舍多き地方にも及ぼされて、幽靜の物色は繁華の機械となり來れるを我は視たり。途次に數多の野孃が、紅く白く彩られたる髮の飾し、相拉れてなまめかしき俚歌唄ふて來るに逢ひぬ鐵道もて都門の消息、一瞬にして田舍に傳はり來し日より、海松の如き百結の襤褸纏ふたりし人の、漸く彩したる木綿裘被るに至れるを、我は視たり。數里の行き行く路にてだに、猶疇昔ほど遠かりし都門の繁華の面影見ゆるに、我胸底の一念は、そゝろに文明の波濤普く及べるを觀たり。

されど、我歩武の稍仰き、磽确の路を辿り、黄芽白麻を踏むに至り

て、一路は一路より荒れ、一村は一村より寂しく、烟突の黑烟は、疎らなる茅舍の生烟となり瓦甍の齊々たりしは、遠樹の芊々となり、折々鳴わたりし滊笛は、絶えず響く水車の音となり、なまめかしき孃の歌ひたりし俚謠は、牟々たる家犢の聲となり、羅紗めきたる帽戴きたりし人は、破れたる菅笠かざしたるものと化し、手に曳きたりし荷車は、肩に支へたる擔子と變り、華車に細かりし服佩は、疎野に太き裁著となりぬ。うと〳〵しき人の容貌も、親しましき姿態となれりし如く覺えぬ。總じて彼繁華の面影は夢の如く幻の如く消え〳〵に痕かたなくなりて、寂默たる景光は、端りなく冥茫の裡より現はれたり。我來し路の何處が此寂默と繁華の境界なりしや得知

られず。

唯いやましに我行路は寂靜境に入り、幾らの枯林を過き幾らの寒谷を渡り、路は富士の大山脈が逶迤して數多の邱山百轉したる峽に入れり。是に至りては前に家なく後に人なし、宇宙は默、乾坤は寂、言なき碧空の仰げばいよゝ青きを見、影ある枯林の眺ればます〳〵靜なるを見る。獨り歩み獨り吟ずる我聲に誘はれて、應ふる山鬼呼ぶ山禽の外には、また響としも謂はんものなく、一歩、一歩に身は此寂寞に融化せられ、我は今我行きつくべき路をば歩みつゝありやをも、朧げなるまでに、無意となり、情孤に思清く、覺えず當中に佇立み、刹那に於ける寂寞生の一味を嘗めたり。

忽焉、驚かされぬ、山貌したる老爺、我前に來れり、「好き天氣よ」と言ひて行き過ぐるを呼び、「爺よ、麓村は近きか」と問へば、「麓はあそこぞ」と頤もて指示し、言ひ捨て往く、野言品なくていとも淡し。

山峽盡くるところ、平郊出でゝまた山あり、痩せたる澗水は、細く路を縫ひ、黄ばみたる林樾は、長く崖に添ふ、水の來るところに一縷の烟たなびき、林を隔てゝ雞聲を聞くまゝに、辿り行きて、やがて茅屋兩三相列び、松樹高く聳えたる邊に出でたり。

近けば、松、百年の風雨に古りて、老幹宛然虬龍の天に朝したらんが如し、柯に纏ひ編まれたる女蘿の曇靄たる隙より、凝りたる香脂

琥珀の如く見ゆ、西に重々たる峯巒を控え、北の方東に傾きて山の低れたる峽より、千秋白雪の玉芙蓉を見せたり、南に長林相接し後なる丘陵に、幾千の蜜柑、幾千の柿樹、枝相摩し梢相交りて植ゑられたり。霜に飽きたる果實は、千萬顆の珊瑚と黄金を一齊に虚空に散らせる如し。箇中に古りたる茅葺の廈一園、曲ある衡門に通せられたるが、心憎き生計する處士の家居にてぞあらむ。

傍に日影の暖きをうけて臥したる、白犬の甚と肥えたる犢の如くなるが、絲の如くひかれたる眼を開きて、徐ろにゆるぎ起ち、我衣裾に添ひて黒みたる鼻あげたるは、此新しき客を迎ねんとにや。

白犬に導かれて門を入れば、低き竹垣の疎なるに圍れたる庭いと廣く、そこに若干の雞群棲めり。

花の如き冠を戴き彩紵の如き頸毛を振ひ昂然として長鳴するもの、綠翅日と映じ翠羽地に垂れ細々として相呼伴するもの、人の衣短かに着たらん如く脚だかに打つれつゝ階々として母雞につきあろくもの、乾沙に臥そべるもの、芥をあさるもの、白きは鶴と見まがひ、玄きは鳩かと疑ふ。其聲膠々、其態悠々。すべて彼等は自然の境界に自得して亦此寂に化せられ、穩なる棲居を破りたる我姿を訝しげに仰ぎ見たり。

彼の果實、此雞群に圍繞されつゝ、徂く光陰を送り、來る歳月を迎

ふるの主人は美ましく心憎きことにぞある。戸に入りたるに迎ふる人影もあらず、猶白犬は我に添ひて立てり、犬よ汝が主はあらずやと如何にせし、何處にか行かれしと問へど、彼は默して仰げり。彼が面に見ゆる氣は、正に是「只在此山中。雲深不知處」

口笛の聲屋後に聞ゆるほどに、白犬は顧ざまに走り去りしが、須臾して返り來し後に隨ひて一箇の漢顯はれたり。我は輕く揖して、好事なる我心の卒然此山路を辿りて此處を訪ひたるよしを告げたりければ、渠は微笑に應して、框を上り一室に招ず。

疊六ひらばかり敷かれ、物清げにそゝのへられたる室に招せられて語る。

渠は初め想像したりける童顔白髪の老翁にはあらで、白面秀眉の黒頭郎なりけり。痩せたる風骨鶴の標あり悠なる容儀松の品あり。寛帖々たる所はなけれども、高酋々たる氣自らあり。しかも冷然として氷稜たるにはあらで、所謂清相の裡温氣を藏し、金天爽颯のところろ春水一味ふくまれたるは自ら眉宇眸彩の間に知られたり。

「我は子がかゝる山谷の深さに棲みて、かゝる生計を爲すの風流超脫なるをゆかしみ、將た子が所謂材を幽藪に懷き顯を重巖に藏するを惜む、我が未だ聞かざりし子が所思ありてかゝる境界にはあるか」

我は語次に問ひぬ。

「我は子がかゝる問をもたらして、我如き山人の所思を尋ねたるを禮

す、されば子が此に至れりしは空谷の跫音にして我喜びて相迎ふ。我此山谷に棲遲して我生計をなすもの、もとより風流超脫を學ばんとにはあらず、さては子の言ふ顯を藏し材を懷くのことは我には遙か隔てり、唯吾頭顱は我をして此境界に在らしむ、何の他の異なる所思あらむ、」彼は平然として答ふ。

（二）

我更に問ふ「子が所謂頭顱とは何ぞや。肉か、靈か、實か、空か、將た何者ぞ」

彼「我未だ頭顱の肉か、靈か、形か、影か、固兩かを知らず、爾然、大荒に浮游する陽炎の凝りて成りしか、顆々　珠の如き葉上の白露が

結びて成りしか、波濤打寄する荒磯に散布されたる眞砂の、惡風に躍りたちし一粒が變じて成りしか、倡夫の端りなく南圃の畦に蒔捨てたる幺然として微なる種子が、烏鳶に啄み殘されて化せしか。將た富士峯頭千古の雪の、往々に蓬々たる天風に吹降されし飛華が、落ち來て宿りしか。碧茫々の中、天空に閃めく星斗の一角が、霜夜の寂を破る撞鐘に缺けて、流落して留りしか。我未だ知らず。唯渾然として、混ち成されたる泥丸の如き一物が、稜々たる此瘦骨に着きたるを我自ら觀る。」

我「好し、子が頭顱は子自ら何者たるを知らず、只渾然たる泥丸の如き一物なるを自ら今知るといふか。其渾然たる泥丸の如き物が、

はた子をして此棲遲あらしむるは何の故ぞ。」

彼「さなり。此泥丸の如き物ありて亦我存し、泥丸の如き此物なくんば亦我もなし。泥丸の如き物なる頭顱は、思想を我に在らしむ。考察あらしむ。觀せしむ。知らしむ。感せしむ。欲せしむ。子よ、天文學者は其自己の存在する天地を、地球なる游星といへる解說に滿意し。竟に其四圍の風物との關鎖を尋繹することなく、凡そ彼蒼たる空冥が、顚倒し破碎するにあらざれば相接し相近くこと能ふまじき、天上の「月」の側面を探究し、實に其生涯の過半を、此世界に衣食して彼月なる他界に生活しゆく。政治家は、其國家其蒼生の如何に自己と機緘せらるべきかの、一味消息を識るに遑あらで、誠に

奴隷と同躰にして異名なる「權力」を得るに汲々日も足らず。科學者は其鑛物の新しきを掘て金剛石の他の品を見んとし。其植物の珍らしきを採て珊瑚樹の別の質を發せんとし。詩作者は章句の彫琢を思ひ。繪畫者は彩色の秘曲を欲し。貧者は麭包に勞し商人は富に拜し。老翁は少年繁華の夢に送り。小兒は目睫に觸るもの、天上の星辰をすら、其掌上の弄とせんとす。彼等の泥丸の如き一物なる其頭顱が、彼等にしかせしむるを我は知る。山谷に棲み僻陋にあるの我も、亦何ぞ彼等と異ならん。雞犬自ら侶たり。花實しかく伴たり。我頭顱然らしむ、我之を欲す、我之を思ふ。」

此處士の如き黑頭郎の胸壁に、何者か曾て設け置きたる一片の鎖鑰

は、我單刀直入なる質言に容易く開くこと能はざるに似たりしが、斯く應じて默として我を凝視したるとき、我は又更に問ひて曰ふ。

「我既に子の言を聽く、未だ子の此に在るの所由を知るを盡さず、凡そ物其處を得ずして在らば、常の人之を疑はん、富峯の雪終古存す、しかも存せざる時あらば、如何、滄海水千秋滿つ、しかも滿たざる時あらば如何、錦繡の上襤褸之に添ひ、土石の中珠玉之に混じ茅屋の裡公子之に坐さば、之を怪むは理ならずや。若し夫れ渺然として顏子の陋巷に在るは、野老の破壁に偻するが同じからず、纍然として屈原の波澤に步するは、漁父の江畔に臨むと異なり。誰か直に倉夫をもて松江甫里の天隨子を待たん、誰か偏に樵人をもて中條山谷

の知非子を遇せん。子既に此に在り、我は物の其處を得ざるにあるを疑ふ。子謂ふ天文學者は月界の消息を知らん爲に、生活し、政治家は權力の柄を握らん爲に生活すと。將た子は何を欲する爲に棲むか、何を希ふが爲に隱るか。」

之を聞きし彼は、半ば色を厲まし半ば容を沈め、冷然相關せず塵表に卓立せる風姿の裡より、温乎の語氣もて應じて曰ふ。

「子は竟に我をして多く言はしむ。嗚呼子見よ。天地宇宙、巨たれども、未だ其内を離れず。秋毫微塵、小たれども、亦待つことありて其體を成す。陰陽化育行はれ、百物生息運せられ、動て變せざるものなく、時として移らざるものなく、物、憬然、亡する若くしてしかも存し。油然、形せずしてしかも神なり。去や今や、茫々たれども、之を通觀すれば整然序あり。劫を歷て亦竟に斯の如し。風や雨や雷霆や、蓬々たり濛々たり轟々たれども、之を概念すれば確乎順あり。變に際して亦竟に斯の如し。宇宙は其變其化に依て故ならず、靜ならずと雖も、しかも竟に其調其和に由て、整なり順なり。まことに是天地は天地の圍繞に藏せられ宇宙は宇宙の範裡に包まれ、遯るゝことなきにあらずや。宇宙ば何の爲さゝる事なきも、亦宇宙として物の遯れ免るべからざる所に存立して、何の一事も爲さず斯の如きものは、誰か之を綱維する、誰か之を隆施する。綱維に調ひ、隆施に和し、宇宙に覆載されあるの「人」は、此遯るゝを得ず免るべ

からざる所に存立して時に地に靈に相適し、もて圓滿完美なるにあらずや。されど其圓滿完美を缺くあるは。綱維の調を失ひ隆施の和を誤るに因る。物の遯るゝを得ざる所の外に出でんとするに由る。天に私覆なく地に私載なし。我頭顱渾然として今既に我に在り。我頭顱の當に在るべき所に存するは其自然にして、當に在るべき所に在ざるは、即ち其序と其順を破るものなるを我は思ふ。此故に我は我頭顱の物の遯るゝを得ざる所に游びて存せんとするに任ず。物の遯るゝを得ざる所に游ばんとする我頭顱は、竟に此に我を置けり。我頭顱は我に告げて曰く、物の遯るゝを得ざる所に游ぶは、其處を得るに在り。其處を得るの我を存せしむるは、宇宙の神に接して其

一味を甞むに在り。宇宙の神に接するは、自然の攪擾せられざるの地に在るに如かず。所謂冥々に視、無聲に聽く、冥々の中獨り見曉し、無聲の中獨聞和す、深の又深にして能く精しく、物と接するや、至無にして其求に供し時に駸出して其物の宿に應じ、大小長短修遠、宜しからざるなきの一境を開くに在り。是我が物の遯るゝを得ざる所に游び存し、もて宇宙の自然と相接するを得るの方なり。頭顱は我に告げて、しかく我を山谷に棲遲せしむ。子多く我に言はしむる莫れ、我頭顱此に在らしむるのみ。」

（三）

寂默は少時室を虚にし。我は此郎の言語の由て來る所を考察したれど、考察と想像は我をして稍理解に苦しましめぬ。突如として我は復た問ふ。

「子、此山谷に在りて、物の遯るゝを得ざる所に游び存し、宇宙に充塞せる自然と相接すといふ、さらは無聲の中、何をか聞和せし、冥々の中何をか見曉せし。」

彼「我聞和したるもの、眞の聞和したるものなりや、我見曉したるもの眞の見曉したるものなりや、未だ盡さず、唯鷄犬は我に見曉を與へ花實は我に聞和を供し山や水や樹や石や雲や風や聞和と見曉と

を冥々と無聲との間より供給し來る。」

我「如何にしてか見曉すべき聞和すべき？」

彼「一方か。術か。是方にあらず術にあらず。献ずべからず。薦むべからず。告るを得ず。與ふるを得ざるもの。請ふ言を措け、我珊瑚と黄金の富を見よ、我衛士と忠僕の護を見よ、我と共に。」

彼は堂を下り、我は背后なる果林に導かれゆきぬ。

黒々たる紅星の落ち懸れる如き、團々たる明珠の垂れ下れる如き、低亞せる風實、玲瓏たる霜皮、撫すれば彩を散じ、把れば津を含める柿子。金苞顆々枝に爛り玉果落々葉に亞ぎ、千頭萬頭出没陰見相壓し相重り、咀ざるに齒濕ひ、含まざるに唇甘く、佳香、人を噴く

は柑子なり。山風一陣颯とおとづれたるとき、一齊に搖き振ふさま、さながら情あり。處士は曰ふ。

「此等は我珊瑚と黄金となり、千山萬壑落木黄葉の朝顧々相結びて、濃霜の來るをまつ、霜天日を連ねて、此等は主人の爲に、價ある珊瑚と黄金とを採り成し、もて此等を其蒂より採り其葉より撮りゆく沽客の訪ふを待つ。やがて時をはかりて倩夫來る、野老來る、牛儂來る蠻妾來る、彼等は彼等の買ひ得べき程に隨ひ、彼等の定むる價をもて、我珊瑚と黄金とを、其薦に包み、俵に投じ、馬牛に載せ、擔子に荷うて、そを市上に持ちゆく。換へ得たる錢貨は、我經年の糧を作りて餘あり。我はそを鷄群等の飼養に費し、亦珊瑚と黄金との

培養に充つ。我は天の我に此等の糧を供せられしを謝す。子、是我富にして我糧なり。

我は頷きつゝ、相伴うて復た戸外に返る。

先に我を延きたる白犬は、近く眠りたる場より重げなる軀をかたげつゝ歩みよれり。竹圍は寂として一雞の影なく、遙か隔たりし竹林の裡、紅、白、綠、黄、の色の、徐ろに陰見しつゝ搖動するを認む。渠は見て微笑みつゝ、口笛を吹きぬ。

紅きもの、白きもの、綠なるもの黄なるものは、遽に色めきどよめき、やがて飛び、舞ひ、躍り、鳴き、叫び、さながら、彩幟したる競走者の號鈴に馳する如く歩卒の喇叭を聞きて急進する如く、彼の

細き脚に地を踏む音、自ら調をなしつゝ、風擁し來りぬ。主人の傍に添ひて竹園に集りたる群、一齊に其花冠を昂げ、其彩紐を振ひて仰き見たり。

小桶より散らされし生麥（あらむぎ）は、彼等の望をみたし、定の外なる好餌と覺しく、嬉々たる佳音に相和して爭ひ啄みぬ。憂々たる音、相上下する彼等の美しき羽毛は、少時我等をして默せしめ、如何に彼等の其食に餘念なきかを思はしめたり。多量（おほ）與へられし食に彼等は腹滿てる樣なり。食ひ了りては三々五々相伴うて、竹園の東隅西隅に群れ、羽蟲を捕り細嘴を磨ぐ。翅裏に丹頸を藏みて臥するあり。乾沙に玄膺を委ねて橫はるあり。悠々自

得の狀、初めに我見しと同じ。處士は曰ふ。

「此等の群、他の意識なく其處を得たるを視よ、彼等は朝とく起き晡れたる細やかなる室に、雛（ひよ）を孵（かへ）す。與へられたる食に飽きて臥し、豊かに暖かく、其翔の美を輝す日を戴きて逍遥ふ。能く其糧を其主に供へ。能く其地に自得し遊ぶ。悠々として自然の手が、自然に彼等をさるべき樣になせるに任せて、又更に渝ゆることなく、いとも安げなる其一日を送りつ夕陽の山を舂く頃、彼等は各其塒を知りて其巢に歸り其居に安じ眠る。子、試に一度、初三の月淡く黃昏の光を漏すとき、近づきて彼等の棲居に寄り聞け、彼等は纖々（ほそ〳〵）と板際（いたのあ）よ

り入る黄昏の微光に浴して、相私語しつゝ、細々として微音を作す。恰も杳冥より靜に下界に降るの天使が、寂寥の裡に偶語する如き幽妙なる音ありを視よ。彼等は宇宙が與へたる其一日の行樂に滿腹の嬉々を寄せて、此夕の靜に眠らんとする時、そが宇宙の榮光を稱へんとするにはあらぬか。かくて幽妙なる音は漸く消えゆき、穩に古められたる彼等の眠は寧く結ばれ、やがて彼等の鳴くべき曉に至る、若し夫れ落葉風に驚き躍りたちて戸を打つとき、或は雪霰雨に和して邊に屋を敲くときは、彼等は咄々相警め相叫ぶ。彼等亦物其平を得ざるとき其衛を爲し其備を爲す彼等は此無邪氣に忠實なる白犬と共に、我衛士なり我僕なり、子見よ、我伴侶の如何なる樣かを。」

我は轉た此處士の自然の手に撫せられあるを感じたりければ、唯丁寧なる彼の話說に首肯しつゝ、僅に數語の應答を爲し。再び框に踞して淸き溪水に烹られたる茗を喫し、黄柑の香人を噴く圓果を劈き喫ひ、復た此淸境を後に見て塵寰に歸下るべきの時とはなりぬ。彼は其伴侶と境界との故を、奇なる頭顱の話頭よりして多く語りたれど、竟に其父母兄弟等の有無、自家の過去とを說かず。我亦彼の外に人を見ず。そも耒耜をもて隔たりし野圃に出でしものか。罔罟をもて近ゝ溪澗には下りしか。婢僕ありや。家族ありやとも亦問はず、唯自然と彼の關鎖を語られしのみにて、我は飄然として來り飄然として去るの客となりぬ。今此自然に圍繞されたる境界と相別る

るなり。

處士は門に我を送り、白犬は路に我を導き、鷄群は默して點頭せり。送られて門を出でし我は、少時茫然として自失し、さながら桃源洞を出でたりし人の塵寰に下らんとせるにも似たり。

鳴呼彼が宇宙は彼を作りしか。彼が過去は彼の頭顱を作りしか。鷄や犬や樹果や總て皆彼に對しては、さながら人の如く化し、人の如く語らふものなり。山禽のほろ〳〵啼く音は、彼の父母の聲にてぞあらん。溪澗の水のさは〳〵鳴る韻は、彼の律呂にてぞあらん。山や陵や長林や古松ヤ總て是れ亦人の如く彼と相逢ふにてぞあらん。寂々たる物の色が。此山谷の小天地を鎖し盡したる其當中に在りて、正

に彼は所謂冥々の中に見曉し。無聲の中に聞和するにやあらん。顧みれば、峰巒丘陵、林木、烟靄盡く悠々として自然なる天地を作りなして彼の茅葺の一宇を繞れり。

長明。魯望。淵明。屈原。鳴呼誰ぞ。彼等を彼等の地にあらしめたるは。處士を繁華の生存競爭場より取りて、此寂寞たる自然の手に置かしめたるは誰ぞ。そも處士の言へりし如く、彼等は唯其物の遯るゝを得ざる所に存して遊び。もて宇宙の眞を得、神來の一味を喫せんとせしにあるか。

飄緲たる天風に吹き送られ、復た千峽萬轉したる路を下る。牛儂の歌、山禽の聲、寂寞を度りて、遠近の暮烟漸く多し。落日西巒に懸

る、小春の風光短く、飛鳥塒を指す、天路轉た遙なり。

磽确なる山路を降り下り、我は復び形似の物の界に歸る。顧みれば、夕の明なる月、纖々たる星光と共に、ほのかに虛靈なる神の境を照り、青々たる山、無言に靜坐し、悠々たる雲、無心に往來す。我は立ちて揖す山の靈。雲の君。

湖上落雁

二十五絃遺韻長。
可憐清怨天難寄。
滄雲微雨憶瀟湘。
字々平沙寫斷腸。

（十九年）

明暗

（上）大晦日の血

殘つたは家傳來の無銘一刀。封建三百年の餘慶に五人扶持を徒食む家に生れ、剩へ父は西丸附の役目に給料若干をあてがはれ、わが放埒の代にも、幾らの事は欠かず、世事は斯樣なものと思はれた。七歲の祝儀にわれに袴着させて間もなく、母は黄泉の客となり、後に來た繼母めは、箸の上下に我を虐り、十歲の時であつたか、町人の小童と喧嘩し、泣て歸りしとて、箒にしたゝか打れし疵、今に背に殘れり。安政の大地震に、梁の下に敷かれし父を、救はんとせし

我が力及ばず、親子の死別の時は、あゝ眼瞼に涙を湛めて鼻つまらせしが、其折焼け死し繼母めは、悲しくも惜くも無かりし。雙親亡き後はなか〳〵に氣は樂になり、妻に來るものもなし、役目もなし。北里南郭に遊蕩三昧、世は色の海、酒の淵、小判も小粒銀も他に用途の有るものでなし。好事に魔多しとは誰がはざいた言葉ぞ、わが歡樂を用なき同族輩、彼此と聞を惡くし、不足勝の扶持にも離れさうなりしが、東台の火事、伏見の砲烟さては五稜閣の戰爭、四年前に降つて湧たる世の騷擾、勤王も擯夷もそれは國の事、我には痛くも痒くもなかりしが、將軍の移らるゝと共に、我も同族諸共に此地への移住、建て列ねし長屋に獨身の孤棲、彼の黑羽二重が思の外の役目、

彼方でも移住樣此方でも士族さま米櫃は空にして置いても、頷の干わがる慮なく、今日は花見に誘はれ明日は社日に呼ばれ、やれ生花やれ月琴の指南、道樂仕事が此我を先生と呼ばせ、是ならば王政復古もあり難いと、遊樂の夢は束の間に醒めて、さて〳〵今日此頃の霜枯時の困窮さ。吝な人の情よ、薄い世の態よ、何時か我を淹昨と、あの土臭さ爪彈き、見え透た心だ酒の給與も厭、金銀を貸すも厭。何の百姓輩が。……さうは言ふ者の今さら思へば戰爭の狼藉紛れ甘い金儲けも有たらうに、正直に同族と共々此處まで隨て來たがわれの不運か。……憎いは百姓輩、拒まば拒むで可し、此刀の腰に在るを忘れたか、千葉へ幾年を我も通た身だ、血を見たことはなけれど、

斬るに労力のいることかは。今日終日の奔命に、鐚一文の光をも拝まず、彼も無益是も無効か。博奕、賭、欺騙、強迫、仲間にならぬものはなけれど、まだ可愛いわ、血を染けた事はなし。もう斯なっては如何でも此刀が器具に成るか。方便が無い、あゝ飲みたし、金が欲しいわ。

爰、東海道を北に四里ばかり距りし富士の麓、萬野原の士族村を少し隔てし林隈、茅葺の屋根木枯に荒れ、南瓜の枯蔓おどろに匍匐ひ縅おたり。斧の痕磨り削けたる柱は礎を外れて、傾さしを杉の古丸木に支へ、戸鎖もおぼつかなき軒門を、山風の颯るに曝せし孤屋。住むべき家とは見ねず、竹骨簡々露はれ寒さに裂る壁の破隙より、紺碧く雲なき天は爛々たる星辰の眼もて覗ふ。牀簀低く狭さに荒席四枚ばかり敷き、一間の袋戸棚は名ばかりにて歪み、斜に鎖て餘せる隙よりはみ出し如く筍皮茶椀などを見ゆ、棟梁鼠の通路となりて糞粒時に落ち、蜘巣煤を宿して長く垂れたるは、風に揺ぎて自ら鞦韆を演ず。室中に切りし爐に椙柮焼さて蹶跪組める一箇の壮漢。齢のほど三十路を五六超ねしと覚し、面長く鼻尖り、眉毛疎鬆に唇薄し、鬢髯近く剪りしと見ねて、頭髪蓬々に耳を蔽へり。極月大晦日というふに素給に胸毛を現はし、吹き入る風の寒さ脊に浸むを、折々身震ひしつゝ爐を弄れば、燃ねたつ椙火、青白き顔を照してさながら山鬼の如し。

遠寺の鐘鏗々響けど、無常を識るは他の門なり。厄拂の聲面白げに微に聞ゆれど、惡魔を追ふは此家にあらず。春餅音、人音、足音など人間の聲は合響となりて空明に散じつゝ聞ゆるに耳側て、心あらげなる顏に、冥濛と光澤なき眸子もて戸外を凝眸めぬ。やがて爐端を枕にして轉げたる古德利に視線をつけ、垢に黑みたる隻手に取りあげ、咽喉をぐいと鳴らし、唇頭にあて見れど、あはれ露の餘滴だになし。鄙しげに鼻につけて香のするを、せめてもの心遣りにせしが、むつと疳癪を發して、砌に拋げつけ、罪もなくして微塵に碎かれし德利を睥睨に視やり、またも牓火に默然たり。

燃ゑては熾り、熾りてはまた吹かれて燃ゆる榾火と共に、その心も

また如何に往來ひしけむ、如何に明滅しけむ。手を煖め脛を焙り、唯管俟つことある如くにて夜は更けゆき、戸外の動響も微になりつ、落葉騒だちて風に狂ふ聲聞ゑぬ。

遽然卓立ちあがり、帶ひき締め、傍に置きたる黑鞘の漆斑に禿げたる一刀はしらかし。狹みし鼠色の手拭しつかと被り、下りたちて板戸荒く開けば、夜は黑く天碧み、茫々として寂寥なる天地、黯澹に隈どりし富士の一角に、きら〳〵北斗の光芒高し。無邊の枯野を吹荒み來る朔風、氷よりも冷く面を撫で、寒氣は凛々として肌を砭りさるゝ心地、息を凝らしある程の筋力を總身に籠め、顏の紅くなるまで佇立み、やがて四顧しつゝ、脫兎の如く馳せ出せり。

暗黒ながら星影に途を辿り、石に躓き小溝に轉び、對脛を撲ちさては瓜をも剝ぎたれど、慾望の前には水火の苦もものかは、甲州街道大宮を距る遠からぬ森蔭に來りぬ、やゝ踟躕ひてさながら獵夫を懼るゝ鹿の如く四圍に氣を配り心を置きてさて森の裡に隱れぬ。袖を荊棘に絡まれて避易ぎ、頭に松子を受けて驚き、漸く路に出づるに便ある塲を擇び、枯草が刹那の坐褥、蹲りながら欅劍紐を解き鯉口緩げて、人や來ると忍ぶ。確に北山の男今宵沼津郡政に金持て行くと知れり。首尾好くば望は足る。まづ扮裝より作り、高飛して遊興は思のまゝなり、是にて多時は樂をすべし、江戸に行くも可し、甲府に行くも面白からむ、靜岡も好けれど近くて惡し。兎にも角にも

握た上の分別如何とも決くべし。大金のこと定めて一人は通らじ、怯弱の農夫輩一揮に逃げん、生命は惜かるべし。袋包ならば投け出さん、財布ならばそのまゝ逃るか、逃れば此物よ。いや金と見せて包を拋げ懷に眞物を入れ、狡猾くやらるゝ例なきにあらず。一人は金持ち一人は從者、孰れと分別すべき違へては最後なり。嚇さんか捕へんか、手に餘らば鏽にしてやるまで、何の斬に難くはあらじ。ならば此刀に血を染けぬ作業が、罪作りせぬ腕の種、好きでするでは無し、罪作つたところが、金が歟の世の中、錢貨持たが其方の不幸、方便が無いわ。斬られたら幽靈は財布に出て貰はん、其樣ものよ。あゝ夜は更くるに影は見えぬか、此路より外に通ふ路なし、否

應なしの往來、郡政に持ち行く錢貨、今宵を過すことあらじ、もう來る理。ゐゝこれ梟兒靜にせぬか、や、冷たし、生血を落したか、叱、叱、退け退け、おゝ頸の冷たさ、おゝ寒、おゝ寒、わゝこの寒さを今宵の一利に暖まつて、思ふさま飲むでくれうぞ、寒いことかな、ゐゝ肉蒲團までの忍耐、少時だ少時だ。

心は肉に語り、肉は心に應へ、究ては待つ心と配る眼耳とは一團となりて、此際天もなく地もなく空なる世界に遊べる人の如く、黙然として踴る折しも、提燈見ゆるにさてはとうなづき、寄るを覗ふ。それかと見れば燈の記章思ひしに違ひ、人も寛々たる大男、絹吳絽の羽織着て、其頃流行りし紺の韮山裁著を穿き、二尺餘の一刀ばつこみ、歩む容躰、草鞋の運び樣、五分の隙なく、しかも鐵鞭一枚を隻手に握りたるは、平人と見ゐず、寛悠に過ぎ行く。志すものならずとも、時宜に依りてはと思ひこみし氣、少し後れて上視に睨みしまゝ爲なく通しぬ。

大男の足音遠く消ゐゆき、もとの寂寞になれるほどに草履の音凍れる土に響くを、それと思ふ耳頭に、端唄の高聲、故と此林の前に張りあげ、調子外れに節奏亂れて、語尾の少し震へ歌ひ行くは、何村かの若ものなりけり。總身に凝りし欲望なれば、賺され惑はされ、心苛ちて掻き摘りたき樣なれど、靜に忍び耐へつゝも冰つく寒を堪へ、飽まず、瞹せず、嚔せず、咳さへならず、靜まりかへり、潛み

居だり。

こ度は何ものにあれ、此路通ふほどの人、幾らかを懐にすべし猶豫すべきにあらず、何の鐵鞭ももの かは、若ものとて徒に通さじ、來れ來れ。

あはれ、此魔に誑かされしもの ゝ手に、落つる餌は誰ぞ。足音茫然として凍れる虚空を破り、小田原提燈の火影、梢の隙に見ゑつ隱れつ、常磐木の青き葉間を透して揺げり。さてこそと起立る時、鈴の音ちり〳〵と一匹の痩犬、前に走り、のそ〳〵と枯草を踏みつ頻に鼻を鳴らし傍近く寄る樣子に、はつとばかり驚きしが犬はさあらず路に出で顧みて主を待つ樣なり。

助かりぬ、心悪き犬め、今須臾默れ吠ゆるなと、やがて近く提燈の章正にそれなり、木綿づくしの裁著姿二人、黒き布に頭を包み、懐ふくだみたる躰さも朴訥氣なり。一人の肩に懸けたる袋包重げなるは確に錢貨なるべし。寒いこつたの、否でも應でも郡政が對手では爲方が無い、飛んだ役を言ひつかつたものだ、急いで行かうよ。左樣とも〳〵、觀音講の當籤は悪く無いが今夜の當籤はならば御免だなわ。大分に腹が減つたやうな、吉原で夜食しやうか、此樣な時上戸は徳だ、一盃ひつかけた勢で恐ろしいも何も忘れて行くが、いやもう此處は幾度通つても心好くない處だよ、大切の御用ぢやに。なにな斑黒犬を拉れて來たによつて安心よまあ〳〵用心々々、おゝ寒、

おゝ寒。危難の近づきたりとは露知らぬ田舎人の話言、此方の耳には入らず、胸は頻に躍り、耳熱して顔然ゆるが如く上氣せ、蹈みたる落葉のきしみも、鐘撞く響に通じつゝ、一心さながら矇朧たる薄絹に覆はれし如く、ぶる〳〵と慄ふ手に、握りしまゝの欄するりと引き抜き、梢の陰より白刃一閃。

噛つかむばかりに吠ゆる犬と共に、立ちはだかりし人の影を視し兩個の驚愕、言はあらず路を奪て逃げ出しぬ。遁してはと追迫る。錢貨出せ包置けと言へど、兩個の耳は恐怖に聾いて、唯管走る。逃げつ向ひつ吠ゆる犬の聲、救助を叫ぶ人の聲、刹那の間、心は益々狂乱し、揮り下す一刀に、倒るゝ男もろとも滅せし提燈暗黒に一人の

影は隱れぬ。無二無三に打つ刀の下、煩悶き苦む聲弱はるを、手をかけんとせしが蠢動くに安からず、また揮り下す刃、微になりゆく呼吸の通ひ、禽の悲啼くが如き一聲を、娑婆の虚空に殘して、旅人の魂は逝りぬ。

寂寞は再び天地を鎖しぬ。我ならなくに夢より覺めたるもの〳〵如く、今はた我は此人より金掠る理なるを識りしが如く、急ぎ屍躰を探りて此か彼かと求むるに、塵紙、莨菪包、折りたる手拭、他に是ぞと思ふもの無し、袋包は若しやと星光に透せど、地盤冷かに横はりて似たものも見ゆず。四顧の萬山低く暗黒を染め、千點の星辰森々として空に輝き列れり。乾坤無言に天地無明なる當中に、瞠りて閉ぢ

し眼、叫びて切歯かし唇頭、虚空を握りし掌、その血や凝らん、その肉や凍らん、屍は地に臥す、寂。獣。

折しも一陣の朔風、梢を鳴らし來て胸を劃れば、奇寒骨に徹し腹に侵み渡りて、總身疎縮み、我あるをも覺えずなり、佇立みしまゝ刀提げしまゝ、屍を凝視しまゝ、人か木偶か。

下　元朝の雪

淡き星光に射られて、夢の如く地に落ちし人の影は、やがて動き初めぬ。身を翻して元來し路に返りつゝ、幻の如く顧りみ、現の如く走る。忽に襟もとを撫るものあり、熊の掌か、裾に蜚はるものあり、獅子の鬣か。背後に嘯く聲あり、鬼おのれを呼ぶにや。霜の針は鬼の爪よりも鋭く耳を刺し、風の刃は魔の牙よりも強く頬を斫る。影にもあらず形にもあらず陽炎にもあらず烟靄にもあらざる一種の氣は、さながら生けるものゝ如くに追ひ隨ひ來て、身は前途に歩みながら心の眼は後にのみ措かれつゝ、慄きて手に拂ひ魘ひては袖かひやり、何ものにか追はれ〳〵て、何時か途違へ、爰に風洞の前に來りぬ。ふと佇立みたり、また顧りぬ。何ものも隨き來らず。

山吹色の黄金も味ある清醪も、此時かれの心には無かりき。それは天地を隔てたるものゝ如き心地せり。一刀に斬りたるまでは、我身はわが有にて望も慾も作爲さけるが、奪ふべきものもなく勞力の空となりし今卒然として慾望は去りて悚懼は心の裡に入りぬ。

如何にしてか途は違ひし、何處にて迷ひけむ、あらぬ塲に來たりけりと、思ひつゝわが身を見れば、右手に一刀そのまゝ提げ、洽ねたる手頸氷の如し。窟の樣は豫て知りぬ、洞口一間許、取次に下りて漸く濶く幅二間より高さは七尺に餘り、岩石重疊して奥深きこと八九町にして大日の石像あり。その奥は知るものもなき怪窟。洞口露霜に滑液りて古苔蒸し蒼み、蔓草枯れたるもの蓬ろに鎖ぢたり晝すら暗黑にして冥々、松火の光をかりて好事に入るものこそあれ、夜は元より人を外なる洞窟、乞に入るはさながら魔界に下るなれば、心地自ら凄じかるべきを、かれ今はものゝ氣に追はれつゝ、逃るべき所なきやうなりて、今宵は此窟に過さむとや思ひけむ。急ぎ來し

歩みを止めて良久思ふが如く佇立みけるが、折しも疾風凛々梢に鳴りて鬼の如く叫號ぶと共に、伏したる枯草は一時に起て劍の如くに襲ひ來り、黑魔の如き萬山は鐵の額を列ねて迫り、百千の星光、爛々たる瞳をひらめかして一齊に睨めば、四肢すくみて、五尺の壯漢忽ちに呑まるゝ如く洞窟に入りぬ。

黑暗なる洞窟、盲者の如く杖と刀を賴みて、搔い捜りつゝ辿り下る岩蹊、眼は瞠りても映るは瞳のきらめく圓形が、朧月のやうに瞼の際に出沒するのみ。但だ睨みつむる星影もなく、襲ひ來る風もなし、追ひ來しものゝ氣も洞の口にて去りしか如し、少し從容き、足すりしつゝ運び行く足下にばさりと觸るゝ物あり。ぎよつとして腰うち

屈め撫づれば、荒き手感に筵なるを知りぬ。もち抗ぐるに重からず、好きもの得たり茵にこそ用ゆべけれ、居置もこゝらぞよきと、臀を据ゆれば踏み伸したる脚にまた觸るゝもの徒に眼を張つて取りあぐるに、小さき薄き經木幾枚も重ねたるものゝやうなり、腰にせる莨包に黒消あるを思ひ出で、取り出して磨り出す夢の如き微光、老婦の針絲通すやうに眼の前にひきつけ視れば、あな嬉し、經木は引光奴の束なり。やをら一枚を黒消に點せし光に、岩壁の隅枯草木屑の堆かきを認め、そのまゝ火を點くれば、焔に飢えたる草ども一齊に燃え出でゝ活火一發、四圍ぞ明わき。

半ば欠けたる椀などゝ、散乱せる襤褸の斷片、わが敷されたるは海松の

如くに破れたる筵なり。乞食の棲みたる跡にてやありけむ、手足稍暖かになるまゝ四顧せば、岩壁は層に層を重ね、石脈密に尖を爲し、牙なすわり劍なすもわり、色赭く斑なる乳房やうの岩頭より、漏るはどの清水滴れり。渇せる咽喉は猶豫はず、雙手に掬び嘗めたる味甘露の如し。四肢やゝ煖に渇をも醫して、少し生ける心地になりぬ。血に曇りたる白刃は、反打て傍に横はり、淡紫色に塗れたる衣の袖も共に焚火に焙られたり。

一旦暗黒に光を與へゝかれの心に從容を與へたる焚火も、枯草木屑限ありて、焔取次に心細く、白烟濛々四邊を罩め來り、朧の影夢よりも淡くなりしが、忽ち再度明くなるかと見る間に、全く熄えて脆

き炭火のみとなり、その炭火もやがて紅き色端より端に黒くなりゆき岩壁は幕もて一枚毎に蔽ひゆく如く、全く元の暗黒となれり。

燃すべきものはや盡きぬ。物の色既に見難し。かれはまた唯瞠る瞼にきらめく瞳光の出没するを見るばかりわが身の外に心の遣る方は無し。

世を隔てたる岩窶は、萬象森として群動全く息み、心耳自ら清み來るに、滴る水の音のみ幽に聞えて腸に浸む。岩より岩に滴り落るその水の音、さながら死を幽冥に送る鐘の聲を、雲を隔ちて虚に聽く如く、流れて低く通ふときは魔神の私語くにも似たり。

あゝ誤りぬ、入るでは無かりき、彼方を曲れば路はありしを、路なしとても行くべかりしを、何の心にて斯かる處には來しものぞ、わが家に歸るべかりしものを、あゝ誤りぬとばかり嘆つほどに、總身の毛逆立ち來りて、眼前に暗黒なる岩壁忽然として劈くると覺ふと共に、朦朧たる一箇の幻影、千條に亂れし黒髪鬱々たる裡より、青ざめたる人の顔、悽然として現はれ出ず。絲より細げなる人の指、蜘巢の如く縷々として何處よりとも無く繰り出され、やがてそが人の顔もろとも、氷よりも冷く己が頬に觸れぬ、覺えて慄ふほどもなくその纖き幾條の指は、さながら蛞蝓の滑るが如くやわ〳〵と頸を締めつけたり。覺えずわれにもあらず苦呼を發して岩にしがみつけど、青き顔は俯したる地にも視るべく待てり。細き指も離れ去らず。

やがて岩壁は生あるもの〻如く自ら前に揺ぎ出でゝ四面よりわが身を挟みこめ、あはや身は押しつけられむばかりなり。仰ぎても俯しても見ゆるは、わが身の外にあるものならで、正しくわが瞼の裡に在るなり。今はわが力の及ぶ限にはあらず、覺えず歸命大日如來なる言葉は、自然におのが口より出でぬ。

あゝ恐ろし怖ろし、われ人を殺せるか、いや〳〵わがわの刀さるはどに鋭くはなかりしものを、彼のもの死しはせざるべし。いや〳〵生きはせざりしか。あゝまた視ゆる！。斬りしは一刀と思ふに、その一刀に死しはせまじきものを。あゝ殺せるか、殺せるか。

黒き乱髪、蒼き顔、白き指と共に再び瞼に襲ひ來ぬ。苦叫に倒れ、唸きて慄へつゝ、暗黒なる岩窶に苦み悶へ時も分かず、半ば死し半ば生ける幽明の境にさいなまれつゝ轉輾反側、はては我手を下したるその凄じく悲しき場所をば、今一度見たくなりぬ。

此決心を得ると共に、暗黒かきわけて、必死となり、唯管大日如來を默禱し、歩み心の仰ぎたる方を志し、一途に匍匐ひ上るに、おのれ進むにや岩壁動くにや、思ひ分かず。千辛萬苦の境を經て行くこと凡そ幾時なりけむ。忽然として一閃の光線、電火の如く痛きほど眼を射て、覺えず閉ぢたる雙眸を、程なく開けば、こはこれ洞窟の口。

暗黒なる夜は明けたり。何時降りにけん天地は雪。乾坤一白。汚れし血、凝りたる屍、その罪の痕をさへ、蔽ひ沒せる玲瓏世界。この清き一刹那、岩窶の頭に聖の如く佇立める一箇の壯漢。

（廿四年稿）

丙戌新年

椒酒酌來依舊儀。
○農○工○商○富春千竈。
○云○是昇平皆有頌。
○莫將陳套竟無詩。
試毫幾擘彩箋破。
特覺墨香浮硯池。

田園雜興

暗より黒くたちのぼる烟突の烟を、見馴れし眼には、曖々として遠く閑にたなびく茅舍の炊烟珍らかなるべし。練瓦造の齊々として瓦甍の列びたる、鐵路を馬車の輾りたる都大路を往來するなる脚には、林の陰に曲り小川の隈に折れ、彼方此方に立つ家居を縫いゆく樵路徑ゆかしからむ。滝笛の響轟々たる馬車人車の轣轆たる曇玻瓈の窓の裡より三絃唱歌のなまめきたる、金殿玉樓の宴の賑はしさより、井戸端會議の話說の喧囂しき等、終日終夜動響となつて、聾いんばかりにたこのあたりし鼓膜に、背戸の水車の音、野面の禽の囀哢、

牟々たる家犢の聲、喔々たる雞の聲、賤が家に機織る梭の聲桑茶摘
蒭蕘の歌唄等、靜に從容たる天地に折々けうとく聞かんは、甚と興
ありて、樂しかるべき事ならむ。さらば一刻千金とも言へる此忙
がはしき世に、宛然春の日に庇出したらむ如き田園の事どもを語ら
むも強ちにはあらざるべし。

（三十年）

（二）彼の盧

眞山民の詩に「泉に歡べる聲あり、我を呼びて澗谷に來らしむ、雲
には喜べる容あり、我を招きて林麓に入らしむ、泉は以て我が心を
洗ひ、雲は以て吾が目を娯しまします。」
彼の盧はその泉の聲も雲の容も、皆親しましく、富士の麓にあり。

老いたる幹に葛蘿の纏ひたる松、直なる柯高く天を指せる梧桐、
檜、冬青樹、梅、櫻、百日紅、木蓮、茶梅、李、杏、梨、栗、柿、
大仙木、樫、樟樹、巴丹杏、椿、落葉松、槲、棗、合歡木、ユーカ
リ樹、楓、銀杏、林檎、桃、仙動木、南天、柚、密柑、橘、薔薇、
茱萸、海棠、柘榴、木瓜、茶、榊、大明竹、枇杷、梔、山吹、躑躅、
楊梅、藤、柳、槻、黑檀、棠檀、柊、杜松、是等の樹立、春夏は翳
鬱として翠を疊み綠を凝らし、秋冬は枯瘦して山月を懸け寒鴉を留
むるそが裡に、膝を容るべき蝸盧一軒。
背戸を流るゝ小川あり、細々として寂寞を語る。籬を隔てゝ森あり、
幽禽の聲を聽くべし。森を隔てゝ田園萬頃、富士の高嶺を麓路かけ

て仰ぎ視るべし。門に訪ふ人稀なり、蜘蛛の絲かけわたして、主を
塵の世より閉ぢ籠めむずるが如し。三面の青山笑を含める一面の窓
に、田子の浦の眺望あり、滄溟萬里、碧波縹緲として、海氣茲許に
來らむかと覺ゆ。家宅の中數畝の圃あり、豌豆を蒔くべく、胡蘿を
蒔くべく、蕪、菜、午蒡、茄子、胡瓜、葱、薑を好むまゝに培ふべ
し。芍藥、長命菊、金線花、鷺草、月見草、菖蒲、はた水仙を植ゑ
たり。自然の榮華としも言ふべきもの大概具はれり。森の彼方、一
町許にして寺あり、伽藍古色を帶びて堂宇ものさびたり。觀經の聲
木魚の音寂寥を添ゆるの邊、彼が祖父の石碑は立てり。功名、富貴、
毀譽、榮辱、禍福、悲喜、哀歡、是等を曾て一旦心に身に擔ひたり

し者は、盡くその寺の後邊に、高低參差せる亂塔の下、苔と共に休
めり。かれの祖宗は眠れり、かれの叔姪は眠れり、はたかれの父も
苔未だ蒸せず雨いまだ銷びざる石底に眠れり。今を昔に苔蘚空しく
墓上の名を埋め、雨徒に石頭の字を銹するの處に長へに不朽不滅な
るべき崇嚴なる天の星辰の眼、月の面に瞰下られつゝ、羈絆無き永
眠の床に、安らけくこそ憩へ。彼等人皆は、再びまた家庭なる樂し
き團欒に入り難きなり。石底の眠長はに覺めざる夢を思はゝ、醒め
居る世に、樂しましき家庭の團欒は、必ず有らまほしき事なるべし。

(三)　家庭眷屬

文好める母あり、甚五郎ともアンゼロとも成らむと思ふ弟あり、針

の手忙はしき妹あり。飼猫にとらあり。犬にぶちあり。雞の群あり。老僕ありき。小童ありき。老嫗あんの浪を顔にたゝめる翁なり。梢に來啼く鶯なり、青雀なり、書眉鳥なり、繡眼兒なりはた鶺に花に來る蜂蝶あり、水に來る蜻蜓あり。階下の蟻あり、床下の蟇あり。皆伴侶とすべし皆家庭の眷屬とすべし。

人ありてかれに何の樂ありて片山里に棲むぞと問ふ。かれ唯笑みて家庭の樂しきを說く。「桃花流水杳然として去る、別に天地の人間にあり」といひけん李白の世を外なる樂にあらず、「一期の樂非るものをうたゝ寢の枕の上にさはめ、生涯の望みを折々の美景にのこす」

といひけん長明の如き孤獨の樂にも非ず。田園家庭の樂は、親しく心おき無き眷屬氏族が團欒し往來して、もて自然の山水風物を語り、花鳥月露に親むところに存するなり。

（三）鷄

家禽の飼養は、家庭の一樂。彼も山家に猗頓の昔をしのぶにはあらねど、鷄多く飼ひて、之を伴侶とも語らふに、自然の意思ともいふべきもの、其聲どもの行動に顯はれて、そが樂しさはいはん方なし。公冶長か鳥の語を解し、米國の某が鷄と語りたりといへる新聞のあるも理なりや。

東都の四谷あたり某の家禽場より筐に藏められたる數箇の鷄卵は、

小包郵便の便を借て、彼の家に持ち來られぬ。それをば彼の家に掌てより飼ひおかれし地鷄のカシハの雌に擁かせ、二十の日滿ちて、美しき雛鷄は世に出でたり。

彼等は殻裡既に廣き世界に通ふべき細やかなる聲を發ち、われからその世を隔てたる薄き卵殻を劈きて、温かき母鷄の腹毛の下に藏れ、少時の休息の間に濡れたる細毛の乾くと共に、兩脚蹌踉さつゝ、初めて母鷄の腹羽裡より、珍らしげに訝かしげに、廣き世界を眺め、直ちに先づ試むるは、剝啄なり、初めの程は同胞のおかしげなる趾をば、食ふべきものゝ思ひてか、短き嘴をもて嚙みつゝ引くに、他は驚き惶て急ぎまた母鷄の腹下に潜む。或はおのれの出せる汚物を

も、なほ餌ならんとて啄み、そが口にすべからざるを知りて、嘴を左右に振りつゝ、柔かき藁の褥に拭ふなり。

絨毯の如く柔かなる滿身の羽毛に、脚高に裳褰げたらんやうなる態して、母鷄の懐に隱れつ見えつする事三十日經し頃、母鷄はやがて彼等を空しく塒に遺して去りぬ。かれ等は今家とも褥ともはた枕とも頼みたる便の床を失ひぬ。一日二日は寂しさに堪ねかねけん、同胞諸共に高く哀れなる叫聲をあげて、懐しき母を呼ばへど、母鷄は竟に聲だに聽かせざりき。

かくてかれ等は、主人の弟の工夫に依りて、横二尺縦四尺許なる小さき塒の屋根に、明窓のつきたる小屋に入れられつ、哀れに叫ぶ時

主が持て來る粟、生麥或は小さき蟲なんどに親なつかしき事も忘れの、腹滿つる程に、靜に互に重なりわひて、穩かなる夢を結ぶ。醒めてまた親なつかしく叫べば、主來りて餌を給ふ。かくして日暮る〻際、前の夜まで暖かき羽毛の夜具に包まれしを今夜は如何にして過すべきと思ふさまに彷徨く。小屋の奥の小暗き方に、いと暖かき白き綿羊の毛裘垂れたり。彼等の一個は覺束なくも、恐る〳〵潛りゆきて見るに、いとよき寢處なるを喜びて、そがまゝ出でゝも來らず、他のもの訝りてまた同じく窺ひよりつゝ、はては次第に集りて、竟に罪なき夢をば重ねたり。毛裘は綿羊の毛皮を綴りわはせて低く吊天井となせるなり。板敷には柔かく細かなる灰と沙とを厚く敷き

つめたるなり。

初三の月淡として黃昏の光を投げ、暮夜の烟やう〳〵籠むる處、その小さき棲居を明窓より窺へば、夢より淡き月の光、板際より忍びやかに、圓き團欒を照すに浴して細々たる微音をなすを聽き得べし。靈空杳緲たる際より、靜に下界に降るの天使が、寂寞の裡に偶語するが如き幽妙なる韻あるを感ずべし。

おはれ光を衣の如くにまとひ、天を幕の如くに張り、水の流にその殿の棟梁をおき、山の裡にその宮の柱石を据ゑ雲を車となし風の翼にのり、泉を谷に湧かして野の獸の渴を療し、果を林に實らして空の鳥の飢にあつる眞宰の造化は、またなほ此小さきものゝ上にも、

その恩寵を降しけるよ。

誠に彼等の細々たる私語は、夢結ばんとするに臨みて、永朝永夕限なき宇宙の榮光を讃稱へんとする乎。喧しき晝の人間に在ては竟に聽くべからざる、蒼天の崇高なる稜威の消息を語らんとする乎。

一日また一日、宇宙眞宰の化育は、漸くかれ等を發達せしめ、やがて母鷄も要なくなりて、その小さき棲居より出づるの自由を與へられ、竹格子環らしたる廣やかなる範圍に遊び、梢の陰、敷石の邊、悠々嘻々として逍遙するに至り、漸く大きくなりて雄鷄は花の冠美しく鞍羽麗しく飾られ、雌もまた自ら身躰つくりて、一箇の鷄社會

の大人となれり。

灰色せる羽に斑紋の細かに點じたるもの。冠の單瓣の花の如く躰羽白くして頸毛鞍羽の金銀絲拖きたる如きもの。黃羽滿身、黑の斑點鮮やかに肥えふくだみ、腹のあたり圓やかに脂つき、脚短かく步むに重げなるもの。鶴の如く白く、頭より頸かけて、黑線一條拖きたるもの。薔薇冠なるもの。茶褐色なるもの。其聲笛の如きもの、簫の如きもの等、各其祖先の遺傳をば、躰度行動に表はしたる畸昔まで徑寸に足らざる卵中のものなることを思へば、また奇しきものなりけける。

かれ等は自由を喜ぶ。竹園の裡やがて羈束を感じて廣らかなる天地

に逍遙す。かれ等は自衛を知る、颯と空ゆく鷹鳶の影を仰いで、一齊に警戒の聲を揚ぐ。朝に夕に餌與ふ主に親めるほどに、かれ等は眞にその動物的野性を離れて、宛然有情なる人の如く化せるに似たり。定められたる餌の小桶を擧げて、口笛を吹くとき、梢の陰、籬の下に群りたるが、遽に色めき動搖めき飛び、舞ひ躍り、鳴きて、彩帽したる競走者の、號鈴に馳する如く、歩卒の喇叭を聞きて急進する如く、細き脚に地を踏む音、自からなる調をなし、風擁し來りて、一齊に花冠を昂げ、彩紵を振ひつゝ仰ぎ見る。

好餌はかれ等の腹を充せり。三々五々相伴ひて、東隅西隅羽蟲と捕り細嘴を磨ぐ。臥せるあり、佇むあり、横はるあり、悠々たる自暑

の狀、如何に彼等は自然の賦したる其境界に滿足せるよ。

うらゝのどけき春の日、桃、櫻、杏、李の樹下、さゝら小川の流靜に落花をのせて往く處、霞に浴して雍々たるかれ等の長閑なる逍遙に伴はんか。緑色凝る夏木立の梢の陰に去來して、柑花に唸る氣うとき虻の聲聽くが如く、頸かたげ、或は蝸蜒を追て行方失ひたるに茫然佇立みたる彼等の閑境界に隨はんか。露に起臥す萩の叢に蟋蟀をもとめ、霜にあつでへたる圃に蚯蚓をあさり、さては滿目皎々たる雪の朝、聲朗らかに高く鳴くなる、かれ等の行止を學ばんか。

草廬の主たる「彼」は雛を伴侶とし朋友とせり。自然の悠遠なる消息は、彼等を通じて聽くを得べし。家庭の快樂ある趣味も彼等に依り

て喫するを得べし。

「彼」今靜夜都門の紅塵深き巷の一屋に臥して、遙に彼等親しき雞群を憶ふ時、昂然として冠を戴きたる姿容、謖然として餌に思を傾けたる態度を觀、家庭の和樂を讃すべき凱歌高く呼ばふ聲を聽く。かれ等今はその兒孫を有し、親族を有し、老翁老婆と有し、叔姪を有し、さながら一家庭を形成しもて長へに「かれ」の草廬の家庭の伴侶となりつゝあらん。

(四) 蟻

田園の閑生活には蟻もまた伴侶として興味あり風情あり。この小さき昆蟲にさへ眞宰の偉大なる造化の、微妙に賦與らしたるを視るべし。

春風緩く吹いて桃櫻の爛熳爛ゆるが如く、人の心も浮くばかり貽蕩の頃より、かれ蟻ども、赤冬籠の關門を啓き、廣き此世に現はれ來る。庭石の際、軒の陰、緣の下さては樹株の根などに、細かに淘げたる砂を圓く盛りたる、皆かれ等の巢穴なり。

彼等同族數多あり、最も大にして黑きあり、行爲忙はしく人を恐れ興に乘らず、餌もまた共同に依りて運ばず。次に大にして紫黑色なるあり、性憶病にしてさも輕躁に敏捷なれど容態趣致無し。赤蟻は躰小に色美しく剛柔相兼ね、一致協力能く働き能く勉め、應に蟻群の代表たるべきものなるべし。春

日暄和軒端に陽炎の燃ゆる時、かれ等は各其巣を出でゝ東に尋ね西に捜りそが食餌を求むるに忙はし。

甘味に附くと人の上に譬喩ある如く、甘味はかれ等の最上好物なり。菓子なんどの細屑の折にふれて見出されたらん時は、宛然戦場の勇士が敵の首をとりたらん様に各自分捕つて、喘ぎ〳〵往くも興あり。

蕭々なる春雨の輕雷の一聲に名殘無く晴れたる日、桃櫻の麗はしきを眺めつゝ庭を逍遥ふに、雨後の溜水端なくも蟻群の城郭近く漲れる溢れたり。片々たる落花の水に浮きたるに數箇の蟻どもとりつきたり。此はかれ等にとりては烟水渺々たるべき大洪水にて、そが落花の一片はノアの船とやすべき、花の筏にとりつきかねて身を水に

まかせ漂ふもあり、さながらぬき手を切つて泳ぐもあり、はや落花の舟を岸に下りたちて前途を望みて踟躕ふもあり、岸に上るまゝに急き城郭指してゆくもあり、漂ひつきたるものに何事か偶語ふもあり。千態萬狀少許の春雨の蟻群に如何なる驚愕を與へたるか、はたかれ等が如何に人の如く行動ふかを觀るべし。

春より夏かけて「彼」の庭は、樹梢枝葉の別なく蜘蛛の巣縦横にかけわたされ、剰さへ開閉稀なる柴門の眞中に太く粘着たる網を張り、逞しき大入道のやうなる蜘蛛、門柱の朽ちし小陰に潜み、獲物來りかゝるとき躍り出てゝそを捕ふ。全身茶褐色にして蒼黑く、むくつけき毛髪生ひ、圓らかなる眼をすゑ肢を張りたるは、さながら或魔

物の化身かと覺えて、老滑佞猛なる或ものを想ひ出されて容し難かりしかば、やがて蜘蛛どのは中天の棲居より大地の庭上に壓し据えられ、石もてしかと壓されぬ。こは蟻群に與へんとてなり。かくて一個の赤蟻は、探索巡撿の途次此大なる怪物を見出し、先づ吻もて仔細に按撿しさてその周圍を一周し、一度去てまた返り、按撿を繰返したる後、巣の方指して行く。路は頗る遙なり、彼方此方に迂回し屈曲し漸く巣の口に辿りつきつ、折しもその朋輩に逢ふ、吻もて互に揖する如く偶語ふ。相分れてかれは穴に入り朋輩は先づ道をもとむ。程もあらせず前者なるべきが先導となりて、夥多しき蟻軍は出で來れり、整々として行伍亂れず、絡繹として隊列を成す、

十數の間毎に必ず一箇の頭目あり、躰大にして威容あり、行動の順序あるは名將の軍令に從ふ兵士の如く、赤き肉甲の堅固をよろふたるは甲冑着けたる勇卒に似たらんか。

路次誤らず、蜘蛛の全身は、やがて一簇の紅雲に蔽はれぬ。なほ生氣に充てる魔王は肢を張りて縱横に敵冠を跳ね飛ばすものから、かれ等はおめず臆せず、隨て拂へば隨つて取りつき、且投げられ且縋り、竟に魔王の精根瘁きて生氣無きに至れば、幺微なるかれ等の集合力は殆ど蠶豆よりも大なる魔王を搖し運び去る、天王の御輿を群童の捧ぐる如く、大江山の鬼の首を獵夫の擔ふに髣髴たり。人間の耳には聽くこと難き細小なる凱歌を揚ぐる態に、簇々として動き進

み、再び路を遠へで巢窟近く着きたりける。

魔王の躰大きくて穴に入れらるべくもあらねば、一群は分れて巢窟口を擴げ、一群は魔王の肉の咬み得るかぎりを採りて運ぶ。その巢口を擴ぐるの樣は一層驚ろかるべきものあり、かれ等各巢口の細沙を口に咬へて外に措き來る。かれ等の口は斧となり鉞となり、鍬となり鶴嘴となり、總ての器具に利用ゐられつゝさながら隧道を作る工夫の如く動くなり。

幾何の時を經て、魔王の軀は幾分小さくなり、穴の口は廣くせられて、やがて大なる獲物は呑まるゝ如くにかれ等の棲居に隱れ了んぬ。斯くしてまた忙はしくその獲物を捜索すること依然たるかれ等を視

る。

かれ等は時に他の群と相闘ふことあり、そは獲物を同時に發見し、期せずして大群の衝突せる折なり。かゝる際にもまた、蒼黑きもの も黑く輕躁なるものはた紫黑色のものも赤蟻の一致協力よく耐へよく防ぐに及ばず、大抵勝を制せらる、元より赤群の強きにはあらず單吻相接すれば赤蟻の犧牲多けれど、そのよく力を協せて長く拒ぎ精力の絶えざるに因りて、最後に獲物はかれ等に歸するなりけり。」

かれ等はまた天候を豫視す。軒下などの潛匿に便あるものはしかあらねど、石甃の隙など狹きところにあるものは、霖雨の前陸續として屋ある方に移る、連日の雨稍晴れむとしてなほ人のトひ得ざるに、

日暄和軒端に陽炎の燃ゆる時、かれ等は各其巣を出でゝ東に尋ね西に捜りそが食餌を求むるに忙はし。

甘味に附くと人の上に譬喩ある如く、甘味はかれ等の最上好物なり。菓子なんどの細屑の折にふれて見出されたらん時は、宛然戦場の勇士が敵の首をとりたらん様に各自分捕つて、喘ぎ〳〵往くも興あり。

蕭々なる春雨の軽雷の一聲に名殘無く晴れたる日、桃櫻の麗はしきを眺めつゝ庭を逍遥ふに、雨後の渥水端なくも蟻群の城郭近く漲り溢れたり。片々たる落花の水に浮きたるに數箇の蟻どもとりつきたり。此はかれ等にとりては、烟水渺々たるべき大洪水にて、そが落花の一片はノアの船とやすべき、花の筏にとりつきかねて身を水に

まかせ漂ふもあり、さながらぬき手を切つて泳ぐもあり、はや落花の舟を岸に下りたちて前途を望みて躊躇ふもあり、岸に上るまゝに急き城郭指してゆくもあり、漂ひつきたるものに何事か偶語ふもあり。千態萬狀少許の春雨の蟻群に如何なる驚慌を與へたるか、はたかれ等が如何に人の如く行動ふかを觀るべし。

春より夏かけて「彼」の庭は、樹梢枝葉の別なく蜘蛛の巣縦横にかけわたされ、剰さへ開閉稀なる柴門の眞中に太く粘着たる網を張り、逞しき大入道のやうなる蜘蛛、門柱の朽ちし小陰に潜み、獲物來りかゝるとき躍り出てゝそを捕ふ。全身茶褐色にして蒼黒く、むくつけき毛髪生ひ、圓らかなる眼をすゑ肢を張りたるは、さながら或魔

物の化身かと覺えて、老滑侯猛なる或ものを想ひ出されて容し難かりしかば、やがて蜘蛛どのは中天の棲居より大地の庭上に壓し据ゑられ、石もてしかと壓されぬ。こは蟻群に與へんとてなり。

かくて一個の赤蟻は、探索巡撿の途次此大なる怪物を見出し、先づ吻もて仔細に按撿しさてその周圍を一周し、一度去てまた返り、按撿を繰返したる後、巢の方指して行く。路は頗る遙なり、彼方此方に迂回し屈曲し漸く巢の口に辿りつきつ、折しもその朋輩に逢ふ、吻もて互に揖する如く偶語ふ。相分れてかれは穴に入り朋輩は先づ道をもとむ。程もあらせず前者なるべきが先導となりて、夥多しき蟻軍は出で來れり、整々として行伍亂れず、絡繹として隊列を成す、

十數の間毎に必ず一箇の頭目あり、躰大にして威容あり、行動の順序あるは名將の軍令に從ふ兵士の如く、赤き肉甲の堅固をよろふたるは甲冑着けたる勇卒に似たらんか。

路次誤らず、蜘蛛の全身は、やがて一簇の紅雲に蔽はれぬ。なほ生氣に充てる魔王は肢を張りて縦横に敵冠を跳ね飛ばすものから、かれ等はおめず臆せず、隨て拂へば隨つて取りつき、且投げられ且絶り、竟に魔王の精根疲きて生氣無きに至れば、幾微なるかれ等の集合力は殆ど蠶豆よりも大なる魔王を搖し運び去る、天王の御輿を群童の捧ぐる如く、大江山の鬼の首を獵夫の擔ふに髣髴たり。人間の耳には聽くこと難き細小なる凱歌を揚ぐる態に、簇々として動き進

み、再び路を遠へで巣窟近く着きたりける。

魔王の躰大きくて穴に入れらるべくもわらねば、一群は分れて巣窟口を擴げ、一群は魔王の肉の咬み得るかぎりを採りて運ぶ。その巣口を擴ぐるの様は一層驚ろかるべきものあり、かれ等各巣口の細沙を口に咬へて外に措き來る。かれ等の口は斧となり鉞となり、鍬となり鶴嘴となり、總ての器具に利用ねられつゝさながら隧道を作る工夫の如く動くなり。

幾何の時を經て、魔王の軀は幾分小さくなり、穴の口は廣くせられて、やがて大なる獲物は呑まるゝ如くにかれ等の棲居に隱れ了んぬ。斯くしてまた忙はしくその獲物を捜索すること依然たるかれ等を視

る。

かれ等は時に他の群と相闘ふことあり、そは獲物を同時に發見し、期せずして大群の衝突せる折なり。かゝる際にもまた、蒼黒きもの も黒く輕躁なるものはた紫黒色のものも赤蟻の一致協力よく耐へよく防ぐに及ばず、大抵勝を制せらる、元より赤群の強きにはあらず單吻相接すれば赤蟻の犧牲多けれど、そのよく力を協せて長く拒ぎ精力の絶ゆるに因りて、最後に獲物はかれ等に歸するなりけり。」

かれ等はまた天候を豫視す。軒下などの潜匿に便あるものはしかあらねど、石甃の隙など狹きところにあるものは、霖雨の前陸續として屋ある方に移る、連日の雨稍晴れむとしてなほ人の卜ひ得ざるに、

かれ等はまた陸續として舊巢に返る。此移轉の折は各個吻に微砂な
る白き粒を齎らす、實にこれはかれ等蟻群の子孫たり繼續たるべき
卵なり。
あはれ此小さき蟲群も眞宰の生物なりけり。邪氣なき童兒の慰樂と
なるのみならで、鬚髯むくつけくなりたる大人にも、怎に興味ある
かを視む。

(五)　童僕

家室庭園の灑掃、雞群の飼養、さては日常の用務の小价として十三
なる童兒を家庭の中に加へ一時あり。
童が家は先代より鍛冶×稱呼さるゝ程なりしを、

その父に至つて家業を嫌ひ若きより道樂三昧、中年と成りて爲すべ
き職業の素養無きに、やがて車夫となりぬ。此社會の慣として飲食
に贅を爲し、貯蓄の念無く、今日の存在のまゝに世を渡りゆくが常
なるに、加へて兩親ともに、所謂牛馬の子煩惱、氣隨氣まゝに童を
育て、近き僧家に通はせて假名文字を蚯蚓形にも記すやうなりしが、
それも長くは爲せ得ず。可愛い子には羈旅をさせといふ俚諺もて、
店奉公を勸むる隣家の爺の言をも用ゐかね、兎角家より離し難さま
でに、童の愛には眼無きものから、父なるもの或時同業の集會の席
に、何事かに依りて文盲の恥を知り、俄に童に文字覺えさせたく、
さりとて學校に通はすことも成り難しとて、さては「彼」が家人を

なして、晝は其務を爲し、夜は文字を知り智識を得べき望なりけり。」

冬なほ寒き頃なりき、唐棧の赭縞なるを、羽織ともに筒袖に新裁し

たるを着、絹絨の緒すげたる雪駄新しく、唐縮緬の兵兒帶を廣く胸

高にしめ、四折の鼻紙その懷に藏め、帶に挿みし手拭の疊まれたる

が羽織の陰に半ば見ゆる服裝して、周旋する翁と共に伴れだちて來

りぬ。

顏圓く眼細く瞥の少し後拖きたる、鼻は高からざれど唇の薄くて一

文字に結び勝なる、眉の細く鮮かに、眉間の際だちて秀でたる、童

の顏貌は敏かるべき風采なりき。

此日より童の境界は變りたるなり。朝夕不斷に近隣の童輩とわくた

れ遊び歩きたるが、今は主人といふ牽制者を載き、親ならば嫌厭な

りとて濟むべき用事も、今は辭拒み難き境界となりぬ。されど元來

閑居の家庭には童の厭ふべきやうなる務あること無く、主たる「彼」

はもとよりまた一箇の小友を得たらんやうに遇ひければ、昨日まで

見ざりしを見、聞かざりし事を聞き靜に平和なる家庭に入りたる童

はやがてその好奇心を充たして、奴僕といふ不自由は忘らるべき程

に見なけり。

近所評判の惡太郎なり、他家に務めむこと一日も難かしからむと、

出入る人毎に告るものありしが、さる擧止無く、却て怯懦にして小

心に、しかも丁寧なり。但範圍の定まりし事に對しては、勇ましく

活潑に粗豪に、悪太郎の本領を顯はすなり。所詮性來感情に富み神經の過敏なるが養成法に依りて一種の性行を形成れるなりき。

童の知識見聞は甚だ狹く低く、聞く毎に眉を顰し色を動かして驚き、さては奇問をもて人を笑はす、此故よりしてか、擧止に滑稽多く矛盾あり。

一日の勞働なる拭掃除使役の務を終へて、小さき文庫机を取り出し、禿筆を握りて角多くなりたる墨にて○○○○石の硯を磨り、殊勝氣に字を書し帳を繙く時、

「如何だ、おれの家へ來て、怎麼な心もちがするか、自家の母親の傍がやつぱり好いだらうな」、と言へば、童は「ねへ〳〵」と羞かしげに笑みて、「此方が餘ツ程好うムいます、種々な珍らしいものが有つたり、旦那さんの話が面白かつたりしますから、」

「左樣かな、汝は大人に成て何にならうと思ふか」

童はその眉を顰め唇を動かし、怪訝顏なり。

「汝がな、大人に成つてから、商人に爲つて財を儲けたいか、それとも父親見たいに車夫になりたいか、それとも鍛冶屋の職人になるのか、百姓になつて鍬や鎌なんか擔ぎたいのか如何だ、」

童は直に口を開き「ねゝ、鍬や鎌なんて、嫌です、百姓は嫌です、商人が一番好うムいます、」

「左樣か、それでは商人は大儲を爲たいか、それともチビ〳〵損を

爲ないやうに少しづゝ貯めてきたいか、孰ちが好いか、」

「儲かつたつて損を爲ちまつてはつまりませんから、少しづゝ貯まるやうにして、親爺を護てやる方が好う厶います、」

最後の話は「彼」の心を動かしぬ。童の親を思ふことは淺からざりしなり。

かゝる日夜の物語に童の性質は漸く著るく、惡太郎の擧動は依然としてありながら、なほ童心の無邪氣滑稽など如何ばかり家庭の一樂となりけむ。

春は櫻に桃に花麗しく、蝶舞ひ鶯歌ひて、心も空に浮く田園の宵。花の香に醉ふ如き半輪の月、軒の梨花を照し、輕風緩く吹き渡り

て和氣胸々に蕩かす。童もまた春の美しきに化せられけん、怡色面に溢れて「好い心もちの夜ですねえ、旦那さん、月が出ました、今夜の月は西瓜みたやうです、」

童の眼は蒲鉾形に切りたる西瓜の形と色とに親めるより、その胸中の美を稱ゆる言葉は其の外に出でざるなり。やがて種々の物語に家庭の喧嘩を增しけるが、壁にたてかけたる竹刀に眼をとめて、「旦那さん、……劍術をやつてくださいまし、敎へてくださいまし、」と頻に促し請ふに、端なく興催されつゝ、やがて半輪の月下、雪の如き梨花の陰、頭重げに鐵面被りたる丈高きと低きとの兩箇の影は地に描かれたり。

童は懸聲おかしげに竹刀を亂暴に振りまはしつ、面となく胴と無く腰となく、「彼」を亂打するものから、小さき腕はやがて疲れゆき、はゝあと溜息つきつゝ、急ぎ錵面を脱ぎ、さも苦しげなる面地に、「あゝ恐わかつた、小童や旦那さんに殺されるかと思ひました、」其顔〳〵其語の調子とは覺えず人を笑はしめたり。「今一度やれ、奮發しないか、」と戯れ促せば、「もうだめです」とやがて道具を納め終れり。かゝる折は童の無邪氣なる滑稽なる殆ど惡太郎とは別樣の觀あり。

童は人に笑はるゝ時に常に愧ぢたる容をなしぬ。如何なる故ぞと問へば「何んだか羞かしいやうです」といふ、男兒か羞かしいなどい

ふものならずと教うれば、「左樣ですかねえ」と怪色顏なり。

童は心よく熟睡せる時も、戸の響なんどせば身を動かし夜着引き被りて頭をうづむ。攪眼時計の音鏗々たる時、また同じ。「攪眼時計は眠を覺す爲に鳴らすのだから、汝のやうに夜着に潜りこんでしまつては何んにもならぬでないか、」と言へば、「左樣ですかねえ、でも恐わうムいますもの、」と答ふ。

童は金錢の貯蓄には考あれど、衣食調度には更に儉約心なし、こは奢りに馴れたる故にやありけん。雪駄も新しきを穿きたるまゝ泥にまみれ汚かるゝに任せてやがて捨て置き、衣服も古くなりたるはさも厭はしき面地にて着く、食ふものに嫌ひの多く、美味あれば惡食

し美味なければ殆ど食はざる時もありけり。

童は心向ふときは大人の爲すべき事務をすら勇み勵みて丁寧に周到に能く働らけど、氣すゝまざる折は、やがて虛僞を衒ひ表裏を行ひ、殆ど終日怠慢に了ることあり。

童はその文庫机に向て筆はとれど、竟に自ら學ばんとせる心を發することも無く、唯赤筆にはかなき形狀さては文字を描き知識を求むる態なかりき、書きたるを示せと言へば、例の眉を顰め打笑みて、その手を袖に隱すなり。

惡太郎の性免しずして、しかも羞かしき癖を有するさながら女兒の如き樣あり。まことその擧止に晴雨の多きは此童の本眞なりける乎。

童は「彼」に伴ひて畑に行き、夥々たる野風に吹かれ、俚歌を唄ひながら蠶豆を摘みたることありき。「彼」と共に花を植ゑ樹を移し、さては細々たる小川に、魚を捕へし事もありき。繡眠兒の美しきを飼ひて、優さしき囀哢を聞きつゝ、その鶯を招き、さては伯勞を捕へしことをもありき。巴丹杏樹に攀ぢて累々たる果を笊に滿たし、さながら昔物語の柿樹上の猿の如く戲むれ遊びたる事もありき。栗、梨、柿、さては棗實を味ひて、「彼」と共に曾てアダム、イブが果實を啖ひたる時の如く天然の糧に飽きたることもありき。午勞は大根の如く容易に拔き得べからず掘りとるものなるを「彼」に敎へしことありき。

花香人を打つ時も、月影心を澄ます折も、涼風に榻に臥する夕、はた雪景に爐を擁する日にも、童は家庭の一件侶として和樂を添へ興を給したり。

されど、童が家庭の和樂を添へたるを喜ぶと共に、その性行の、雙親養成の影響を、深くも腦裏に刻みたるが、容易に變じ矯め難きを視て、世の家庭を形成る上に於て、用意の疎漏ならぬことを、更に一層深く學びける。

童は今歸りて其家に在り、柔かき腦裡に浮べる小商人とならむといふそが考は、如何になりゆくべからむ。あはれなる童よ。

(六)　繡眼兒

曩昔上野の動物館に遊びける時、小禽多く集りたる室の前に至りて良久我を忘れて佇立みたることありき。鶯に似たれど面影の何となへ深山幽谷の樣を帶びたる十姉妹、斑紋の綾ある金翅鳥、軀圓らかに宛然よそ〳〵しげに擧動へる相思鳥、深窓の紅閨に起臥する姫にも比すべき黃金雀、さては掴老婆の心得容なる、紅雀の篤實しき、文鳥の從容たる、じやかたら雀のその名應しき態容なる、かれ等小さきもの皆そが自由なる野、林、森、谷、山等天然の逍遥境より、この牢獄の如き蓬窓の裡に閉ぢ籠められながら、なほ少しも究屈不平を知らざるが如く、各自嬉々歡ばしげに快活く、囀り歌ひ舞ひ躍

り跳ぶ狀態の、眞に自然なるを觀ては、深くかれ等をしかあらしめたる眞宰の造化恩澤の洪にして且微妙なるを感ずると共に、やがてわが憶想の眼には、かれ等と同類なる一箇の愛らしき小禽の面影を映し、わが心の耳には、そのおかしき囀哢の調ある聲を聽きたり。」

青山の眉黛にほやかに笑みたる、白雲の袖ふりかざしてふるまひたる、小川の淸くさゝやきたる、すべて忘れ難き田園の風物と、宛然世を外にせる閑生活の忘れ難き棲居との記憶の、わが胸懷に忘れざる間は、永く此愛すべき小さき禽の記念をもわれは忘れざるべし。

況してや今、都門の塵しげく烟とたちたる大路に立列なる瓦甍の檐端にも、狹く暗き小路の格子戸の柱などにも、この愛すべき小禽の

同胞は、細小なる籠の棲居を自由なる天地にかへて、その同じき囀聲と擧動ふ態とを目前われに視すをや。

所謂愛らしき小禽とは、わが童僕が何處よりか籠に捕へ來て、わが閑居の軒端に懸けし繡眼兒にこそ。

綠の羽を衣と纏ひ、黃なる纖き毛を濃かに胸に蔽ひ、小さく圓き頭顱に嘴細く、眼醒むるばかり白き瞼の緣を輪形に拖き描きて、限なく愛らしき容を具へたる眼色は、いと敏げにも見え、擧動の輕く快活なるはかれの衆禽に殊さらだちし點なるべくや。

かれ昨日までは天の給へたる餌を山の陰に啄み、天の流せる泉を溪の隈に嚥み、森の閨房靜に小枝の枕、木葉の蓐安けき夢を結びたら

むに、今日は竹格子の狹き籠に鎖されつ、自由なる大空、高き梢は見ながら翔けるに難く、飛ぶに便なし。身悶ゑ羽はたきして天然故郷の逍遥遊に焦思るゝほどに、飢にはやがて食を欲ひ、渇もそれに伴ひ來る。四邊人無き軒端の棲居、少時身を塒に憩はせば、水は小さき纏に堪へ、餌は器に盛られあり。かれは總べてを忘れ措きて嚥み且食む。人影近くときまたも躍り狂ひてその幽閉の棲居を出でんと悶ゆ。かく同じ擧動をば重ねゆきて、終にその浩き自由の天然境に返ること難く、幽閉の生活はやがて幾日を經たり。

さるほどに人はさらにおのれを害せず妨けざるのみならず、朝な朝な來りてその格子戸より餌と水とを給へゆくなり。天が給したるも

のを今は人の手より與へらるゝなり。取次に人は恐ろしからずなりぬ。羽ばたき悶ゑて苦まむよりは、そがまゝに靜に從容きて餌と水とに飽かむことの安逸をば、小さき胸に知りきや、わらずや。

われ小さきこの禽よ。自然の榮光とその樂しき消息とを讃へ歌はむ爲に、天が賦へしその天性は、この靜に從容さたる時に發せではかなはずなりぬ。折から空は清く碧に、花の香浮び樹々の葉綠を吐きて、蝶は迷ひ蜂は遊び、背戸の梅の樹に青雀呼べり、林の奥に鶯啼けり、栗の梢に金翅鳥は囀せり、軒端近く噪げる雀さへをかしげなる亂調にてさすがに歌ひ出したり。長閑けき景色に人の心も浮くばかり、宇宙に滿ちし融和の氣は、油の如く小さき胸に溢れ、百鳥

の歡聲にさながら「歌へ〳〵」と催されつゝ、われにもあらず歌ふ一聲。歌ひておのれと心つきてうち傾ぎたる顏容、世に比ふべきもの無き愛らしさは筆も言葉も及ばざる風情なりき。

一旦歌ひてははや歌ふより他の事を忘るらむ。程なくかれは人に馴れたり。餌と水とを持ちゆくとき、そのをかしき容貌もて愛らしき眼を張りつゝ、まちかねたるが如き態あり、童僕がかりそめに捕へ來しときわはれなる小禽を天然の自由より奪ひたることをなさずもあれと思ひしわれは、かれが狹き籠に滿足して安定さたるを觀て今はたかれを留め置きて飼ひ愛でむ心の童よりは深くなりぬ。

鶯の如き調のよく協和ひたる節奏こそなけれ、かれの歌囀は種々の

音調ありて婉轉哮々く、雲雀の如くにも青雀の如くにも囀づるなり。かれの際だちて愛らしきは實に人に馴れてその風情の如何にも親しく邪氣無きところにあり。多くの小禽の馴れてもおのづから大人びて人を慮ふ態あるに比して、かれはさながら小兒の如く愛くるしきなり。昔者鶯に金衣公子の名を給ひし唐の帝もありき。繡眼兒とは誰が名けゝむ、われはやがてこの愛らしきものに「綠衣歌童」の名を命じぬ。

この歌童は日を追て其聲高く其調も律侶自ら具はり、戸外の百鳥の聲に和して競ひ劣らず歌ふやうなりぬ。かれは音響の耳に入る毎に催さゝるゝ如くに歌ふ、戸外に車の轆りゆく音、馬子の俚歌唄ふ聲、

水車の響などはかれの歡びて相和する唱歌の伴侶なり、さればわれ書を讀む時、園林逍遙に吟嘯する時さては客と語談の興に入りて笑ひわふ時など、必ず聲一層よく張りあげて鶯燕の語を學び雲雀青雀の聲に似通ひたる嬌音淸音幽音宛轉として餘念無く歌囀る。その氣あひを觀るに、眞に無心無意に一身を天地の融和せる氣中に投じて、滿足〻平和とをもて唯管に天然の榮光を讃美するに似たり、之に對するわれもまた無心に無意に天地の和氣に化せられて恍然として凝視つゝ、虛空に魂を浮ぶるなり。

わが愛はいよゝ深くなりぬ。天地浩く自由なる樹林に放ちやりて、人爲の境界より天然の化育に任せんは、かれ歌童にとりて如何に歡

ぶべきことならむ、その巧なる美しき歌聲は更によくとゝのひたる律侶にてをもしろく唱へらるらむ、と思ふにも似ず、わが手より離ることの惜くて、さながらわが子の如く愛るに至りぬ。天然の子を人爲の手に奪ひたるはわが過誤なりしや、あらずや。

歌童は淸き水と、雜魚と菜と糠との摺餌とに日々の糧を給せらる。折々小蜘蛛、蠅などをとりて格子の邊に差し出せば、一瞥躍りて喜び喙む。かれは砂糖を好む、菓子を食ふ、甘藷の煨芋はその最も好むところ、山間の牧童などの手に飼はるゝものはこの煨芋こそかれの常食なりけれ。終日糧に飽き、歌につかれ、黃昏の景色淡暗うなる頃、籠に幕かけてわが室の隅に移せば、かれは悲ふべき時の來る

を知りて、小さき頭顱を小さき羽翼に埋めさらぬだに圓らかなる躰軀をさながら毬の如くなして、靜に眠る。われ讀書の夜課既に了りてやがて寢ねむずる時、歌童は如何に眠り居るらむと思ひつゝ、忽びやかに幕帳をあげて窺へば、圓球は忽然として頭を擧げ燈光に著るく見ゆるその瞼を瞠りて訝るやうに見上げたる愛らしさ、「如何にわはれにも愛たき歌童よ。汝が眠は安きか」など無意なる獨語するに、かれは怪しく驚くべきことも無きを見てまた頭を羽がひに埋め毬となりて眠に入る。幕をかけおきて臥床に横はりしわれは、夢に歌童と無何有の鄕に遊びたりき。

花散り鶯去りて世は夏景色、青葉の陰茂く、百鳥の聲は里にあとを

絶ちて、蚯蚓、蛙の聲夕にかしましく聞ゆる頃となるに、わが軒端には「歌童」の囀聲日毎に絶ゆる事なし。

或朝餌と給へむとて籠に差入れたるわが指に、かれは懼氣もなく留まり、嘴もてわが爪の尖を頻に突く愛らしさに、掌を擴げて捉へやらんすれば、はじめて驚き退りぬ。しかく馴れ來て後には、籠の戸空しことありても出でさらむともせずなりぬ。試に鏡をもて籠に當つれば、一樣に愛らしき一箇の小禽見ゆれば、かれは友の來るを見て忙はしく近寄るまゝに、嘴と嘴とはしかと相着きぬ。訝しき顏つきせしがやがて聞ゐねはその囀聲さながら私語くやうに漏らしつゝ、顏をあげ身をひねり横さまに鏡のおのれにすりよりぬ。あはれ「歌

童」は鏡中のおのれに對し所謂繡眼兒の押競を試みたりしなり。如何に押競するも効なきにやがて嘴もて突き挑みぬ。されど戰もまた効なく終に離れて餌を喙みけり。かくまで馴れたるかれは、また人の指などに恐るゝことなければ指もてかれの頸を撫づるに、いと心地快き態して瞼を閉ぢ頭を垂れて眠るが如くす、胸を撫づれば仰ぎて頸を延し倒れむとして初めて躍る。後には是を「繡眼兒の睡眠術」と名けて折々かれを弄う毎に快く娯しき容態をもて、人の手に委すなり。かゝるわび無き慰樂の裡に限無き天然の愛なるものをわが知るにつけても、その天然の子を永く人爲の手に留めむは心ならず、或朝籠を森に持ちゆきて愛らしき「歌童」をその天然の故郷に歸らし

めんとせるに、かれは飄然として飛び去りしが、久からずしてまた籠に歸り來りぬ。かれは既に天然の境界より人爲の籠居に化せられて、再び自由に浩大なる天地に翺翔するの力を失ひしにやらむ。されどわれは永くかれを愛せむと思へば、永くかれを自由浩濶なる天然の手に委すのよきを思ひ、家に歸りて籠を開き、かれが出で入るにまかせ置きぬ。毎日かくして後或朝かれは出でゝ復びかへらずなりぬ。一日二日は背戸の林にその聲聞ゆたり、われはなつかしさに籠に歸れかしなどまた思ひつゝ、聲をたどりて林を逍遙ひぬ日を、經て聲は聞ゆずなりぬ。水に浴するをかしき姿、メスメリズムのをかしき態度、その愛らしき面影は、竟に見ゆず永く天然の故郷に歸

りゆきたりけむ。われは今もなほこの「歌童」を唯小さき禽とのみは思ひ難きよ。

（七）　蟇

花の頃はおもひすてたるときば木の
　　蔭こそ夏はすゞしかりけれ

と隆正の歌ひしは、折ふしの天然に對するなべての人情をよく言ひとり得て、はた天然の人に於ける微妙なる恩惠の意を窺ふべし。

觀るに花の色香あり、聽くに鶯の音律あり、遊ぶに踏青の野興あり、蝶と戯れ蜂と狂ひて、心はその歡をきわめ、情はその樂を盡したる春の、何時か行迹も知らず別れ去る紛愁紅恨のはかなさに、世に賞

心樂事の料は此に盡きげんと思ふ程もなく、小袖に換はる單衣、夏はやがて天然の衣を更へて新らしき面影を現はし來る。

美しき花こそ無けれ、優しき鶯こそ鳴かね、蝶老い蜂長けて、野も山もまた春に逢ひたる時の如く、心ゆき神浮ぶ興こそ無けれ、樹々の葉の綠なる、その枝に果實の青やかに累々たる、青田一面に涼風を含んで蛙の唱歌、夕の月を祝ぎ、清流石に私語きて岸に生うる露の叢に、螢の光ありて夜の暗を飾る。田園到る處に賞心の樂事多く、天然が人に給する慰安の精神は、夏もまた春と異なること無し、春をもて夏にかへ難く、夏をもてはた春にがへ難し。「梅の香を櫻の花、柳の枝になどゝは思ふまじきことなり、花の紅、柳の綠、心をつけて

樂むべし」とぞ樂翁は言はれける。此心をもて春の天然に對し、夏の天然に對し、さては月にも雪にも折ふしの天然にわれ等の情を寄すべきのみ。

是にわれ等はまた物の天賦なる分限を知る。「生や薄命に非ずんば花を成さず」とは清の詩人袁隨園が落花を咏じたる辭句なるが、これまことによく眞宰が天然の風物に賦與せる分限の奥妙なる意を言ひ顯はせるもの明日火に投げ入れらるゝはかなき草にだに、美しき色香妙なる花を開くも、また此意義より發するものなるを知る。眞宰は天然にこの分限を與へたり、さればまた權力を與へたり、美しき花の權力なり。薄命なるは、花の分限ならずや。われは天然の春

夏秋冬花鳥風月草木禽獸蟲魚に對するとき、恒にこの權力と分限との表現を觀て、これを愛しこれを感得す。されば美しき花を觀てその權力を思ふと共に、また醜き昆蟲の上にも同じ意もて、分限の裡自から美しく感ずべき人を慰め人を喜ばしむる一の微妙なる權力あるを認む。田園の夏の夕暮、われわが後園に逍遥してかの蓁に對するときの心情はまたなほこの心情にてありけむ。

家宅の後園を劃りたる竹籬の傍、栗の大樹あり。幾年の幹風雨に古りて、苔蘚その根を埋め、蔦、若荷のところ狹きまで繁く雜草と生ひて、草叢は一隅の地を占めたり。小流その傍を屈曲して清くして淺し。

晩涼を浴後の衣にうけて、無心に樹蔭の綠嵐を帶び、その流泉の獻ぶが如き聲を聞きつゝ小立む。牧童は草刈籠に茱萸果、梅實を併せ收めて家路に歸り野翁は杖を携へて瓜畑の茅庵に夜警に赴く、鷄雛塒に憩うて既に母鷄の腹に眠らむとす。黄昏の景色漸く近く、日既に沒して天なは明かし。やがて蛙皷は青田にうちはぢめ、蚓笛は草間の壤に吹かれ、かれらはその自然吹奏の樂をもて夕を送りて夜を迎へんとするなり。此時墓は何處よりか出で來り、栗の根近き青石の蹯屈せる陰に坐せり。玄黄き滿身肥に膏つきて、皺瘡浪の如く背に刻まれ、疣瘤その間に起伏し、淡黄にして白點の斑らなる便々たる腹を、左右に張れる太く短き雙手に支撐へ、山高に突起せる瞼の

下に、紅縷に環どれる圓き眼を濶と瞠きて、栗の梢を仰ぎたり。かれは栗の梢に巢へる「テンス」と稱する野蠶の時ありて落下るを食はむとて待てるなり。寂然として大氣を噓吸し、便々たる腹の微かに浪を打て搖く態、さながら天を睥睨みたる風情、唯一箇の昆蟲とは思へぬまでに一種の威容を具ふ。近づきて靜に之を對ふにかれは泰然として動かざる一ッの岩の如し。試に傍の草叢を搜りて芋蟲の如きものを捕へ、それを竹なんど棒先に插みて、かれの口頭にさしいだせば、岩の如き頭はやがて搖き、眼を一層瞠き身を少しく俯して、獲物を凝視ると良久、その食ふべきを認むるや、俄然として大なる口を開くと見る間に、直下に竹頭の芋蟲はその便腹の中に嚥下

さる。その舌は鮮血よりも深紅に、その唇を結ぶ音は、さながら喝するが如し。瞑み了るや眼を閉ぢ頭を垂れて少時休し、やがて復び帶びて坐せり。かくすること數回に及べば、かれは人の手に依て餌に充てるを滿足するが如し。人の傍に在るとに曾て關せざるが如し。若し一旦その身に觸るゝとあれば、かれは初めて迷惑せる態にて惶懼の狀あり。今まで具へたる威容は一時に消えて、さながら興醒めし去る。天地はやがて夜の色濃く、蚯容に遲々として暗き方にかくれ去る。蚯蚓の笛、蛙の皷頻に喧嘩にして、かれの行迹は痕なく暗黑に鎖されたり。

次の日の夕べまた流の邊に蚯蚓の笛と蛙の皷とを聞きつゝ立てばかれまた栗樹の下に悠然として坐すると昨の如し。日また日、夕また夕、われとかれとは無言相對の友となりぬ。その後或は見ゆ或は見えず、後は見ゆると少く在らざると多くなりて、後終に見えずなりぬ。蕗の叢を搜せども、籬の根をもとむれども、かれの居は竟に知られずして隔年の別となりぬ。しかしてその次の年の夏の夕、われはまた去年相見たると同じきかれに、同じく栗樹の影に相見ぬ。依然として岩の如きその躰軀、悠然として寛ぎたるその態度、まことに自然にして邪氣無く、寂默として黃昏の天地に大氣を噓吸し坐す、おはれ眇たるかれはさながら天賦の性を具して、天與の浩然の

氣を養ふに似たりけり。此時に於てわれ深く眞宰の與へたる物の上の權力と分限とを觀る。

昔人の一話、龍王と蛙との物語ありき。龍王一日蛙に海の濱に逢ふ、蛙問ひけるは、王の在す所は如何。龍王の曰へらく、わが居る處は珠の樓臺、貝の宮闕、珊瑚の欄干、琅玕の柱梁、汝の居處は如何。蛙答ふ、わが居る處は綠苔碧草、泉淸く石白し。龍王の喜びはた怒るときは如何。龍王が曰く、われ喜べは時に膏澤を降し、五穀をして豐稔ならしむ。怒れば則ち之に先んずるに暴風を以てし、之に繼ぐに飛電を以てし、千里の內をして寸草だも留めざらしむ。汝の喜怒は則ち如何。蛙答へて曰く、われ喜べは月明かにして萬頃の靑田、淸風の涼萬斛、一部の鼓吹あり。怒れば即ち之に先ずるに努眼を以てし、之に次ぐに腹脹を以てす、わが爲す所此に安んじ此に休すと。而して後龍王と蛙とは相分れて去りぬと。われ曇に於て此物語の味はふことを覺ふ。鳥の聲、花の色、蚯蚓の笛、蛙の鼓、それとひとしき天然の情を、われは蝦蟆の擧動に見て、限無き夏の夕の樂しきを知りたりき。

(六)故鄕

去年の冬故園に歸りける時、靑山白雲の天然の面影今さらながらまことに安靜に平和に、野人牧童の談話まことに素朴に篤實なるを感じき。故園は此天然と此親しき人々のありてぞ、長へに樂しく懷か

しくゆかしく美しき情の緒を綰ぐなりける。
わが心の聲は覺ゑず口にのぼりて吟じたり。
君よ居ませと白雲は
　衣手かざし留むなり。
君すみてよと岩清水
　さゝやく聲の靜なる。
塵のけがれを隔てたる
　蘿のかつらの門のべを、
まもり顏なる蜘蛛の
　絲より細き妻木の畑、
たつや眞柴の伏庵に
　音なふものはなく小禽、
浮世の外の消息を
　語らふなべに遠山の
眉ひき笑ひうつろはぬ
　姿ぞ見ゆるとこしへに。
夢ならなくに故郷は
　雲に情あり水に心あり。

ゆかしきものは故郷よ
　そむきがたきは故郷よ。
その故郷をしばしだに
　離りし身はも歸り來て、
罪もはまれもわらし吹く
　松のむらだち葉をしげみ、
うからはらから集ひより
　羈旅の疲もいへどころ、
主歸りぬとよろこびの
　聲こそうごけ言の葉の、
花こそ開ちけ酒うたげ
「しろ」も來よかし「たま」も來よ、
汝等もはしき友どちよ、
　團欒の席に鶏も來よ。

紐より太き尾をふるひ
跳びつ狂ひつ誇りがに
　まめなる犬はまつはりぬ。
身をうづみ火に冬ごもり
夢にふけりしかいねこも

やから顔にぞついたちぬ。
めとり拉れだち鷄は
あかき冠をふりわげて
呼ぶやかちどき聲高く。
晝の手業にひまをなみ
顏のしわもよるふかく
やま田の翁おとづれて
おくる嫗のそばきりや
その末ながく君はしも
まさきくあれと祝ふなる。

希望は高くおほそらの
思想をひろくおほうみに
のせても身をばふる里の
鄉の情の絲の緒に
人の心は綰がれて
わが世の琴にしらべあり。

浮世をいかでしら雲に
心まかせて山ふかく
たゞそのまゝにゆく水の

ながれの奥の溪遠く
住めばすまるゝ故郷を、
またこそ出づれ都には。

君よ居ませとその雲は
衣手かざし留むなり。
君すみてよとその水は
さゝやく聲のなつかしき。

冬は去れり、春は去りぬ、今は夏來りぬ。人の多く故郷の白雲青山に親むの時なり、わが鄉思をもて他の鄉思をはかる。故里はにくきものにてはあらざらむ。

海樓望鄉

落○機○山○頭○片○月○高。
海○樓○夜○半○來○獨○立。
天、不、爲、吾、作、宇、宙。
青、衫、此、身、非、遷、謫。
痛、飲、偏、要、意、氣、揚。
囘○首○三○千○八○百○里。
金○門○臺○下○聽○怒○潮。
長○風○吹○袖○秋○森○蕭。」
壯、志、蹉、跎、事、難、就。
猶、灑、涕、淚、賦、懷、舊。」
其、奈、愁、魔、入、心、腸。
茫○無○國○處○是○故○鄉。」

（三十年）

（二十年）

春魂秋夢

(二)題壁

『心、白雲青山の間に在らむか。久しうして白雲青山その羈絆たらむ。身、重巖幽藪の裡に棲まむか。竟に重巖幽藪の桎梏あらむ。燈の場、汝を羈するものは、綠酒紅燈なり。朱欄畵棟の處、汝を絆するものは、朱欄畵棟なり。汝若し「天地萬物我を奈何」と傲然歌はん乎。汝は既に天地萬物の藩籬の羈絆中に在るなり。汝若し「江湖意あり公卿小なり」と恬然嘯かん乎。汝は既に江湖の環堵の桎梏裡に歸せるなり。宇宙は長へに宇宙の外に遯るゝを得ず。天地は永く天地の裡を逸するを得ず。汝は大羈絆の間に逍遙遊を求め、大桎梏の裡に自由鄉を尋ね、而して去來し、噓吸し、行藏す。偶あり、唱へん乎。「水重山複疑無路。柳暗花明又一村」と、汝が當に羈絆を經て羈絆に入り桎梏を過ぎて桎梏に投じ、もて人路の悠々たるを行くの繪畵なり。汝は須らく水重山複の羈絆を離れて更にまた柳暗花明の桎梏に入るべし。柳暗花明の桎梏を經ば、汝はまたさらに汝の意の向ふ所の羈絆境に至れ。』

明中此聲あり、暗中また此聲あり。わが醉醒寤寐の間に於て、われは常に此聲を聞く。

故鄉、水語り石默する處、亭榭の簾幕人靜にして花影夢の如く、古

廟の夜既に深けて月獨り醒めたる時、此聲を聽きたるわれは、今、
銅光帽影塵は烟の如き、烟は霧の如き、韜靄たる海濤の如き動響の
巷に潜みて、なほ此の聲を隱約の間に聽く。身外か、はた心中か、
われ自ら知らず。唯聲わが在る處に伴ふ。恐らくはわれ究竟此聲を
聞かざるの客となること無らん乎。

(三)　曉

曩昔靜寂なる寰區に、小やかなる茅屋の裡、華胥國の夢圓かなるよ
り醒め、喔々たる雞聲に喚ばれつゝ、三尺の窓を開けば、當面の玉
芙蓉、曉嵐依微の裡に嬌として揖するが如く、相對して先づ「佳朝」
を默慶す。氣味淸逈、神一往して魂もまた紫翠に染む。『烟消日出不

見人。欸乃一聲山水綠。』の情趣、具に味ひたりさ。
今、粉堞畫壁、崔嵬たる王侯の殿閣、參差たる富豪の樓臺、坦途迢
々たるの街巷、曙烟微に繚繞して低く搖曳し、夜の衣全く脫ぎおへ
ず、萬家休息の夢未だ見はてず、罪の魔も譽の神もなほ醒めず、淡
碧の天、唯一點の明星を留むる處、世は安定なり寧靜なり寥廓なり、
しかも來るべき希望と生命との壯濶なる天地の活動を豫視す。
一點の明星はやがて靜に夜を殿して、窈冥の天路に返り去る時、聞
き得たり遠方の滌笛一聲兩聲。漸次に人寰の音響は虛空に旋轉して
大荒一明、燿々たる天日蒼空に上ると共に、萬象は盡く夢より覺め
休息より起つ、氣宇恢々浩然長嘯すべし。江湖の遠遊にある時も、

田園の幽閑に棲む時も、はた京洛の紅塵に埋もる時も、曉はわれに生命の泉を供す、希望の糧を給す、喧靜の神秘を語る。

(三)　春愁

春酣に濃艶澹沱の景光人を惱し、陽和の氣冲融たり。輕風面を吹いて寒からず、香塵衣に貼して微暈長く印す。

行きて長堤を眺むれば、櫻花十里雲に香あり。徐に園林を逍遙すれば桃の濃艶妖嬈あり、李の瀟洒清麗あり、梨花は雪の如く、杏花は錦の如し、千條萬縷裊々依々たる垂楊垂柳あり、絲に長く春を綰がんとする乎。柳陰深く葉床に藏るゝ嬌鶯あり、喚ぶは誰が名ぞ、何の語ぞ。花間遠く迷ふ紛蝶あり、尋ぬるは夢かそも戀か。

野に出でんか、煖霞平郊を罩めて、青々たる蘼蕪菌の如し、百鳥哢囀喈々の處、拾翠の娘子あり尋芳の少年あり。

山に到らんか。烟嵐紫を含み翠を孕みて、輕雲靜に去來す。清溪の細水は山意の安定を低語し、閑林の幽花は丘壑の隱逸を默彰す、霞の奥に樵歌牧謠また春を稱ゆるを聞くべし。

水に泛ばんか。鷗心の自然を觀取して、春意の棹歌に入りたるを聞くべし。遠水天と碧に、滄溟萬里霞に浮きたる、揚々の舟と共に神搖きて夢境に泛ばん。

濃春の烟景まことに人を惱殺す。水に山に園に林に平郊に、春意通じ遍くして、人心を籠絡す澹蕩の天既に醉ふが如し、人の心もまた

醉はんとす。醉うて狂せんとす。人心の狂顛を惹くもの是れ春色の本意なるべし。

しかはあれど、樓臺人靜に家々夢に沈み、寂々たる夜半、ぬるみ顔なる朧月、偸むが如く花と映じたる處、しづ心なく散る花あり、一片兩片地に落ちて聲無し。われ之に對して一腔の奇愁あり、萬斛の潮の如く生ず。腸を抉り、胸を刳るの感懷、殆ど身を措くに堪へず。刹那の後中心の一味は極めて寥落なり、寂寞なり、蒼茫たり。何ものをか覓めて捉へ得ず尋ねて逢ひ難さが如し。

あはれこの綠慘紅怨の情は人の春愁なり。

若し情に配せば春は戀愛なり。紛陣香圍の裡に何限の怨あり。紅情

綠意の底に何限の慘あり。描かんとして寫し難く、言はんとして述べ難し。心路迢々として唯杳冥に入る。

戀愛の旨味を見曉せるものは、またこの春愁の一味を解道すべし。」

（四）夜

夜は寂寥を齎らす、寂寥は人懷の世念を去て宇宙の浩々たる境に就かしむ、人懷一たび宇宙の浩々たる境に就く時、一氣空靈、玆に人にあらず物にあらざるもの窈然として虛に現はるゝを感ず、卽ち有無縹緲の裡に或るものゝ存在を認むべし。一齋箇中の顯象を記して曰く

深夜闇室に獨坐し、群動皆息し、形影俱に泯す是に於て反觀す、

但だ覺ふ方寸煙然として自ら照らす者あり、恰も一點燈火、闇室を照破するが如し。認得す此れ正に我が神光靈昭の本體。性命即ち此物、道徳即ち此物、中和位育に至るも、亦唯是れ此物光輝の宇宙に充塞する處。

と、便ちよく一氣空靈なる筒中の眞筌を觀得せるもの、人、此に反觀し、此靜中の消息を知て、而して後に滔々たる社會活動の盤渦裡に投じて溺れざるを得べし。バイロンの詩中に、また此寂寥の消息を詠ぜるものあり。

岩に踞し、潮うちよする邊に冥想し、さては徐に森陰の深き境に逍遥し、人懷の管領に屬せざるものゝ棲む處、浮世のはかなき人跡の稀にだに通はざる人知らぬ山中に攀ぢ、伴侶をもとめぬ野獣と侔しく、絕壁の上、泡だち落つる瀑の邊に、獨り危坐せむこと、げにこは寂寞にはあらで宇宙天然の化機に參語し、その未だ闡かざる秘府を覩るなれ。

夜の齎らす所は、寂寞と多少の差あれども、その所謂宇宙天然の化機に參語して、未だ闡かざる秘府を徹に視るの感は、便ち一齋の所謂烟然として懷に靈光を發するもの是なり。

夜は人間冥想の時なり、覺悟の時なり、思念の時なり、宇宙の眞宰と默契するの時なり、哲人靈妙の理樞を把り得る時なり、詩人神來の想を賦興せらるゝの時なり。

明かなる晝は人寰の領地なり。暗き夜は神の領地なり。人は言ふ、百鬼は夜行くと、われは言はんとす、百鬼晝行く、一神夜臨むと。百鬼の晝間に行くを知て、一神の夜に臨むを覺るものは、人寰の領地に在ても、神の領地に在ても、行路難無く遲暮嘆無く、其動たる行藏安くして靜たる夢穩ならむ。

天に星辰の芒角森たる時、地に萬象の容黝たる處俯仰してわれ詩人を知る、哲人を知る、聖人を知る、賢人を知る、偉人英雄を知り得。天に光明なる日ある時、地に擾々たる塵埃漲る處、齷齪としてわれ小人を認む、佞者を認む、奸者を認む、瞎徒を認む、痴人を認め得。」人、この永遠の宇宙、刹那の人寰に在て、彼の晝の行藏によく處し、

此の夜の休息に安んじ得べきの法、只その寂寥の裡に所謂靈光の一閃に觸るゝにあらむ。

模稜の語未だ了らず、天既に明く。黄埃紅塵紛とし漫として、出頭沒頭の人、梭を織るが如し、われまた晝の行動に就かむ。

(五)　秋と詩人

遙夜燈前萬象靜かに、空靈の一氣肺腑に泌むが如く感ずる時、風にあらず雨にあらざるの聲を天地寥廓の間に聽く。此聲は即ち歐陽子が「初は淅瀝として以て蕭颯たり、忽にして奔騰して泙湃たり、波濤の夜驚き風雨の驟に至るが如し、其物に觸るゝや、鏦々錚々として金鐵皆鳴る」といへるもの秋の聲なり。此聲を聽く時、神澄み骨

健に一氣塵垢を拂拭して、宇宙の無限と人生の有限との間に一念の懸るを觀じ、愴然として泣下するか、若くは凛然として正襟するか、詩味神思一往深奥なるを覺ゆるもの獨りわれのみならざるべし。

蓋し秋は人を警醒し覺悟せしむ、人心醒覺の時季なり。所謂「蕭瑟として草木搖落して變衰す、憭慄として遠行に在りて山に登り水に臨み將に歸らんとするを送らむが若し、天高く氣清く寂寥として潦を收めて水清き」もの即ちその相に非ずや。衣食に營々維れ奔走し黄金に汲々追隨して、曾て天命の存する所を思はず人生の歸趣ある所を覺らざるの心、是に至つて倏忽として有限と無限、無常と恒久との關繋を反省す。靈活なる理性を養すべきは此時なり、崇高なる詩

思を動かすべきは此時なり。人が飲食と黄金とのみにて生くるもの に非ざるを知るは此時なり。人生の歡樂境は綠酒紅燈歌舞絲竹の地の外に一生面あるを知るは此時なり。詩人たるもの此好時節を閑却して、また何れの日か人生を咏じ自然を歌ふの時機あらん。劉夢得吟じて曰く、自古逢秋悲寂寥。我言秋日勝春朝。晴空一鶴排雲上。便引詩情到碧霄。と、眞箇に詩人が秋に於ける情地の一なり。

茅店の鷄聲、板橋の人跡、月下の砧杵、烟中の牧笛、蒹葭に白露の江に横はるを見、綠野に紅霜の草に滿つるを見、若くは蟲聲雁語、若くは空山流水、若くは遠岫落木、若くは滄海一艇、詩料到頭多し。春は造化の色相を觀、秋は造化の精神を視示す、把つて之を人生に

機縅し宇宙に禰漆するは詩人の本領。今の詩人、意一旦此に注かば、その詩や活動空靈、所謂奔騰汗湃波濤風雨の致を具へて秋の聲と相副ふに足るの作また空望にあらざらん。

梅花

開在疎籬深巷中。
有無悄立犬疑影。
千里飛魂嗟貶謫。
撲顔片々不寒雪。

（三十年）

書窓夜半月玲瓏。
色相寫來僧悟空。
一枝挿籠憶驍雄。
趣味絶同楊柳風。

（二十年）

花下醉翁

世の中にたゐて櫻の無かりせば人の心はのどけからまし……さわまた斯様なことを唸るものゝありそうな春といふ奴が來をつた。春は霞と共にぼうつと心が浮かれろと造化てくれた造物主どのは、おれのやうな可愛いらしい老爺さんでがなあらうよ、この一刻千金の折から老人が浮かれるのに、貴様のやうに閉戸先生をきめる奴が何處に在るものか。貴様のやうな年百年中詩人はおのれの天職だなどゝ一生懸命にもがいて、腦味噌を寒暖計百二十度以上に沸騰せ、時々加答爾で困つて居る腸を豆腐粕のやうに絞りきつて溜息をついてそ

んな容膝の蝸廬なんどに、詩神に對ひ、北面して臣と稱するやうに座てばかり居て身躰が堪るものか。まあ第一燈臺下暗く、眼よく千里の外を觀れどその睫を見ること能はずだ、貴樣は詩人を何だと思つて居るか詩人といふのは死人の訛傳した名で、究竟息が無くて血が通はずシヤッチコばつて棺桶に臭い抹香をかぶつてすぽりと這入るときの人と區別したまでのこと、詩の字を見ても木魚や鐘の聲に緣はなれぬ寺の坊主の寢語。……なんだと天職たるを信じて之を盡しゆけば永遠に於て永遠の富貴功名、到らんこと必然の理だと、そ、それが誤謬のそもそもだ、巧名利達の名利といふことは敞履の渾名みたやうなもの、富貴とは空氣の變じたそれ浮雲の化物だ、詩人と

異名同心の小說家もやつぱり區々たるこせついた傀儡の動作を、ひつくるめて人情の深刻だとか理想の高尙だとか如何しようのかうしやうの思案、貴樣と同じやうに唸て居るところは難產の女みたやうなものだぞ、天職などゝ言つて天水桶を倒に覆りかへしたやうに七顚八倒の末、貴樣の名が靑表紙に錄つた所でだ、よしか、それが何時か蠹魚の餌物となつて高閣の晒しもの、鼠の糞が澤山に積つた終局、還魂紙料の價一貫目幾らだ、貴樣の功績が根府川紀念碑の石に刻られた所がやがて苔にたかられて土に埋もれ雨がびしよ〳〵露がじめ〳〵、永遠々々と永遠を的にしていつまで永遠に永遠を唱へて居るのだ、まあ考へて見るが可い、苦を爲るも一生、樂をするも一生、

貴様が親母の胎からギヤッと出るとき産婆が下手か母親の胎が間違つてかそのまゝ流産といふ運命に逢つたら如何だ、貴様は無名非情の其處らに轉がつて居るごろ〳〵石同様眼も開かず口もあかず土の中に埋まつてしまつて今頃は窪くなつた塚の上に槿花蒲公英の花盛う、それが貴様の骨や肉の土精に蒸されて化けたものだなどゝ貴様のやうな詩人が唸る位のもの、それで貴様は塵でも土精でも花でも何でも無いのだ、強て附會れば酸素とか窒素とか水素といふやうなふわ〳〵したものとも化物學者でもいふのだ。それを考へたら如何だ。この世の中に生れて來た所で悲しい苦い顏容ばかりして居るのは馬鹿氣て居る。一躰全躰宇宙人間といふやうな事に對つて人間が

自分の見解を下すのが誤つて居るぞ、貴様が何時ぞや樂天だ厭世だと騷いで獨逸のショウペンハワーが世界は意思の凝固だとかいふことの見解をおれに說いたが、そやつがやつぱり今日でも貴様の腦髓の大廣間に大の字形に臥て居て醒めないで囈語をいふのだ。まあ其様な哲學者のショッパイ理屈はさらりと捨てろよ。春が來て人が浮かれる、それ見ろ隣にも一重櫻が笑て居るぢやあないか、門にも陽炎が立つて招いて居るわ。さあ老爺の言ふことを聞いて歩けよ。到頭まあ貴様を牢屋から引張り出したぞ、なにおれは朝から醉つて居る？、勿論の事だ、おれの酒はおれの天地だ、斯う貴様に一瓢を提げさしてぶらり〳〵歩く心もちは言へたものでないぞ、花あり酒

あり風流人のわれあり。まてよ一杯よこせ、甘いぞ々々々、貴様も飲め、さうださう美事に飲めば可いのだ、瓢を口づから飲むといふのは風流の骨頂だぞよ。なに酔つて來たか、そうれ見ろ、馬鹿な事を頑張て一室の籠城なんぞをする奴が今頃に在るものか、それよ三杯大道に通ずる如き顔色が貴様にも見えて來たわ、醺醋の境に入つたぢやないか。天若し酒を愛せずんば酒星天に在らず、地若し酒を愛せずんば地合に酒泉無かるべしだ、よしか斯ういふ風に人間が動いて樂んでやれば春も來た甲斐がある花も咲甲斐があるのだ、是に於てなお、杯中の物の愛すべきを貴様も合點がいつたらうが。……おゝ甘いぞ、もう無いわ、貴様も餘程飲んだな、なにおれが一人で

飲んだか、其處らで花に緣のある櫻正宗でも注で貰へ。

なに行歩が危い？、大丈夫々々々。おい、これよ、李白はな一斗自然に適ふと言つたが、酒は人間を自然と冥合せしむるぞ、貴様が言つたやうな天地に對して一つの見解が要らなくなつて、天地萬物宇宙唯その自然のまゝに存する狀態がちやんと解るぞ。何でもな萬物に同化したところが、それ人間の最極安樂の場所であるのだ。酒懷只覺乾坤小、醉裡人天渾了々、人は花と酒とに對するに限るぞよ。

何？、おれも哲理を說くといふか、アツハハア、貴様の哲學とは違ふぞ、若いもの〳〵腰弱な理窟はおれは言はぬぞ、おれの言ふのは自然の事だぞよ。

少しは酔つて來たようでもあるぞ。歸らう？、まあだ早い、待て〳〵、否、寢るものか、これ斯ういふ處に花を見るは所謂花下青草に坐するの興だ。貴樣は詩人と言ふにも似あはず、茫然佇立てるとは花に背くものだ。西行が言つたではないか、願はくは花の下にて春死なんその更衣の望月の頃と丁度今夜は月が出る筈だ、また夜の花月を觀るは風流の一層ぢやあないか、否、臥るものか、まあ數時からして置けよ、それ見ろ雲の如き花の色香が麗しく美しいわ。

＊　＊　＊　＊　＊

誰だ、誰だ、なに迎に來たと？。○諾、可しゝ々々、今起るわ。あゝあ朧月が花の陰を隈とる所は美景といふ者だ、もう少時からして見て

居たいものだ、何だと先刻から犬がおれの唇を嘗めて居つたと、口を洗へといふのか、あつははあ犬こそ酒臭かつたであらうよ。

（三十一年）

梅花

江南消息不遲々。
○流○水○斷○橋○春○遠○處○
○羅○浮○夢○覺○空○憐○我○
曉起驚看零落甚。
竹外星然第一枝。
○疎○姿○瘦○骨○月○描○時○
○號○國○粧○成○欲○嫁○誰○
便知橫笛五更吹。

（二十年）

山のたより

白粉臭い花の東京へ土臭い山の中から一筆啓上致候、どの道臭い同志の事あながちにも有之間敷と被存候。

扨菊はたばこにむしられ尾花は炭俵に姿をかゑ山茶花獨りわれは顔に咲きて、背戸に鶏の聲高く霜柱に大根ひきぬく手も冷たく相成候昨日今日東京はアヅマコートや帶なしの外套の往さ來るさが日に增し候との事、榾柮の跨火に、煨芋の湯氣の立つやつをアングリやらかし候て暖かいと申候われ等の境界とは別ものゝ事と存候。

東京は石の上の住居と申候が、われらのは穴ぐらの住居と申候にや、

世の中の事は頓と聞ゑ申さず、秦か漢か狆かワンか武陵桃源の人々もわれらと似たものかと今さら被存次第に候。

東京は此節毎夜の火事沙汰、はん鐘の二つ番三つ番、罪も報も休息の夢路を妨げられて、驚いて何處だと飛び出す人も有之べく、半夜雞聲を聽きて抉起せる昔の志士を想ひ出さるゝ事、兎に角酒屋も豆腐屋もあまり近くは無之われらの閑天地とは大なる違と存候、追々歳は晩れに迫り議員樣も上京國會もはじまり候旁々何やかや物騷の事多く可相成と存じ候。

折柄此程は獨逸が膠州灣を占領致し候とやら、昨夜隣の鬚先生が新聞持參にての爐談、今に露西亞が朝鮮をとり佛蘭西が澎湖島を占領

し、それから段々と日本を攻める筈の底意だに依て、日本でも用意おさ〳〵怠慢無く、富士艦も來る八島も來る明石も出來る淺間艦も今に來る敷島艦も出來つゝある、やがて戰爭が初まるのだと申すことにて、口角より噴き出す唾沫は鬚に氷柱となつて燈の光に閃めき、烟管の雁首を爐緣にたゝき曲げ候勢にて話され申候程に庭に草鞋を作り居りたる聾の老爺が、大聲にて何處のどいつが日本をとるなんていふだんべいなどゝ飛んだ權現さん時代の洒落に鬚先生の熱心も樽柮火と共に寒灰に歸し申候。さて〳〵呑氣は田舍の事にて候。歐洲列國が東洋呑噬を計るの、露佛獨が支那分割を企だつるの、獨逸の皇帝樣が何か世の中に面白い事業をやつて見たいといふところか

ら三國同盟だのさては膠州灣の占領などゝよしなき平地に波瀾を生ずる事ばかり、電報が來る新聞が傳へる、政事家は眼を圓くして奔走し、相場師は耳を傾けて株に氣を注ける、忙がしい事にて候、われらの如き年百年中、山紫に水明かに、柳は綠、花は紅ときめて、朝に星を戴き夕に月を踏むで、衣るに裹からず食ふに餓ねざれば、それが天下泰平家內安全國家安康と心得て、朝鮮が亡ばふが、支那か潰れやうが、土耳其が倒れやうが、李鴻章が老いぼれて馬鹿になつて死んでしまつて回向されやうが、ビスマークが鐵血政略の罰が當つて閻魔の廳でヒキマーシに逢はふとも、さてはグラッドストーンがふらつと病氣になつてすとんと穴の中へ落されやうとも、われ

等に何の關はりわらんやと存候、われらはやはり壽命は壽命だけ、運命は運命だけ、貧乏は貧乏、富貴は富貴、生れたから活さて居るのにて有之べくと觀念致居候、一躰に西洋人はわれらの如く重に芋や大根や甘藷を食はず、牛や豚や脂肪の多きわくもの食ひする爲めにや慾が深く候と被存候髭が赤く顔が白く眼が碧いからと申してやはり人間にて有之べく、人間にて有之以上は、日本人が死でゆくときは帷子一つですむ如く、例へは獨逸の王さまでもアーメンといふ嘗めたら甘さうな言を聞いて、膠州灣や何かを棺の中へ入れてゆくわけでは無く、やはり死ぬときは手ぶらと存候。

どうか人間は世の中といふことばかりを思はず、そろ〳〵天然といふと自然といふことに心づきて貰ひたく、即ち人がその元始を少しづゝは考へてはしく被存候、高山流水杳然として雲行き巖靜かなる處、天地の自然に養はれて自然を樂み居候われらは、世事には迂濶至極に候へどしるこの後には紫蘇の果がうまく、醉うての後は水が旨いと申候、利奔名走の夢醒むるときも無くてはかなひ申間敷候、あなかしこ。

（三十年秋）

寄懷米山梅馨在米國

（二十二年）

今年節又至重裘。
夜雨青燈思舊遊。
天外雲分兩半球。
夢中人遠三千里。
鵬騰鵠汲水悠々。
蜃吐鯨呑潮滾々。
獨取徽醽上海樓。
離憂如許何邊寫。

富士山を憶ふ

（上）

終日編輯局の机に對ひて筆執る身の、蕭然たる容膝盧の住めば我家に歸り來し夕暮、汗浸みし服を脱ぐ間もどかしく、行水にさつと塵を洗ひたるに輕衣を着け、微風清きに端居の心地また快なり、折しも圓かなる月を待たんか、澄みたる空に親しき星を迎へんか、かゝる時われに塵の世の羈絆無くて天の清き想あり。

夜の色既に黑くなり來て、四隣もの靜に、蛙鳴き出でたると折々遠笛の響くとが聞ゆるばかり、それもわれには何の意識をも惹かず、

但だ瞑然として自から失へるやうに坐忘の境に入りぬ。

忽ち青葉の間を渡り來る風の、近く絃の聲を遞るあり、坐忘は卒然として破られ我耳はそれに傾きぬ、聽くに俚歌『打水曲』なり、調も拙からずその聲は清し。

打水に、晝の暑さを忘れてし、雫の山の草の葉に、月も宿りて涼風の、そうて澤邊に鳴く蛙、更けてたよ〳〵飛ぶ螢。

自然の福音を傳へてし此小歌はその涼風に依りて通ひ來る絲聲と肉聲との故をもて、われを月と星との天然の懷より奪ひ、理性と空想との靈境より掠め去りて、わが胸は情緒を牽き出し憶想感懷の巷に入りぬ、無限の天に對せる想を破つて有爲の人寰に於ける情と變じ

ぬ、われは戀愛を憶へり、鄉思を催せり人生の運命を感ぜり、總て世に所在羈絆たるべき感懷はわれを襲ひ來りぬ。かゝる時、人に隱憂あり奇愁あり。

あゝ寥々たる小歌、歌ふ所のものは清凉の風物なり描く所のものは有趣なる天然なり。さるを我天心を奪つて人感に返らしめたるは、此刹那何の機趣かありし、絲肉の聲韻が、人なる聯感を忽地に我に與へ、やがてわれは天然と人との上に一縷の線を繋がむとせるにてぞあるべき。無限の天を讃美すると共に有限の人生を觀じたるにてぞあるべき。

此感懷の巷に彷徨ふもまた折にふれての興として哀裡の快感無しと

にもあらねど、此興に耽けらん時、われは毎に海の底深く沈みゆく心地して終には愴然として涙下るべし、さらずば狂顛を發して其恒心を損ずべし。是わが弊なりわが多感の患なり、情極まる處物の患あらば其性を損ずべければなり。

懷を轉せんとて短檠の下に書を亂抽し、手に觸れしは東坡集一部、繙きしは烟江疊嶂圖の題詩なり。

江上愁心三疊の山。空に浮べる積翠は雲烟の如し。山か雲か遠くして知る莫し。烟空しく雲散じて山依然。人間何處にか此境ある徑に往いて二頃の田を置かんと欲す。君見ずや武昌樊口幽絕の處。東坡先生留ること五年。江烟天に接して天漠々。暮雲雨を捲いて

山娟々。丹楓鴉を翻して水宿に伴ひ。長松雪を落して醉眠を驚かす。桃花流水は人世に在り。武陵豈に必ずしも皆神仙ならんや。江山は清空、我は塵土。去路ありと雖も尋ぬるに縁無し。君に此書を還して三び嘆息す。山中故人應に我を招く歸來の篇あるべし。

曾て卓如梁啓超の寫して我に贈りしは此詩なり、我客懐を遣り塵懐を拂ふは此詩なり、あゝ江山は清空、我は塵土、人寰の萬事轉遷の多様にして江山の清空一に何ぞ恒久なる。

幽懐は詩を誦せるに依て消ず、詩は更に我に一層の幽懐を齎らし來りぬ。一篇吟じ了りて、我幻覺は櫻柳の青葉茂れる處、村竈閭烟のたなびく處雞鳴狗吠の閑なる處、古茅蕭然たる一簷の屋後に天表に高く抜ける我家の富士を觀たり。雪の富士は我前に活けるが如く現はれたり。

曾て雪の富士に寄せたるわが感懐あり。

『われ、母の懐に抱かれて乳房に養はれける時、わが眼に清く映じたるは雪の富士なりき。われ、未だ浮世のわらき風浪を知らず人情のあつき涙を知らざりし時、わが心に美しく感じたるは、雪の富士なりき。われ、憂を知りて憂の埋むべき處をもとめ、悲を知りて悲の消ゆべき地を尋ね、浮世の羈絆を知り人生の煩累を知るに至りて、われを慰めわれを和らげたるは、また雪の富士なりき。われ幼き時に於て、雪の富士の面を美しと思ひき、われ成人りて、

雪の富士の風情をゆかしと思ひき、しかして後われ人情を知り浮世を知るに及びて、まことに雪の富士の神韻を、崇高に壮厳に純潔に感ずるに至れり。

あゝわれ、故郷を離れて、月と花とは美しといふなる都に啓行せるの日、その白雪の袖をかざして、わが足をとゞめ、その紫の霞の衣をひきはへて、わが歩みを遮ぎり、長く久しく棲みふるせよと言はまほしくわが心を後にのみひきとめたるは、雪の富士なりき。われ世の塵に塗れ欲の巷に圍まれ、罪の杯をとりて憂悶の淵に臨み、休息の床より起きて戦闘の巷に立ち、若くは流産の兒となりて暗黒より暗黒に過ぎたらんとを願ひて枕に曙をかこちたる

約百の如く叫びたる時、われ獨り世に醒め、われ獨り世に清きを思うて澤畔に吟行せる屈原の如く嘆きたる時、わが心の塵を拂ひ念の垢を清めわれを勵ましわれを奮はしめて、わが生の空しからざるを悟らしめたるものは、天表に卓立せるわが故郷の雪の富士なりき。昨日われ歳月の人を磨して電光石火の疾きを感じ、今日われ新しき年を迎へて人皆と同じく恙無き身を祝す時、神代の事も思はるゝ安定の意を表はせるものは、まことにまた此雪の富士なり。

憶ふ、糢糊たる烟嵐、彼の山髻に搖曳し、縹緲たる紫翠を染めて、夢より醒めし美人の嬌羞を帶びて語らむとせるが如き時を。天風

高く衆鳥を吹き去りて、孤雲閑に去來する處、風標濯然天姿颯爽たる偉容、さながら徐ろに大荒を睥睨せる如き樣ある時を。旋風忽ち曠漠の大野に起りて黄茅白麻齊しく靡き、峯頭の雪華紛落して雲烟の搖蕩を催す時を。水の如く澄み渡れる沆瀣の清夜、千點萬點きらめける衆星の光芒森々たるに、浩々として寥廓たる碧霄の大月、靜に三峯を照して、さながら瑤臺の仙女が廣袤の天使と相語らふが如く崇高にして皎潔なる容ある時を。雲あり暗く之を蔽ふも、霧あり深く之を包むも、依然として雪の富士は天表に清く高く卓立し、永朝永夕、眞宰が依然として造化を彰はし、穹蒼が依然として經綸を顯はすの間、その凝り成せる眞美は、わが魂

交る處に下り、わが形開く處に來る。

宗鑑曰く、元日の見るものにせむ富士の山と、われは平時の神々しき雪の富士を此日に於て特にわが心に印するの深きを感ず。」

（三十一年一月）

故郷の富士のかくまでわれを動かす事切なる、神美の不變なるにひきかへて、美神に仕ふる我の塵土に塗るゝ事久しいかな。

富士よ、その山の君よ、君に寄する我懐限りなし更に君と我とにかけわたしたる三十年の緣の絲、繋ぎ來りて君が面影をわが胸に寫しわが胸の響を鳴さん。

（下）

この山の麓に産聲を擧げしわれながら、山の神采が如何ばかり深く人の心に印しつけらるゝかを覺れるは、おぼろげに物の趣致を味ひ得る頃よりなりき。

親の恩の掌にありながら、或時まではその恩のありがたきを意識せざりしと等しく、朝に看て美しく夕に看て美しく清夜に看て美しく相看て両不厭、唯有敬亭山の致ある此山か、崇高なる眞宰の稜威、深厚なる眞宰の愛、絶麗なる美を示現してわれを化せるとを、或時までは自から識らざりしなり、われ詩神を拜せんと思ひて初めて此山に登り十七の齢にてありき、わが詩師なりし湖山小野長愿翁の登岳詩は、わが游神をして山靈の傍に馳せしめしなり。

鶴駕鸞驂何所美。短節支到白雲邊。豪懐不覺地珠大。放眼眞知天體圓。絶頂悪風無六月。陰崖積雪自千年。腰間我有一瓢酒。欲醉玉皇香案前。

茫々八極靜塵氛。獨立飄然思不群。月窟星宮應咫尺。十洲三島漫紛紜。赤烏夜躍東瀛水。金氣秋流大麓雲。高宿峯頭支醉枕。釣天廣樂夢中聞。

青蓮一去逸才稀。誰復登高能賦詩。世界三千歸掌握。鵬程九萬可風追。人間草木未生處。天上神仙來會時。爲報東西漫游客。不攀

大岳莫言奇。

三律は湖山翁廿五歳東游登岳の際に作る所、格調全く明七子に逼似し、詩想即ち一に雄大宏壮にあり、元より漢詩人の想簡により漢字句を縝緻せるものなれば、精細に詩美を致すと能はざるべしと雖も、登岳の氣宇精神の快は此詩に依て想像すべかりしなり。

われは金剛杖を支へ菅笠戴きて登れり。登りて天地の大、宇宙の浩々たるを知りぬ、高山が如何ばかり人に偉大の氣魄を與ふるかを識りぬ。

峯頭の一夜、大麓の一夜、雪に映せる旭光を觀、雲烟搖蕩する萬象を觀、天門に長嘯して萬里の清風に羽化登仙の襟を知りたり。

歸り來て家居より山に對すれば、屏顔積翠の美言葉あらはし難く筆に着け難し。されど到底漢詩にわが懐を言ひあらはさんと思ひて苦吟連日、見來れば古人が岱山華山泰山に登れる詩若くは近人登岳の諸作は、わが言はんと欲するの想吟せんとするの詞、皆既に言ひ陳したり、語不驚人死不休の意氣壯なるわれは、前人を套襲せんとを欲せず、さりとて一句の着くる無きを口惜しと思ふに、想はあらぬ奇怪なる方に向て馳せゆき、險韻を取て七律二首五絶二十首を作し得たり。

女媧煉後石皆爛。壺叟縮來天亦粘。龍氣吐呑雲冪歷。仙歌杳渺夜清嚴。

露落仙人掌立。月明玉女洗頭來。氣凝中夜一山寂。獨息眞知造化胚。

の如き即ちわが苦吟を經たる後の句なりしなり。湖山翁曰く老友枕山登岳詩中、有已從中峯無草木、余亦有人間莫木未生處句、未登岳者皆怪之、此詩女媧句、一經其地者而方纔稱之耳と、また曰く登嶽詩辛苦推敲感服、然猶未盡、胚韻の如き到底名詩を作るべからずとわが詩致に於ける想膸はなほ障に至らず唯漠然字句の末に拘泥せしなり、此叱言を得たるも元より宜ながら、なほ富士の神采を詞句の上に發揮せんものをと、それより朝々暮々に背戸の圃に立ち出でゝ、雲烟に千態萬狀の變化するなる屡顏の玉芙蓉に對しつ、竟に唯一句のその神采を筆頭に寫すよ能はざりしなり。

されど、深くわが心に富士の神采を刻みわが心を動かしたるは此間なり。

われまた曾て世の人の必ず一度は把るべき戀てふ杯を手にせるとありき。美酒とひとしく、飲みて其世ならぬ香に醉ひたりしなり。されどわが盃は缺けたる器にして、その酒は毒露を含みたりけむ、われはさながら中酒の人となりぬ。失望喪心併せ到れる鬱悶は、浮世人寰に對する奇愁を喚起して、我わが身を如何にせんかとばかり、一時に迫れる厭世の情を驅らんとての逍遥遊に、美しき雪の冠を戴きて天の一方より

『迷ふ莫れ、醒めよ、働けよ』

と威ありてしかも温乎たる無聲の聲にわれを起たしめたるは、あゝ富士の神來なりき。わが富士について緬想の二は是。

われ去年康南海の事業に與りて清に航し、北京の政變時局を一轉して血を流し戟を飛ばし亡命の客幾多の悲運に會せる際、秋風短褐孤劍飄然、長崎より鐵車一馳、夢をのせて東海を上り夜半に濱名湖を過ぎ曉の近きしを知らざりしが、

『燒津々々』

と車長の連呼するに醒めつゝ車窓を開きたる時、紺碧の曉烟に覩敕したる富士は嫣然一笑、窓より入りて人の如し。

『まさきくありて歸りきませ』と送りたる人の言の葉なほ殘れる耳に、山は宛然、

『さきくも歸り來ませし君よ』

と私語くなるを、われはその面影のわが胸に生きて入りたる心地し、

嗒然自失、言は無かりき。

憶ふにつけて山の神來のわが胸に最も強く彫られたるは此時なり。

時の流に掉さして一葉輕き我世の舟の流を下るに從ひて富士の神來のいよ〳〵神々して尊く覺ゆる念の增しゆくなり。

故郷の白雲嬉容あり、故郷の清泉歡聲あり、清空たる富峯、あゝわが塵土の身を奈何にすべき。

（三十二年夏）

倚劍長歌

蓬頭垢面役風塵。
窮、達、初知、持命、地。
出○門○一○笑○乾○坤○濶○
滴○里○乘○槎○秋○九○月○
今是昨非三十春。
行、藏久愧、屠龍、身。
○倚○劍○長○歌○意○氣○新○
海○風○吹○髮○送○征○人○

（三十二年渡清船中）

滑稽時代

友に無聲々といふものあり、時に摸稜の語を寄せて吾人の反省をもとむ、今また滑稽時代と題する一文あり。

歌客足下春信傳遽して既に落梅に抵る、面を吹いて寒からぬ楊柳の風に輕き袖を拂はせて行樂すべき時節は來れり。東郊青を踏まば蘁蕪一望氣も心も長閑なるべし、西山紅を尋ぬれば黃鶯數聲はた情懷を遣るに足らむ、片舟短棹江に浮ばゝ鷗に隨つて春の消息を知り、輕鞍長鞭馬を驅つて逍遙の興を盡すべし。朧ろにかすむ春月の花に陰り、風情もまた佳、靜に灑ぐ春雨の樂に似たる韻致もまた佳、春

景春物君の情懷に佳ならざるもの無けむ。あはれ春は人を醉はしめ人を惱ますしかも人は今將に醉ひて惱まされんことを待望しつゝあるなり。

人に此の如き歡樂あり、また人に此の如き歡樂の裏面あり、裏面は即ち哀情なり、哀情生ずる處醒覺來る、醒覺來る時靜思あり、夜は君に靜思の時を與へざるか、萬籟寂として萬象皆息ひ、人は方に夢に入るの時、君試に靜思せば何物をか得む。

吾は滑稽時代なるものを得たり、君見よ今は滑稽時代に非るか。伊太利は淸國の土地を要求して三門灣を占領したりといふ、淸國は伊太利に對して何事の非禮を加へたるか數から棒に突如としておのれ

の所有物を要求され即ち直ちに其物件を占有せらる迷惑の事ならずや、而して列國の有心故造に旅順口膠州灣威海衛等を占領したるもの則ち敢て異議をいはず、君は此に滑稽を認めざるか。獨人四名車に乘じて天津の萬燈會に赴く衢路狹隘人々塡咽す淸人車を破碎して四人者を攘ふ、獨國政府は之を以て大に淸廷に要求する所あらむとし宰相公言して暗に威嚇の語勢あり無智蒙昧の匹夫の行爲即ち直に禍を朝廷國家に及ぼさんとす、君は此に滑稽を認めざるか。戰備を盛にして平和會議を開くものも滑稽なり、共和政府に倦みて那ポレオンを憶想する國民も滑稽なり、旅順口虐殺を非難して非リッピンに虐殺を行ふ者も滑稽なり、これ滑稽の最も大なるもの。さらに顧み

れば高利貸に苦み厨房の米櫃空しくなり易きがために八百圓の歳費を増加して二千圓となせる議會あり一粒の米を食はず一滴の水をも飲まず一言も發せざる銅像を作りて頻に禮拜敬仰するもの多し何のために拜すといはゞ終に意義無し唯太平の粉飾なり之に依て些の人心陶冶の見るべきあるなし粒粒辛苦芋大根を食つて流すなる百姓の汗は租稅となつて吏の米廩料に供せらる吏食ひ足らずして官金費消の罪を犯し獄に入れらるこれもまた滑稽なり。強盜を捕へて見れば人遣ひ、稻妻てふ一匹夫のために數多の良民刀下の鬼となり衆多の警吏空しく頭を惱す。室内の器物自から空に飛び淺蟲の怪談人を驚かし新聞記者特筆大書して之を世間に報ず既にしてこは一少婦の欺

罔に出でし手段なるを見る、匹婦のために天下欺かるもまた滑稽に非ずや。松山裁判所に於て强盜殺人の罪ありとせられ死刑の宣告を得たるもの寃罪たりしこと分明して一轉無罪の宣告に會せしが如き また或は少女强姦虐殺の罪人として拘留せられ月餘の縲紲獄中に呻吟しゝかも未だ曾て此罪業なき柱屈者ありしとせば是豈に人權を蹂躙し警察の不信を表はし社會の不安を來すべき矛盾滑稽の大事實に非ずや。若しそれ瀛車に脫線多くして人を傷くるも滑稽なり汝に出るもの汝に出でゝ罪過の因果に服從し自殺情死を遂ぐるもの多きも滑稽なり、擧世滔々滑稽の世界に赴くもの數へ來れば僕をかふるも盡さじ吾此を稱して滑稽時代といふ。君は此滑稽時代を觀取して之

を描くの成案無きや、文界頻に時代精神を說く、吾は滑稽を以て時代精神の一面を解くものあるを希ふ。君それ之を賛せざるか。吾が靜思に得たるものはこれなり。好し靜思を去て更に衆と共に歡樂境に遊ばんか、綠處の暗柳紅處の明花、世間笑あり、涙あり、嗚呼滑稽の裡に藏するものはた何ぞ、君乞ふ笑涙の間に描くべき資料多きを記取せよ。

（三十二年三月）

滄浪亭

石壁苔文古。滄浪亭子幽。征衣催涕涙。
秋色滿蘇州。

（三十一年）

姑蘇城外

姑蘇城外幾江關。斷碣殘碑指顧間。
一路唯將懷弔感。范々秋草到寒山。

雙燕偶語

◎清人詩あり、書畫琴棋詩酒花。當年仰々他を離れず。而今七字都て更變す、柴米油鹽醬醋茶。人生の徑路が空より實に行き娯樂より利用となるはこんなものなり。されど柴米油鹽醬醋茶の利用を忽にせざる心をもて、所謂書畫琴棋詩酒花に對するの好尙を離れず、書畫琴棋詩酒花に對するの好尙を有してしかも柴米油鹽醬醋茶の利用を忽にせざらんこと其眞ならん。米鹽以下は肉の糧なればなり、詩書は精神の糧なればなり。

◎朝から晩まで味噌醬油米櫃の有無多寡に屈托して殆んど何事が人

生なるやに頓着無さは、蟻が塔を積み熊が軀に蜂蜜を塗る程の用意にて、肉の糧を作る上に於てはさることながら其は蟲も爲し得獸も獸し得ることわり。

◎予は足下の前にて今さら人間に就て彼此論ずるの阿呆らしさを悲む、されど予をして少時言を費さしめよ、肉を食つて美しといふ砂糖を嘗めて甘しといふ、それだけは恐らく動物も會得すべし、犬は牛肉に鼻をうごかし猫は鰹節を好む。牛肉に鼻をうごかし鰹節にちよつかい出す以上に、人間の價値は有りさうなり。

◎單に智術を盡して鬼神を欺くの化工發明を爲し得るが人生の價値か、非なり、梁上の鼠は卵を盜むに尾にて捲き運ぶの智術を有す、

豬に懸りし雀は從容身を垂れて地に落つるを竢ち逃れ去るの才覺を有す。

◎單に意力を費して勇往猛進事を行ひ志を遂ぐるが人生の價値か、非なり、仁田四郎の野猪は富士裾野より鎌倉まで疾風の如く一夜に奔馳し、齊の田單の火牛は猛進敵を衝いて奇功を奏せり、皆士を捲き石を飛ばして進むことを行ふ。

◎男女相愛し骨肉相親しみ子女を育し儕輩相交はるのみが人生の價値か、烏に反哺の義あり鳩に三枝の禮あり鴛鴦は夫婦仲よく袋鼠は子の保育をなし千匹猿は群を爲す。

◎然らば勞働は神聖なり勞働は宗教なり勞働は敬神なりとカーライ

ルの謂ふ所、その勞働に從つて三度の糧を食ひ官能を使用し、眠り醒め醉ひ而して死し而して土に埋まる。これ人生の價値か、また非なり。牛馬は荷を負ひ車を曳き正覺坊は酒を飲み山雀は舞踏をなし猩は畫寢す而して死し而して土にかへる。

◎遊び戯むるゝが人生の價値か、非なり。羊は牧場に遊び鷗は水に遊び蝶は野に戯むれ金魚は盆池に泳ぎ子子は下水に蠢く。

◎禽獸蟲魚草木總ての生物の通有性を數へ來りて一々に人間の具性より減じ去るべし、減じ去りて剩す所のものは即ち人生の價値なり。

◎剩す所のものは何ぞ、眼か鼻か口か手か耳か抑も腦か抑も猿より一本多しといふ毛髮か。

◎非なり。此等の似形に非ず、精神なり。

◎卽ち精神なり。結びて果と成るものは眞なり。茂りて榮ゆるものは善なり。開いて花と成るものは、美なり。

◎眞あり、卽ち哲理あり學術あり。善あり、則ち宗教あり倫理あり道德あり敎育あり。而して文學あり詩歌あり藝術あるは、美なるもの存すればなり。

◎植うるに時あり植ゑたるものを拔くに時あり、泣くに時あり笑ふに時あり悲むに時あり躍るに時あり。今は春風春水一時に來るの時なり、まさに理を說き道を論ずべきの時期に非ず。われは唯足下に對し、花を觀て美を知らんことを勸む、美を會せんことを望む、進

んで美を味はんことを欲す。

◎望月を指して饅頭に似たりといふ、食ふことを念へばなり。月に面して食を念ふは美を知るものの懐か。雪に對して寒しといふ、衣ることを念へばなり。雪を觀て衣を念ふは美を會するものゝ情か。非なり。月や雪や、衣食の外に限無き精神の糧を人に給す、此糧を懐ひ此糧を味ふは、即ち人に賦せられたる趣味なり、餘裕なり。

◎われは亂れたる社會が、此春の好時節に際し、花に對して趣味を會し、餘裕を知りて、徐ろに理と道と相俟つて人生の價値を維持する所以を了せんことを希ふ。

◎若し春に逢うて春の美を味はずして、花に對して花の神を認めざらんは、去つて春來らず花咲かざる土にかへるに如かず、唯春と花とに對する處置の分別如何と顧みるのみ。足下また此底の消息は知り難からじ。

（三十二年四月）

送天囚西村子俊之金陵（三十二年）

落○木○高○秋○感○若○何○
羈○心○萬○里○風○濤○壯○
寂○寞○英○雄○清○社○稷○
憶○君○烟○月○秦○淮○上○

故○人○長○路○向○西○過○
王○氣○千○年○興○廢○多○
蒼○涼○雲○物○漢○山○河○
半○夜○猶○聽○商○女○歌○

一家言

（二）大文學と人

大文學生出論に就ては數次文界の論議を煩はし今なほ問題として殘れる觀あるが、大文學は時代精神の統一を俟つて生ずるものか將た時代精神の統一を促す程の偉才に俟つべきかは、なほ英雄は時勢の兒かはた英雄出でゝ時勢を作興するかの問題と等しく此間に機微の消息間髪を容れざるものありて存す。佛のテーン英文學史が時勢境遇を偏重して個材の勢力を輕視したる缺點は後人の難ずる所、所詮人と時との契合が大文學を生出すべきものにして單に個人の偉才にのみ俟つべからずまた單に時代の勢力にのみも歸すべからず。

然しながら吾人の恒に信ずるは

大文學は強根より生ず

といふことなり。時勢は如何に文學に非なりとも境遇は如何に文學に逆なりとも、苟くも個人文學に從ふものにして大文學の生出を望む一向專念が根氣を凝らさんには少くとも比較的に大文學生出の功を成し得べし。事は忍耐にあり勉強に在りとは吾人が小學生以來知る所の格言なり、此陳套なる格言は眞に精進潔齋して實行に奉ずべき生る神體なり、其言陳りたればこそ格言は空しく木偶となり了りて人皆おのれが因襲失誤に會し其必要を悟るまでは頓着せざるなれ

大なる天才は至難の精勵者なり怠惰なる夢想者に非ず、天才を有するものは天才は狂癲者に非るを知る。天才は最小最微なる熟練の集量なるを知る。されば其企圖したる事は如何なる小處に在ても全力を注がざれば成功し難きものなるを知る、是吾人の管見ならず先哲の敎ふる所なり。

ミケーロ、アンゼロが彫像に從ひつゝありし時其友彼を呼びぬ彼應へず、時經て再び呼びぬ彼なほ其工に從ひて顧みず、友は彫像を熟視して曰く君は我が見し以來怠れりと、アンゼロ初て口を開き然らず、予は此點を修正しそを精刻せり此形を和らげ此筋肉を露はし此唇に一層の致を與へ此關節に多少の勢を加へたりと、其友曰く、然れど其れ等は皆些事に非ずや、アンゼロ曰く、然り些事なるべし、但だ其些事を集成して完全ならしむ、其完全は些事に非ず。アンゼロは美術の大天才なり。此の如くして美術家の崇拜敬仰する先哲となれり。

大鐘を一指に搖かしたるは楠多聞丸の傳記に視る所、精勵の果を示すなり、軒滴が石を穿つの現象は各人の家に見る所、精勵功を成すの理を表すなり。

山陽の日本外史は一生の根氣を盡したり、年を經ること二十餘年。馬琴の八犬傳は一生の根氣を集めたり、齡八十に至り目を盲して稿を其女に口述し而して其著を了せり。

吾人は此に根氣の勢力を爲ぶ、此に精勵の成功を悟る。

刻下の例に於て紅葉山人の『金色夜叉』は少くとも現時の大作なり、其經營慘澹能く精能く勵、三年に亘りて切々倦まず、少くとも我文界を彩色せるものは此作なり、子が硯友社の盟主以來の聲譽を保つもまた其精勵刻苦なり。

神來の想は偶然に非ず、必ず由來する所あり、神來の想を偶然に期するは怠惰者流の爲にして決して天才たる所以に非ず、天才必ず精勵強根に生じ刻苦力の集注に成る、既に天才生せば大文學の成らざるを憂へずして可ならむ。

吾人は大文學者出でよと渴仰する文界、特に青年文學家に向つて此の一語を告ぐるものなり、諸子の根氣強からば大文學は諸子より生るべきのみ。

(三)　浪華青年文士

浪華市民は、階級家系を重じ儀式慣例を重じ職業を重じ實行を重じ生計を重ず。勤勉にして忍耐なる市民なり。希望と目的とに邁往する市民なり。大阪の繁昌は唯此市民の美質が集注したる勢力の結果なり現象なり。

青年文士諸子は、此の如き市民の子弟なり。

美文學は趣味を育成す、趣味は思想の間道なり、思想は實行の道を指示す。

美文學は趣味を育成す、趣味はまた空想の門戸なり、空想は實行の道を沒す。

青年文士諸子は、此の如き美文學に指を染めたるなり。美文學の發達に熱心なるなり。

極端なる空想は、階級家系を輕じ、儀式慣例を無視し職業を輕じ竟に生計を度外に附するに至る。

此の如くならば、空想の產場たる美文學は、浪華市民の美質を破却すべし、惡魔なり毒藥なり、接すべからず服すべからず。

青年文士諸子は、此の如き惡魔に接し毒藥を服せんとするなり。

醇正なる思想は、勤勉忍耐すべき人道の大義を明にす、希望と目的との標準を示す、階級家系儀式慣例職業生計の如何にして重ずべきか如何に人生に在て此等を處理すべきかの徑路を悟らしむ。

思想は實行の眼睛なり、實行の生命なり。

諸子は即ちまた實行の眼睛を點じ實行の生命を得むとするなり。

實行力に富み生計を重ずる浪華市民は、諸子が發達を期しつゝある美文學を喜ばず、職業生計の實利に害ありとすればなり。

美文學が市民の職業生計の實利に益あらば如何、華浪市民は必ず喜んで、美文學を迎ふべし。

諸子は浪華市民の子弟なり。

諸子は此の如き思念を有する市民の間に美文學の發達を期せんとす

是に於て諸子と諸子の父兄との思念上に調和の必要生ず。那邊に於て之を調和すべきか。

當に唯最も爲し易き眼前口頭よりすべし。眼前口頭は、諸子の坐側なり臥床なり居室なり。即ち家庭は諸子が文學を發達せしむる好施設場なり。

諸子は家庭をして文學の利ある所以を事實に於て知らしめよ、趣味は家庭平和快樂の泉なることを知らしめよ。之と同時に職業生計の實利に眞實なる市民が作りたる諸子家庭の事情は、諸子をして趣味の過熟によりて陷るべき空想の害を避け得て醇正に適當に文學發達の基本たるべし。

箇々の家庭に知られざる文學は、到底社會に發達するものに非ず。

（三十二年四月）

(三)　詩人ホウソーンに就て

米國の詩人ナサニエル、ホウソーンの評論、佐藤迷羊子の手にて遠からず世に公にせらるべしと傳ふ、此異彩ある文豪が現時の我文界に紹介せらるゝは最も喜ぶべし、吾人は一日も早く仔細なる評論と眞摯なる紹介の出でむことを望むや切なり。

千八百四年七月四日米國サレムに生れ、千八百六十四年五月十九日ニューハムプシヤーなるプリマウスに世を去りたる此文豪の墓は、コンコルドの塋域に在り、コンコルドの聖人エマーソンの墓に近し。

實見者の言に據れば、一片の墓碣單にホウソーンの字を刻し石身毀損の憂あるが爲に柵をもて圍みありといふ、蓋し敬仰追崇の人其墓碣の石片を缺き去るに依るなり、文豪の述作が如何に米人に感化を與へしかは死してなほ敬仰の墓碣に及ぶものあるを視て、推想すべし。

ホウソーンは常に『人の靈魂の神祕なる生活』を其詩題となして之を描くを歸趣となせり、彼の萬有に對する觀念は、無形は眞實と成り有形は唯單に其影なるか如く見なしたりしなり。其述作を見て時に彼の殆ど此世間の外に生活し居るの觀あるは是が爲なり。エマーソンが『ホウソーンの作は恐るべき奇怪なる陰慘なるものなり更に喜ばしき所無し此はユーゴーも同樣なり、人は斯く書くまじきものなり』と言へるはその樂天主義もて物の表點物の明處のみ觀る彼の觀察にてはさるべきとなるが如何に深刻なるかを解明す。ラスロップが彼をセキスピーア、ゲーテの貢獻せし外に生面を開きたりと讃美せしもまた此點に存す。彼は眞宰の面を蔽ふ所の罪惡の成長を嘆じ、罪惡の覆紗を除いて造化の眞面目を人に示さんと思へり。高尚なる意義に於て彼は未だ曾て韻律の句を作らずして眞箇の詩人なり、其友ロングフエローが『彼は詩人なり』といひしは千古不磨の評として強き意義を有す。

此文豪の我文界に識られしは今日に初りしに非ず、思軒居士の譯に

『用達會社』外數種あり（今記憶を逸す）國民新聞に松居松葉譯『巨人石』湖處子譯『漁翁』『老將軍』等數種あり最も早きは女學雜誌上に『ダビッド、スオン』『幻想』等なりしと覺ゆ、近くは德田秋聲が少年文集に揭げたる『泉に對する觀念』、此他新聞日本紙上に多少の評論的紹介あり、要するに大抵『ツワイス、トールド、テールス』『モツセス、フロム、オールドマンス』等の雜著中の小品に過ぎざれど、兎に角諸文士の手に依て冥々の間にホウソーンの詩想は多少我文壇にほのめかされたるなり、而て一世の傑作『スカーレット、レター』の梗概の如きはなほ未だ示されざるなり。

吾人は曾て深刻小說の歡迎せられたる時、ユーゴーの獨り嘖々の名あるを聞きてホウソーンのその名をいふもの無きを怪しみたり、今に於て人の之をいふものあるを觀て、空谷跫音の感あり、其何人の評論に出づるに關せず、此文豪の述作の紹介が我文界を裨益すべきや蓋し大、吾人また此文豪を讀者と共に研究せんと欲す。

（三十二年六月）

（四）青年文士の思想

◎多數の青年文士は罵ることを知れども考覈することを知らず、評することを知れども研究することを知らず、議することを知れども行ふことを知らず、聽くことを知れども學ぶことを知らず、眼を用ひざることを知らず、聽くことを知れども學ぶことを知らず、眼を用ひざるなり、情を動かせども識を有せざるなり、新刊の書日

に多くして買ふものあれども、繙くもの少く、繙くものはあれども讀むもの鮮し。

彼等は苦言痛語の文を見て之を快といふ、熱心誠意の文を見て之を快といふ、冷罵嘲笑の文を見て之を快といふ、之に敎ふれば之を論じ之を說けば之を評す、說敎を快興の爲に聽き哲理を快興の爲に聽く、一切の事之を快感の適否に取捨す、其機關雜誌に必ず時文の評論を載せて考へず究めず學ばず讀まざる彼等の感情（思想といはず）を列記するもまた研鑽に非ずして快感の爲なり。

◎東京獨立雜誌が青年社會に歡ばるゝは、其苦言痛語に聽かん爲に非ず、之を快とすればなり、卽ち敬意を以て迎へらるゝに非ずして

快感の供給者として歡ばるゝなり、內村鑑三氏の說論は青年社會の感化力たる能ずして快興の供給具、談柄たるに過ぎざるなり。彼等に在ては、カーライルの熱誠は、噴火山の遠影なり、バイロンの情熱は、血戰場の機境なり、バークの論說も、グラッドストーンの演說も、彼等に在て考覈を警醒を發奮を思索を曾て供給する能はず、唯快興として見らる。偉大なる思想敎訓に對すること、猶片々たる市井匹夫匹婦の口舌を寫したる讀物を讀むと一樣なる眼を以てするなり。

◎彼等は『時』の觀念無し、眼前に現はれたるものを以て是非好惡す、故に歷史の思想無し、將來の準備を忘る。秋來れば哀と感ず、冬來

れば寒しと感ず、夜來れば暗しと感ず、雨來れば鬱を感ず、竟に夜の後、雨の後、秋冬の後を考覆思量せざるなり。

◎先進作家に傑作なき時、之を青年文士に俟つの時代に於て、彼等の思想は淺薄此の如し、無分別此の如し、現在主義此の如し、偉大なる思想、深厚なる修養、之を彼等に求むるは頗る難く、幾多の歳月を俟たざるべからず。

◎千山落木蕭々として下る、獨り梧桐一葉の秋のみに非ず、青年文士は漸く感興の探討を止めて思索研究の場に入るべし警醒の鐘を聽くべし。然らずんば彼等の生み出す文學は竟に國を亡さん。

（三十二年）

（五）青年文士と社會

◎今の文學界に於て其想の才の筆の廢りて惜むべきもの、われに二人あり、山田美妙、矢崎嵯峨の舍及宮崎湖處子なり。

◎『武藏野』に名を出し、國民之友紙上裸蝴蝶に善美合一の可否論を文壇に騷がし日本韻文論を著し『都の花』に聲名を博し才筆縱橫たりしは山田美妙、此人の隱れてまた出でず沈みてまた浮かざるは、社會が其過を忠告せずして之を嚴責し攻擊したるに因る。

◎『初戀』に名を出し『流轉』に地を得て一時文壇に歡迎せられたるは矢崎嵯峨の舍、此人孤影煢々狷介世と容れず性の然らしむる所とはいへはた其佳作といふものゝ飜案に成れるありとはいへ、其文壇に

挫折したるは交友の相砥礪し援助するなきに因る。

◎『歸省』は今になほ青年の間に閱讀せらる眞情流露自から人の隱退して專ら籍を宗教に入れたるはまた多く或一派の社會の冷嘲攻擊に因れりしなり。

一編の記實文、此著の傳ふべきを示す、著者は即ち湖處子なり、此

◎勿論、彼等各自家に社會と優劣敵せず畢竟文界に立つに不利なる弱點ありて、隱淪の主因をなせしにせよ、吾人は一面に社會が此等秀才をして精神的中折の境に至らしめたる過失を認めんと欲す。

◎美妙は才に煩らひて品行に過ち、嵯峨の舍は情想に煩らひて世交を解せざるに過ち、湖處子は識深うして量狹、手及ばずして目高き

に過ちたるなり。

◎彼等を過譽したる社會は、やがて彼等を冷遇せり、彼等を歡迎したる社會は、やがて彼等を棄去せり、彼等は蜂蜜の甘き譽を社會より受けて、また直に其針に螫されたるなり。

◎社會の罪か、個人の罪か、優勝劣敗はまた文界を饒さずとはいへ、文界人無きの時社會なほ此等秀才の發達成功を庇護し文學の貢獻に多を致さしむべき責任のありしなり。

◎籍を文界に置かむもの、特に新進の文士は、先輩の失敗に鑒みて盈滿に過つ莫きを期し、讀書社會は文士を遇することまた宜しく其子を敎育するが如くして夭折早熟なからしむべし。

◎個人と社會との關鎖如何は個人の運命に至大の影響を及ぼすと同時に社會の發達に深き關係を有す、思想界文學界は殊に然り。

◎青年が文學に熱中し、其機關雜誌を亂設するの際は、青年文士は自から其將來の運命に對して最も警戒すべき危險の時なりとす。

◎偶〻歡迎せられて『歸省』の著者となり『流轉』の著者となり、『武藏野』の著者となることあらば豈に惜むべからずや。

◎若し斯の如き現象にして幾度も我文學界に繰返さるゝならば、或は其間に出づべき大文學の芽もまた中折するなきを保せざればなり

（三十二年九月）

（六）文學の平凡化と氣慨の缺乏

文學は時代の精神に觸接すべし文學を社會の形勢に結合すべしとは前年來の輿論にして、吾人も亦文學の社會的發達の必要なる見地よりして之を贊したり。

作家の攻擊せられたるも此點に在り、文學の非難されたるも此點に在り。同時に趣味の普及の唱道せられたるも亦此點より生じたるなり。

趣味の普及はいふまでも無く社會の要求なり、社會的同情、人道の發達は多く之より生ぜればなり。但だ社會に趣味を普及せしめむが爲に、之が標準を低下して社會の意向に迎合するは、やがて文學を

平凡化せしむるものなり。

趣味の普及は喜ぶべし、文學の平凡化は喜ぶべからざ。

平凡は無能なり、無能は死なり、此の如き文學は即ち死するなり、

瓦全ば健康に非ざ。木乃伊は人間に非ざ。

蓋し趣味は文學を組織する要素にこそあれ、文學の本體には非ざ、

趣味の普及は文學の應用にこそ俟て、文學は趣味の普及の犧牲に供

すべきものに非ざ。

故に所謂時代に接せよ若しくは社會に觸れよといふ所以は、大文學

を生出して時代の活動を鼓吹し人生の福祉を來さしむる點に存して

趣味の普及は其大目的に非るなり。

美術を應用美術と誤ることが、美術の發達を阻害すると同く、文學

を講談、落語、所謂芝居、娯樂等と同く誤解するは、亦文學の發達

を阻害す。

吾人は今に於て我文學を平凡化する傾向ありと謂はざ、平凡化せん

とする傾向を警むるなり。

道具立扮裝の實ならむことにのみ傾く演劇は、やがて演劇の主腦を

外にして其内容に視るべき所なく卽ち平凡たるべし。風俗習慣動作

の實ならむことにのみ作意を注げる所謂寫眞的小說は、やがて文學

の精神を外にして其内容に觀るべき所なく卽ち平凡たる風俗談たる

べし。

吾人は小說に寫實的傾向ありといふ論者の說に贊すると同時に、其寫實小說の誤つて文學を平凡化することなきを警むるなり。

角を矯めて牛を殺すといへり、文學の社會に觸れざるを改めむとして、文學を社會の低下したる趣味に迎合するは即ち文學の弊を矯めむとして之を殺すなり。

人間に觸れざる神を說くときに、宗教は世に疎せらるべし、人生に觸れざる理を論ずるときに哲學は世に知られざるべし、人生に觸れざる事情を叙するときに小說詩歌は世に排せらるべし。然れども何の時、何の世にも文學宗教哲學は必要なり。空理なり空論なり空想なりと疎ぜらるゝ宗教なり哲學なり文學なりは、その未熟なるを證

すると同時に又之を疎ずる社會の不完全なるを證す。此理に於て從來社會が文學を難じたるは文學の未熟なる所多きに相違無き事實の認められるゝと同時に又社會の文學に對する智識の幼稚を證するを知らざるべからず。

然るに文學界は社會の攻撃の爲に、趣味の普及若しくは娯樂の供給といふが如き、社會的功利の爲に文學の本領をも併せて犧牲に供せんとすることあらば即ち文學界自身の文學を知らざるなり。再び小說に寫實的傾向ありといふ、吾人が論者と同じく之を認むると共に其寫實の邪路に陷らざるむことを警告するは是が爲なり。

寫實的傾向は、詩人としてボープを出すべし、小說家として形式上

のゾラを出すべし、ポープの彩筆あるも、ゾラの本領無き形式的寫實の製作は或は是より文學をして講談落語と撰ぶなき平凡たらしめむとはせざる乎。

氣慨の勃興是に於て要あり。

氣慨は生命なり、希望此に生じ、理想此に發す。カーライルなり、ミルトンなり、ユーゴーなり、吾人は其著作の生命あり希望あり理想ある所の氣慨に動く。此氣慨無くして生せる寫實的文學は、やがて平凡化せんとする文學たらざること稀なり。吾人の今に於て之をいふもの杞憂に屬せむことを望む。

（三十三年一月）

浩々歌似友

（三十二年）

奈此奇愁万斛何。　無聊恰喜遇君過。
孤懐客裡索居久。　清話燈前逸興多。
夜○靜○絃○聲○來○草○閣○。　秋○深○雁○影○度○星○河○。
詩媒難欠杯中物。　還入醺酣浩々歌。

興亡と詩人

花の散るを哀れむ、有限の理、無限の情を制すればなり。人の死するを悼む、無常の感、永遠の念に逆へばなり。國の亡ぶるを悲しむ、優勝劣敗の理法は人道信義の意を滅すればなり。

終方、人寰に此憂あり。是に於て信仰の要は宗教を生み、理性の要は哲學を生み、同情の要は詩を生ず、宗教は憂の外に安せしむ、哲學は憂の上に求めしむ、而して憂の中に慰藉を與ふるものは即ち詩に非ずや。

故に詩人が同情は、花の開落より人の榮枯より延いて國の興亡に及ぶ。吾といふもの、存在を解きたるデカートの理性に於けるが如く、人道を叫破して福音を祖述したるルーテルの信仰に於けるが如く、ゲーテが詩人としての同情は、フオーストを作り人生の運命を描きたり。彼等の遺したる思想は偉大の化を後昆に及ぼせしに非ずや。」

此意に於て吾人は現今詩人の同情が、花鳥風月若しくは鰥寡孤獨の憐むべきもの、上にのみ止まらずして、延いて人類民族の消長、國家の興亡に及ぶべく發展せんことを望む。

自然の理法は、花をして散らしめざるを得ざらしめ、人をして死せしめざるを得ざらしめ、即ち又國をして亡びざるを得ざらしむ、天なればなり。此に眞と善とを說與して其悲を節せしむべし然ども其

憂を慰め得む者は唯詩を外にして何物ぞ。殊更に吾人がしかく言を爲すものは何ぞや、南亞の戰爭に於ける杜國の興亡に就てなり、大頭領クルーゲルの心事に就てなり、將軍クロンジュの遷謫に就てなり。

杜國の興亡は優勝劣敗の理法之を如何ともすべからず之を救はんとすれば又優勝劣敗の理法に從はざるべからず。縱貫鐵道を完成して人類交通の幸福を世界に貢獻せんと欲する理由の爲に、杜國は終に獨立を失はんとす、風酸雪虐の經營を以て一國を建立したるクルーゲルの功業は、一敗地に塗れて堙滅せんとす、國命に率由して貔貅に將とし其職分を盡し慶英兵の銳鋒を挫きたるクロンジュは絕域の孤島に謫せられんとす。彼等は今皆一國興亡の犧牲となりつゝある。

詩人は此に同情を有せずや、此に詩を認めずや。之を杜國の建國史に視よ、之を英杜戰爭の因由に視よ、之を杜將の謫せられんとするセントヘレナ孤島の過去に聯想せよ。萬斛同情の淚、此に灑がすして何にか灑がん、詠嘆懷往の詩、此に歌はずして何にか歌はん。

起て！、壯き詩人。

新體詩は、材料の貧乏を以て難せらるゝに非ずや規摸の狹少を以て誹らるゝに非ずや。今は大なる規摸を以て大なる思想を歌ふべき好詩料の生ずるを視るに苶ずや。

自然の福音は歌ふべし、戀愛の美觀は歌ふべし、勞働の辛苦は詠ずべし、然れども時と處と事と人との關係が、最も悲壯に最も崇高に最も沈痛なる一國の興亡、將士の運命に向て寄與すべき同情の心聲に如くものある乎。

人生相互の葛藤の果に悲哀あり悲壯あり崇高あり情泉一掬して詩人は詩を成す。二國の戰爭は、國民ふて一國の人生相互の葛藤なり、幾多人生の悲哀、悲壯、崇高の美は、此に存す。

日清戰役は丁將軍の最後に悲壯の美を視たるも未だ國の興亡に關せざりき、希土の戰爭は利害の衝突に局し些の興亡の機微に抵らず、米西若しくは比律賓に於ける戰爭もまた功名得失の埒外に出でざりしなり、杜國に在ては弱者對强者の發憤なり一國興亡の葛藤にして其果は大なる犧牲を生ぜんとす。

吾人は世にキップリングの如く帝國主義を鼓吹し謳歌するの詩人あるを歎迎すると同時に亦痛烈なる悲壯なる人道詩人の生出を今日に要せんと欲す、セントヘレナは、那翁の流謫せられし孤島なり、喜望峰はクルーゲルの産聲を擧げし故郷なり、雲海茫々、鵬沒し鯨躍る處、水天西に魂を馳せ、尋ねて今古英雄の心蹟に至らば、詩人の感懷將た奈何。

（三十三年三月）

雲濤

（一）

あながち煩らはしとも思はざりし日頃の務の、こゝ二月ばかりは羈絆も責任も無くなりしに、骨も輕く肉も輕く、さながら遠き路に負ひし重荷をおろせし心地し、浮世は何の白雲のふわ〳〵、氣も心も山と水とに行方をまかせ、少時別れむ煉瓦どの馬車どの白粉どの塵埃どの。

翠の森に蟬鳴きて里の童が蜻蛉釣るところ、馬子歌、鈴の音に和して、野店山橋馬蹄を送る小川の流れさゝやくところ、鷄談犬夢靜に茅葺の家根聳ゆるところ、青田萬頃浪の畝々風にゆらぎ度るところ、山の深きに上りては白雲の衣裾あり、水の遠きに浮びては輕舟の家居あり、起きても臥ても事繁き都の巷にひきかへて、宇宙は樂の大塊、呑氣の大廣間、こゝ二月、自由の天地に逍遙して嘯き傲らむ身の上、脚の向く方にまかせながら、新橋にて買ひし切符は沼津なりき。

囊中の奴に相談して奢つたとは申さぢ、天然のしつらへたまへる田子の浦邊の松原つゞき、寢たる姿の伊豆山と虛に橋架けし三保の岬角との海間より、吹き來る清涼萬斛の沖津汐風、億萬兩積んだとて買はれぬ天賦の富を懷にして、臥ては雲山の夢穩かに、起きては逍

遥の興に耽けられさへすれば、美人も要らぬ酒も要らぬ。赤痢でもなくマラリヤでもなく、ペストでもなき彼の獵官の熱に浮かされて下宿の二階に婢を驚かせし書生笑ふに堪へたり、宇宙と人生との關鎖がわからぬとて哲學を研究し三年の課程未だ終らずして肺病で五十年の命を縮めた男笑ふに堪へたり、政黨内閣創立者の譽を擔ふは乃公のみ今古一人誰是我、醉耄になつた支那の國でも漫遊しやかて歸り來て第二の政黨内閣を作らうとビスやクラッドに感化された滿腔功名骨に徹せる好色侯爵笑ふに堪へたり、戀に泣き戀に痩せ戀に窶れはては北邙一片の煙となつて土にかへり草根木皮の肥料となる抒情詩人笑ふに堪へたり、楊雄の箏丸の垢でも嘗めたほどなる知恵

をしぼつて朱門に膝つく腰巾着の漢詩人笑ふに堪たり、文士の閲歴などと言て動物園の熊猪猿虎四不象等も同樣鐵格子の檻の裡に幽められし白粉塗つて臙脂點けてやさしい聲する化物と寢て、何時か魂は御留守となりおのれ何かの材料となる小説家笑ふに堪へたり、生死事大無常迅速、什麽是我本心本性、口には唱偈、行道坐禪の行ひすまして或夜ひそかにまち人を江一格子の蘭燈下に音なふ禪師笑ふに堪へたり、ひよこ〳〵稽頭再拜し、巧言令色、人後に隨さて濡手に粟なる僥倖を得むとする輕薄才子笑ふに堪へたり、ジヤンボン、アーメン、カシコミ〳〵、南無阿彌陀佛、妙法蓮華經、銅鑼オルガン鐘大皷、こんな聲に棺桶の中に埋めらるゝは明日とも知らぬ一生

懸命、黄金を命と頼む守銭奴笑ふに堪へたり。それ執着すれば迷となる盲となる涙となる。黄金に戀に功名に富貴に、かりにも慾にあくがるゝもの總てこの一刹那笑ふに堪へたり、あはれ世塵渾濁に出頭没頭あつぷすつぷ蠢めき苦しみ自ら知らぬ輩皆笑ふに堪へたり、

口を開ひて笑ふに遇ひ難しとは詩人の愚痴なりや、笑ひ傲つて浴後の快慵、風に吹かれて身を凭たせたる竹欄干、仰げば月あり天浩渺、望めば海あり滄溟萬里、杳々として帆白く浪青し。笑ふも罵るも嘲るも浮世の法律は旅舎八疊の一室に及ばず、言論牽制の警察も獨語にまでは振まはず、咎め人の無き自由郷、隣は松風、對面は海。昨日こゝに麥藁帽子と蝙蝠傘、手輕き革嚢の行李下したる一介の壯士、

これまた漁翁蜑女にからかはれさうなる男なり。

（三）

無事こゝに靜坐すれば、一日はなほ両日の如し、若し七十年を生くれば、便ちこれ百四十年、さも閑であつたらしい古人の語も、限ありながらに累なきこの境界には、言ひ得たる心地して、身の丈五尺四寸、躰量十六貫、まづは人並より小さからぬ軀をのんびりと臥たり起きたり書を見たり浴みたり空想したりする外には、海の水が濁らうが清まうが世が騒がしからうが、頓着はなき胸中の天下太平、樂しまむために生きて居るからには、働いた報酬にこれだけの刹那の閑生涯。萬斛の憂あるものにても、自然の風光に對すれば、苦も

忘れて無我の興をも得らるゝを、ましてやこの無事の心にてかの山、雲、海に對すれは、天地は恒に新しく恒に鮮やかに、朝ぼらけ望の光の輝く心地するなり。

今日も朝から宿をたち出でゝ、磯の松風音すみたる林の路を徐かに逍遥ひ、唯ある松の根方に翠葉のさながら天蓋となりて日をさゝゑたる下に踞して、ふりさけ見れば、長き汀はうねり〳〵て西に延ひ、曲浦遥かに盡きたる處、淡墨をそゝと點けたらむ隈は、遠州の御前崎、視線を沖邊の水平線にたどらせて左の方をながむれば、その名も寢釋迦の山の姿、朝の烟に浴しつゝ翠の衣を纏ひたるその裙長く沖邊に落ちて、お早うと言さうな大瀬の岬角その間に意ありげに浮べる

眞帆片帆、往くとも見ねぞ來るとも見ねぞながら、何時しか一つは二つとなり、三つありしは一つとなり、或は影無くなりゆくわり、汀杳々に寸長の人、豆樣の舟、磯に下りたり上りたり。きら〳〵として、沙上にもゆる陽炎の中に浮繪の如く眼に映る好風光。波濤は岸邊に寄せてはかへる、眞砂にさゝやく小波の松吹く風に和したるは、世の外の樂の聲なり。

やをら衣を脱ぎ去てゝ、磯に下りたち、沙の枕に波の床、遠淺の氣樂さに、潮を浴びて打臥せば、天の紺碧深くも浩く、水の青藍遠くもはるかに、天と水との搖籃に靜かに載せられ、海の子となりて眠たげなる。

潮に入ては波と戯むれ、潮を出でゝは沙上の空想はてはまた松の小陰に坐して、慾もなく徳もなく天と水とを眺矚めたる。右方の峯の長く高くうねりたる上に、山又山の峰の雲はつこりと出で來り、譬へば白き衣白き髪白き貌、老人の面影あり、徐々と虚を度りて、嶺を離れむとする程に、衣の袖はばつとちぎれ、袖の陰よりぬつとばかり現はれし大入道、鈍栗眼のわりそうな形なり、入道雲は老人に挨拶する如く後につきたるその側より、被衣にかくす顔おもはゆげに女龍の、忍びやかに出で來れば、入道雲は驚き崩れて、平伏すると見る間に消ねしその跡には、頭かゝへし猩々の圓くなりたるが、きよろ〳〵眼に口を開ひて大洋を惶々瞰視す如くなり、やがて老人

入道女龍、猩々逡巡むやうに消ねゆきて、むく〳〵と一齊に起ちたる雲、虎嘯きたる獅子吼ねたる龍の蟠りたる兎の躍りたる豺狼の噛みつきたる幾群の怪獣と化り粛々として天に上らむとす、折しも日の光、上天の雲の障子に支ねられて、影の交叉たるが、陰れ見はれするまゝに、虎も獅子も龍も兎も豺狼も一群急に色めきたち、行きがてなるが少し曇れる一團の塊となつたるもの、さらに、亂れて散つて開ひて延びて呼ぶかとばかり笑ふ形容に薄くなつて、青天淡く色褪せて雲か天かを見へ分かぬまで刷きたるやうに流れたり。

おもしろき雲の行動のその裡に、わが神浮きつ沈みつ雲に入て搖曳きわたり、そよふく松韻、忍へる岸波、もろともに調律を合せて天

樂遠く奏でられたるが、その耳やがて聾いたるか、夢の神朧々としてたち添ひたるか、五躰綿の如く慵くなつて、聲聞通はぜ、物色見へず、何れの國に行くものぞ、やさしい人の柔かい腕に抱かれて否とも言はぬわが心の合點ゆかぬなりゆくは、睡くなりしか。

十數歩はなれし彼方の松陰より、南洋あたりの土蠻もかくやと見るばかり銅色の赤裸々、一群の兒童等、

「やい〳〵彼處に人が寐て居らわ」

語りつゝ珍らしさうにつか〳〵と寄り來るを此方は知らぜ。

（三）

海神の懐から出て來たやうに、松の小陰に現はれし五個の兒童、半ば睡れる人の傍近く集まつて、物珍らしく眺めて立てり。

潮に洗つて日に晒し、沙に磨いた躰軀、きらり光るほどの澁色の皮厚く、骨逞しく肉硬さうに、見るから岩狀ながら、磯山松の自然の風に吹かれても浮世の業風なほ未だ襲はざる幼き人の子の、さすがに柔かに滑かに肥肉なる、撫でゝも見たき兒童の肌膚つき、澁こそ塗れ瑕疵なく美しき温玉の如し。

うち傾いたる壯漢の帽子、投げだしたやうな毛脚、横たへた蝙蝠傘の握り太なるを凝視し一個が、圓き黒眸を瞠つて、

「あの傘は仕込杖だ、太いじやないか」

「見たか、おめら」

「いんにや、見ないけんど、此あいだ裏の小父さんの持てたのうと同一だあもの」、

「同一なもんか、ありやあ蝙蝠傘だ」、

「いんにや仕込杖で、なかに刀がはいつて居らあ、そりやあ鋭利るぞ、鎌よりかよつぽどきれるぞ」、

「じやあ、抜いて見ろい」、

「怒るよ、叱られらあ」、

「寝て居らあ」、

など低語いたるが、十一二ばかりの中に年長なるが、

「それよか、おらあ入らう」と聲かけて跳び出した後に四人も一樣に

磯に下りて、ざんぶと飛び込めば、海はさながらよく來たと言はぬばかり、潮や波や、かれ等の頬を嘗め腹を撫で頭を擁へ脚を抱き、追ひつ追はれつ、弄ひ弄はれ、游ぶに任せたるが、頭大きくて海坊主のやうな一個は、水に拾ひし木片を把て、眞沙の上に何やら描き、

「やい〳〵、長公來て見ないか」、

呼ばれて長公は、兩手に顔の潮滴を一撫して近づき、

「何んだ」といへば、海坊主は四角な線條を沙上に描き、線と線との距離を指し、

「此點から此處まで跳越べるか」、

「うん、飛ぶつてさ」、

長公は直に飛んで試る、海坊主も飛んで試る、他の三人も潮垂れのまゝ出で來て飛ぶ。かれらもまた波と風との自然の調に浮かれて、さる舞踏を試むに似たり。

かくて次の遊戯は沙上の落書いの字のゝ字山の字川の字、坊主の頭、木偶の首、消ては現はれ、現はれては消ゆ、無盡藏の大草紙、思ふまゝに書いたり消したり、亂暴狼藉、はては沙合戰の黑坊、眞黑々の餡ころのやうなつてまたも潮に飛び込み海さながら母の如く塗れし汚れの痕洗ひ去る。言ひあはせねど疲れを覺ゑ、五人はやがてもとの松陰に歸りゆきぬ。

沙上の落書、誰が讀み得る文字なる、小波こゝもとに忍びよりて、

そと洗ひ去る跡に影なし、海はなほ兒等の手の跡をさへ愛みて取りしか。

兒等は去りぬ、波と風とは私語く如き調をかへぬ海は醒めたる人の如く鮮かに、水波靜かに船を浮べり、雲ある天と山々を浸せり、半ば眠れる八疊間の國王は、なほ松の根方に身をかたよせしまゝ夢路にある如し。

（四）

數町隔てし旅舍附の浴場に、五六の人影見ゆるばかり、眼前の磯邊には人の氣絶えて波にゆらるゝ鷗の二羽三羽、浮寢の夢のさめがほなり。

松林の端、巷に沿うて一條の間道あり、綠陰の日を蔽ふために、日中には往來あれど、それも良久は寂然と人影なし、夢想か幻相か栩々然とわれにもわらぬ横はれる壯漢は、なほ帽子だに搖かさぬ。折々夢の使者の如く蜻蜓の影深々たるが羽衣輕く傍にゆきかふが、なか〳〵に靜かさを一層增すのみ。

松風波聲のそれならぬ翠の葉を透して「坊やは好い子だねんねしな、この子の可愛さ限ない、山で木の數茅の數、天へ昇つて星の數、こゝは沼津の千本松、千本松原、小松原、松葉の數よりまだ可愛い。」節はをかしく鄙めけど、自然に聞かるべき音調おもしろく、十三四の子守女三兩人唄ひつれし背には孰れも嬰兒負ひたるが、松より松

の小陰路を彼より此に過ぎゆきぬ。

額の皺に年の老波たゝみこみ、杖を力にとぼ〳〵歩みの漁翁、戀も欲も功名も浪の花に一度は唉かせし身の、今は枯木寒岩、潮に洗ひ盡して塵垢跡なき心の、安らけき面影ゆかしく、用ありそうに眞沙路を辿りゆきぬ。

珠なす汗のしと〳〵濡れし身のかけ聲いさましく、今漁れたばかりらしきめじかを擔ぎ、瀧車の時刻におくれじと利に急き走る若ものあり。

未明にゆきし青物市の歸るさ、家路は馬の踣に任せておのれは鞍にこくり〳〵し馬子ののどかに行くもあり。

幾らの間隙をおきては、ちらりほらり路に往き來う人影、老幼逸勞人毎に樣態異にせる運命の行方は何處、おのれは曾て知らぬがほな人々ぞ、ゆきてはかへり、かへりては往くとなはその磯邊にうちよする波の去來に宛如たる。

また一人松の小陰路此方に近くものあり、中形の單衣、繻子の帶、深ばり傘を傾むけ唐天の緒すげたる疊附に沙踏みこみて來かゝりしが、端なく壯漢の依りし松陰を過ぐる時、ふと眼を閉ぢたるかれの顏に眼をとゞめ、傘をかざして踟躕ひしその淸き眉に顰あり。年の頃廿四五、肉つき尋常ながら何處かに憂にこけし風丰ありて眼じりには力味ありながら稍ゆるめり。やがては寄りそうて搖り起さむ

とも見ゆる風情なりしが、頭をかたげて顧みがちに三四武行き過ぎ、

「よく似た人もあるが、どうも見たやうな……彼人じやあないか知らむ」。

女は獨語ちながらまた樹陰に入り、少時は沙をふむ音かすかに聞えわたりぬ。

壯漢は、この時初めて眼をひらき、大欠伸一つして起ちあがりぬ、ありしとはすべて知らぬ顏に、おのれの空想に滿足せるか、海天萬斛の淸涼風、わが懷に藏めたりと言はまほしく誇りかに、八疊の國を置きたる旅舘を指して濶步し去りぬ、依然なる風と波との調を後に雲と山との風光を後に。

（五）

静浦、戸田の規模はなけれど、廉いのと便利のとで、貴族的ならぬ人の好遊浴場、近頃建ちし千本松原の聽濤樓と、新しいをよろこぶ人情に、昨日今日繁昌して、十幾箇ある室數に游客滿ちたり、樓の名うつたる衡門を入て庭の立樹、敷石の様から柱も疊も新しく清きは、見るから心ゆく家の搆なり。

下座敷に折めぐらせる廊架に立ちて低語く樓女、衣裝に赤いものは未だ除れぬ孰れも十七八、

「此間の話のは彼女かへ」

「さうだつさ、一寸美い容貌ね、」

「さう、先に居たおさんさんよりか、色が白いだけ更好やうだわ、」

「だが、少し愛嬌の無い顏ね、」

「さうでもない……前に妾をして居たんだてじやないか、旦那が他の女に狂いだしたので暇をとつて此へ來るとになつたんだつさ」

「そう？」

と言つて空を視た女の顏は、玉の輿でも見たやうな眸采をする、

「以前は何だらう？、本町に居たんじやないか、」

「本町つて娼妓かへ、」

「孰ちだか知らないけど、」

「娼妓でも藝妓でもない、やつぱりお酌に居たのさ」

「では私なども好いお客がつくと好いのね、」
「そりやあ、おまへさん腕次第だわ、」
と言つて思ひ出したらしく、
「腕次第つて、二階の書生さんは腕相撲や何んかで喧しくつて仕様がない、昨夜も八疊のむつつりさんが、叱言を言つて居たのよ、」
「彼の客はお給仕をしてもてれていけないよ、坐なりに何か言うと、うんさうかだつて位しか言はないの、その癖女の様子なんかじろじろ凝視めたり、何だか變ちきね、どうしてもむつつりさんなんだ、男ぶりは立派なんだけれど、」
「おまへ、惚れちやいけないよ、」

「馬鹿にして居るよ、」
此時二階にて手が鳴る、女中二人は行かむとして身を動かす時、店の方でさゝやくした返辭と共に二人の噂にのぼつた彼女が階段に昇りかけて、此方を見て、
「ようござんすよ、」
と順良に昇りきつて、東側の南面の坐敷に向く、少し何處であつたかと迷つたやうなりしが、やがてかの空想家の八疊室の闥に小腰になつて、
「お呼びになりましたか、」
と言ひつゝ見た顏は、つい今朝濱邊に眠り居たその人の、雙眼明に

覺ゆれば、はつとばかり顏の色もかはるほど、「おや」と驚く聲音の口頭まで出で來しをわづかに抑へて、客の言葉をまちながら俯しめになりぬ。

彼の壯漢は、何心無く、

「氷を霰にして持て來てくれ、砂糖は要らん、」

漆の如き鬚の美しきを捻て、返辭せる女といと顏見わはせたるが、その眉は動き眼はすわり、不審の色面にあらはれ、去りがてにやをら立ちわがりたる女の背姿つく〳〵と見まもつて、やがてその眼は夢みる如く、何處ともなく空を視つめしが、胸の奥のその奥深く、遠く靜にさゝやく聲あり、

「星川たみ。」

われとわが聲なき聲に驚かれたる容なりき。

（六）

「星川たみ。」

初は見たとのある人によく似たおも影のやうに、少時してたしかに見たとのある人の面影とおもひはてはては見たとのあるその人に相違なし、否見たとはおろか、われには世に最も親しきものにてわつたるその名、とやうに壯漢の胸の底なる聲はかさねてこの名を繰返へしぬ。

わが腦味噌を掻きまわし見れば、成程、斯ういふ名が、頭顱の鉢の

裡に、しかも寫直版のやうに印しついて居る。その人をこそ、わが情念からは疾より苔蘚蒸す土の底深く、忘却の墓中に葬りたれ、その名は、鐵鑿に刻むだ碑文の字となつて存せるなり。すでに墓に葬つたその人の、名さへ聞くを忌みたれば、墓表までも除去らむと思ひしは幾度ぞ、わはれわが腦味噌の水の如き清さを、この墓土折々崩れて、渾濁に染めむとしたること幾度ぞ、忌はしい墓表、粉砕微塵にと思ひしが、かくては腦味噌の清き部分をも併せて暗黑なる死の淵に流し、われわが肉と骨と諸ともに忘却の墓に葬るなり、と思ひかへして、一度濁りし腦味噌の傷痕は終に癒すべき術もなし、墓を發いて慘ましい腐つた骨と肉と淺ましい屍に觸れむよりは、せめて

は墓表の名をだに留め、苔の重るにまかせ土の蔽ふに委ね、何時かその名も土深く埋もれむと望みしを。あゝ、頃日の暑さに、土精に蒸された亡者の鬼奴、金輪那落歸り來ぬ昔の春を思ひ出し、腐つて頽れて吐く息臭きその口に、何の痴言叫び出せるか。

穩かなる雲山の夢破れたり。おもしろき逍遙の興醒め果てぬ。限なく底知れぬ深くも遠き世の外の夜見の國より、悲しい慘ましい泣く人の子の聲、聞きつけたるやうな情懷、電光の如く閃めきぬ。その閃きに耳聾いたるか、磯山松の風の音聞かぬ。眼は盲せるか、海波樣々の色見ねど。茫々然として讀さしの書拋つて長嘆一聲。

＊　＊　＊　＊　＊

「氷を持て參りました」、

耳忽ち鼓膜を戰かされ、言辭はなくて、其方をむけは、その人あり。

女は思ひ入つた風情にて、

「天春さんでいらツしやいましたか、……まことに久濶でございました、」

雙瞼の眼に嫣然しながら、幾らか憚る氣色に男の樣を覗ひぬ、男は儼として膝を正し、

「さうです、天春武夫です、貴孃は……星川のおたみさんですな、

語尾には力がわつてさながら分りきつたことを改めて問ふかの如く聞ゆる、女は愧ぢ入つた躰にて、

「はい、斯樣なとこでお目にかゝるのはお恥かしう厶います」

「……」

男は氷を含むで冷然に默し、女はそこの團扇を把つて男の方に輕く風をやりながら「酷いお暑さでございます、……前刻濱に入らしつたは貴郎でございましてせう、どうも似て居らつしやると思ひましたが、よもやこちらに御逗留とは存じませんでした」、

「さうでしたか」、

返辭は冷く、男は眸を据ゑて時々女の顏を凝視り、女はまた眼を偸むでは男の風采を覗ふ、彼方の見るとき此方は避け、此方の見るとき彼方は反らす、かくて不圖出で逢うた女の眼には、濡みあつて、

時ならぬ露を睫毛に宿したるが、此方はしか視しわが眼を疑がひぬ。

（七）

おたみは言はふか言ふまいかと思案の餘りに、手巾を捧り、天春は味はふとは見ねどに頻に氷を咬む。

「武夫さん」、

とおたみの顔を擧げながら言つた言辭は殆ど口の裡に籠つて、聞ゐたか聞ゐぬか、天春は無言なるに、さながらかういふ稱呼をするではなかつたと氣がついたらしく、

「今一度お目にかゝつて、是非おわびがしたいと思つて居りましたがお住居もわかりませぬそれと心がけて緣因の人に聞いても知れぬ……

……妾も身から出た錆ですけれど、種々の難義もいたしました。昨日から此家に參るとになつて、おもひがけぬお目にかゝりましたは、まだ御緣の盡きぬしるしでせう、もうお目にかゝるのも厚かましい、憎い奴と思召しませうが、是非一度お目にかゝつて昔のおわびがしたうございました」

「さうでしたか」

かゝる想氣なき應も無理ではなしと女は期したる如し。

「あの只今の御住居は、やはり東京で……皆樣は御變りもございませんか」、

「今は四谷に居ます」、

「祖母さんは御丈夫で」、
「祖母ですか去年没しました」、
「おや、まあ、妾はいろ〳〵御世話になりましたのに……あれぎり御無沙汰になつちまつて……さぞ御寂しうございませう」、
こう言つたおたみの胸には、天春の祖母さんの顔が見える、わが家の貸家に祖母と唯二人暮しの天春武夫、眉目鮮かな少年、祖母孝行の若者、兄とは年輩の同じなるに疎からぬ往來が縁由の緒、何時か祖母さんがわが親のやうな心地して、天春の家に一日を過したとは敷知れぬ、われにもわらぬ戀そめし武夫の情無かりしを、やう〳〵に動かした末は、深き契と誓ひしを、まゝならぬ浮世の羈絆、兄の

放埒、父母の無道、天春へは嫁られぬと非を理につけて說かれし淺はかな娘心の、浮いても居しかず、さぞ恨まれむ濟まぬとは思ひながらの他緣ば夢の一時。離緣といふ情なき身となつて家には歸れど曩昔のわれは悔ひても復らぬ、そればかりかは天春は引移つて行方わからぬ、わが家はやがて他人に渡る、奢るもの久しからぬ例を目前一家の退轉、都にも住みかねて、田舍の此地に僑居の果が、今のわが身なりとは。あゝ、情厚かつた天春のお祖母さん。其膝元で書讀んで居た武夫さんの邪魔をした曩昔のわが身にかへさむとは、未來永劫……せめては優しい言葉だけでも。思ふとひとしく心情ばかりは昔の處女に返つて、わが身かくいふ權のあるかなきかをも忘る〳〵

ばかり、

「武夫さん」、

とは言ひかけしが、儼として膝も顔さえ笑も湛えず、口の氷のそれは溶けても、深くも堅く結んだ情の鎖鑰は解けざる男の様子に、言は改まつて、

「お祖母さんが居らつしやらないじやあ、貴郎お一人で」

「さうです、一人で呑氣なものです」、

平然たる語調は、なか〳〵に女の胸をつきぬ。

「では、まだやつぱり御一人で……」、

「今では如何やらかう世の中を笑つて暮らせるやうになつたです、こ

れは貴嬢のたまものだとおもつて居ます、あの時貴嬢の言葉がなけりや、私も奮發はしなかつたかも知れない、昔の失望は今の希望、これからもつと勉強しやうと思ふです、貴嬢を今かういふところに見出すのは甚だ不思議に思ふですが、いろ〳〵、難義もされましたらう、それは承はらむでも御察しします、まあ昔の事は水に流しませう、すむもすまぬもあるもんですか、言ふのは死んだ子の年數へですもの」、

男は初めて莞爾と笑つたが、その笑が女にはなか〳〵に錐で胸さす痛さなりき。

× × × × × × ×

（六）

天春はうち出した事を言ひ了つた後は、また元のやうに嚴となつて、おたみは言葉の繼ぎはなかりしが改めて、

「當分は御逗留でございませうね」、

「さうです、二月ばかりは此地で遊ぶつもりでは來ましたが、まだ如何なるか分らむのです」、

折から廊架の足音に氣が注いて、おたみはやがて辭し退つたる後に、武夫が容貌はまた惻然たる色動き、胸の底にて抉るやうな痛苦を感じ復びば書を讀む氣も催さゞ、欄干に凭れしが、つと起て樓を下り、裏路づたひ濱邊に出でぬ。

朝の風景にひきかへて、晩濤の聲稍高く、海風一層凉嵐を吹いて、萬樹の松韻颼々たる調は妙なり奇峰の雲は連山の上に一帶の山をかさねて、高く聳えたるは封建時代の古城のやうに、低く列びたるは砦にも似たり、しつとりして動きもせずかはりもせぎ、夕陽の入るをさながら待つか。海蒼茫として波の襞績多く、天杳々として青藍の色少し褪せたり。汀より汀、磯より磯に、曲浦に遠くうちつゝく波の白脚、眞砂の上に水紋を描きては消し、消しては描く。

ざんぶりと潮浴びて、波の弄ふに任せたる身の、眺矚に入つたる風景は、今朝のそれと變り天はや朝の天ならぎ、水はや朝の水ならぎ、わが心また朝の礙なきわれならぎ、天に見入れば、雲に曩昔の夢浮

び、海に入れば、水に曩昔の影映る。波聲に人あり、松聲に人あり、耳に女の聲あり。目に女の影あり。その影その聲、見ゆるばかり、聞ゆるばかり、觸るべからぜ、聞ゆるばかり、觸るべからぜ。眼前その聲を響かす唇、その影を彩る姿の人と名づくべき人はあれども、哀れ、そは夢前の人ならぜ。年前の人ならぜ屍なり、墳墓なり、骸骨なり、窒素と酸素と化合した動物なり。「星川たみ」名は胸の底にたしかにある、否、その聲その影皆星川たみの聲と影ばかり。「星川たみ」その人ははや死んで七星霜。深くも深き海底に沈んだか、高くも高き天の極に飛び去つたか、世を隔つたる見がたき人となり了つた。

聲と影とにつきまとはれて苦悶する、痴だ、愚だ、阿呆だ。忘れし

よ、女に失へるものを男に成就するが、天春武夫の本領であつたるを。

潮ふきあへぜ立去る濱邊。海よ、山よ、雲よ、波よ、田子の浦回の眞砂地よ、千本の松の松原よ、二ケ月の友にと游ぶつもりなりしが、今日障ると湧き出でぬ、またの折をば期して逢はうよ。いざや分れむ自然の景よ、塵汚の外に恙なかれよ。獨語ちたる武夫は、折しも波にかゞやく夕陽を背にして聽濤樓に歸りしが、困夢の短夜忽ちあけて、あくる日には彼の八疊の間にむつつりさんの姿は見ゑぜ。

× × × × × × × × × × × ×

其夕、聽濤樓の亞字欄頭、鷲巢の嶺の邊より、圓かに出でたる月を

見ながら、一通の書を繙げつく〳〵見入て、支離滅裂に引裂いて、
噛みにじむだ唇かたく、兩眼よりはふり落る涙をぬぐひもあへず、
やがて引き裂いた手紙を、ひしとばかり抱きしめ、がつぱと俯して
泣きし女あり。
夕暮の風何時にかはらむ、磯山松におとづれて、涼しさを迎ふ子守
唄。
「坊やはいゝ子だねんねしな、この子はいゝ子だねんねする、山で
木の數茅の數、天へのぼつて星の數、千本松原小松原、松葉の數
よりまだ可愛い」。
罪のないその聲戀し。（三十一年）

風吹去

龍釣歸來不繫舟。　（司空曙）
縱然一夜風吹去。　江村月落正堪眠。

又一村

水重山複疑無路。　唯在蘆花淺水邊。
　（陸放翁）
柳暗花明又一村。

詩國小觀 終

明治三十三年六月十三日　印刷
明治三十三年六月十六日　發行

詩國小觀

定價金四十錢

著作者　角田勤一郎　大阪市東區南本町四丁目卅六番屋敷
發行者　金尾種次郎　大阪市西區阿波座一番丁六拾番屋敷
印刷者　矢野松吉　大阪製本印刷株式會社代表者
印刷所　大阪製本印刷株式會社　大阪市西區阿波座一番丁六十番屋敷

發行處　金尾文淵堂書店　大阪市東區南本町心齋橋筋角

不許複製

アートタイプ版入

新意匠頗美裝　定價金四拾錢　郵稅六錢

薄田泣菫君著

赤松麟作君畫
丹羽默仙君畫

暮笛集

增訂第二版

暮笛集は薄田泣菫君の新詩集なり。斯集出でゝ是非褒貶の聲相次ぎ、評壇爲めに幾ん波瀾を擧ぐ。今詩に刪正を加へ巻尾に有ゆる江湖の評言を摺り加へて再版は成りぬ。表紙の彩畵、本紙の二度摺、挿畵の朱、緑、紫、褐に染め分けられたる、孰れか出版界の珍にあらざる。評言抄出して次にあり、この集の一班を窺ふに足らんか。

新小說（後藤宙外君）上畧……泣菫が作は優に藤村晩翠の二氏と對壘して決して下らざるの伎倆あるは此集を讀む者の必ず首肯する所ならん。從來慣用せられたる七五又は五七の調以外更に八六の調を選みて一種の雄勁にして沈痛なる格を用ゐたるは新詩壇に一大貢献をなせる者と云はざる可からず。……下畧

國文學（與謝野鐵幹君）美む勿れ市にたち、唇赤き友の上、百千の笛を調ふるとも聽くことあらじ斯る音は。

讀賣新聞（森靜君）上畧……世の暮笛集を讀まん人に先づ泣菫の詩の「趣」を味はんことを切望すると共に彼は如何に詩の爲めに熱中して而ていかに詩のなやみに轉輾反側しつゝあるかを記憶せられんことを切望せざるを得ず。

櫻州青年（黑田湖山君）上畧……自分の見た所泣菫氏の第一の長所は其火の如き熱情である此熱情は到る處に迸つて金石の音をなしつゝある……下畧

女學雜誌（青柳有美君）泣菫は詩人也、熱情ある詩人也恐らくは美神を崇拜して物狂はしくなる迄の詩人をるべし……その翰窠として苦心せるの跡明に文字の上にあり、思想の如き富贍にして單調に陷れる弊見えず……下畧

帝國文學　上畧……泣菫は情あり涙ある詩人なり……楚々清婉の筆以て吟誦すべく、多恨多感の辭以て同情の涙を催すべきは此集の特色……下畧

萬朝報（堺枯川君）蕪雜粗漫、平弱無味予は勉強して僅に其三分一を讀誦し了りぬ……下畧

世界之日本　其聲不平にして調は悲愴を帶び、其句は短刀直入的にして、其詩は謔々たる春に非ず、寧しろ秋霜烈日の氣を吐す……下畧

＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊

慶典紀念

文學雜誌「ふた葉」臨時增刊

東宮御婚儀の紀念として

此冊子を捧ぐ

定價金拾貳錢　郵稅金壹錢　每月一回發行

所右

長春譜

臨時增刊

五月十日、東宮婚儀の大典を擧げさせらる。生を昭代に享けこの嘉辰に遇ふ。所謂盛壇の士平生の繡口をつくして謳歌せであるべきや。乃ち書を馳せて當代知名の文士五十名に需むる所あり、麗章相繼いで到り、爰に長春譜の一巻をなす。錦繡の眺め、金石の響きひそかに以て斯の嘉辰を謳歌するにあやまる無きを思ふ。あゝ長春譜これはことほぎの聲、のぞみの聲、忠良なる民が誇るに足るべき國歌を見るべけんなり。

三丹　三丹
木羽　木羽
天默　天默
遊仙　遊仙
君君　君君
編彩　編彩
輯畫　輯畫

新體詩集

行く春

薄田泣菫君　新著　滿谷國四郎君　畫

在五中將の咏に曰はく「花に厭かぬ嘆きはいつせしもかとも今日の今宵に似る時ぞなき」と。行く春は花に厭かぬ嘆きをのべたるもの、これを披いて錦綺の眺めあるにわらねば鄭ちて金石の響するにも非ず。譬へば夕暮の風に搖ぐ蘆の葉の如く微韻いさゝか詞流の邊りに趣きを添へ得べくば作者の望足る。吟身未だ愁去らざる煩らへるを慰む可くもわらねど許し玉はゞ花落ちて春辭するの夕盃をふくみて君と共に涙を揮ふを辭せざるなり。包む所牧童歌、石像賦、海棠歌、老鶯、郊公賦、放金朱鳥、悼情死歌、暮春頌、巖頭沈吟、夕の歌、嬌語絕句三十篇以下斷片十數首、詩題の多くが關はる季節によりて名づけてゆく春といふのみ、

クロース綴、寸珍
新意匠頗美裝、ア
ートタイプ版入
定價　金四十錢
郵稅　金六　錢

社會小說

金字塔

月郊高安三郎君著
中村不折君畫

維新以來社會の變遷を景として學者政事家宗教家資本家勞力者華族貧民貴女工女孤兒等出入！主人公は千古の疑問に苦しむ者悲劇か喜劇か喜悲劇か悲喜劇か文學の革新を望む者人生觀を求むる者は胸を打つ處あるべし

大文字◉殺生石◉黃色の光◉闇◉義理の奥人情の底◉答
目　ひとつ◉美人の手◉又如何◉答さま〳〵◉沙漠◉倶樂園
次　◉同じ男か◉同じ女◉旋風◉花輪◉奴隷◉絶壁◉師走の
月影◉むくひ◉赤き光

頗美裝アートタ
イプ版入

定價　金四十錢
郵稅　金四　錢

文淵堂發兌書籍雜誌發賣元

大阪市南區心齋橋一丁目　松村九兵衛
大阪市東區備後町四丁目　吉岡平助
大阪市東區備後町四丁目　盛文舘書店
東京市神田區表神保町　東京堂書店
東京市日本橋區通三丁目　林平次郎
東京市神田區裏神保町　上田屋書店
京都市寺町通二條下ル　河合文港堂書店